
サラリーマン水戸黄門

嶋 雄一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サラリーマン水戸黄門

【Nコード】

N3271W

【作者名】

嶋 雄一

【あらすじ】

齊藤真介が勤める中堅商社の名古屋営業所の営業会議中に、その奇妙な出来事が起きた。バカ上司の小泉所長と前田課長が、信じられない災難に出会ったのだ。そして齊藤は行く先々で、奇妙な事件に遭遇する。その事件に巻き込まれるのはバカ上司や、悪人だ。それはすべて異次元の時限爆弾が原因だった。

齊藤と腹心の藤村は事件解明に乗り出し、ついに異次元の時限爆弾の正体を突き止めた。それを境に二人の人生が大きく変わり始める。異次元の時限爆弾の正体とは何か！ 大きく変わり始めた人生

とは！

バカ上司をズバツと成敗する斉藤と藤村。気分爽快！痛快！
快感！ハラハラ、ワクワク、ドキドキの今までに類のない超エンタ
ーテイメント・サラリーマン小説！

第1章 奇妙な出来事

その小さな事件といつか出来事は、ある営業所の営業会議の最中に起こった。一見、中高年に多い生活習慣病ではないかと思えるその症状は、それとは少し様子が違っていた。その出来事は例えて言うなら、コップの水が溢れたときに起きるようなものだが、誰もその異次元のコップの存在を知らなかった。異次元のコップの水が溢れたときに、異次元のパワーを持った時限爆弾が爆発し、今まで誰も見たことのない現象が起きるのだ。

斉藤真介が勤務している名古屋営業所の業績は良くない。先期は予算未達で終わったが、今期になっても良くなるどころか、先期よりも悪くなりそうな気配だ。明日は毎月恒例の営業会議だ。斉藤は、小泉所長とお客様のところへ向かう車の中で、小泉所長の口から信じられない言葉を聞いた。

「明日の営業会議では、お前たち営業マンを徹底的に追及してやる！ 覚悟しとけよ！」

小泉所長は業績悪化の原因、業績が良くならない原因は、すべて営業マンが悪いと考えている。だから小泉所長の頭には、徹底的に営業マンを追及しようという発想しか浮かばないのだ。

翌日の営業会議の日、実績が予算より大幅に少ない斉藤は、朝から憂鬱だった。まして昨日所長から、

「明日の営業会議ではお前たち営業マンを徹底的に追求してやる！ 覚悟しとけよ！」と言われたのが、頭にこびり付いていた。

斉藤は憂鬱な気分を引きずりながら、不景気になるとどうしてこつても会議が多くなるのか？ 上の人たちは、会議をすれば売り上げ

が伸びるでも思っているのか？　ここのところ、やたらと会議が多い。そんなことを思いながら会議室へと入って行った。

営業会議は朝九時から夕方五時までの長丁場だ。長丁場と言っても、前向きな意見や新しいアイデアが出るわけでもなく、必ず誰かが吊るし上げられて、会議は終了する。毎度のことだ。

会議室の中はテーブルがコの字型に並べられてあり、中央にプロジェクターが置かれている。各営業マンは、プロジェクターにパソコンを繋いで発表する。会議の内容は、各個人の今までの業績発表が中心となっており、予算に対して実績が少ない場合、所長と営業課長の集中砲火を浴びることになる。

業績が悪い営業マンは、グウの音も出ないほどに徹底的に痛めつけられる。彼らが会議室を出るときは肩を落とし、溜息をつき、目は虚ろで、さながら魂を抜かれた屍みたいな状態となっている

今では、どこの会社でも会議中は禁煙というところが一般的となっているが、ここ名古屋営業所では喫煙しながらの会議となっており、タバコを吸わない斉藤たちにとっては、甚だ迷惑な環境となっている。ワンマンの小泉所長がタバコを吸うので、誰も禁煙にしようと言い出せないのだ。

九時からの会議開始となっているので、五分前には営業マン全員が席について会議の開始を待っていた。出席者は小泉所長、営業課長の前田、営業マンの太田克典、藤村健二、黒木実、内山雅和、岡田光一と斉藤真介の合計八人だ。営業会議なので、出席者は営業課だけのメンバーだ。

会議が始まると、その小さな出来事は、いつ起ころうかと様子を伺っていた。と言うよりも、異次元のコップに少しずつ水が入っていき、その水が溢れると同時に起こるのだ。会議が始まるのと同じ時に、コップには着実に一滴ずつ水が落ちていた。異次元のパワーを持った時限爆弾の時計が、一秒ずつカウントダウンするのと同じように。誰もその時限爆弾に気づいていないのだが、すでにその爆弾は秒読み段階に入っていた。

会議ではいつものように、背もたれが折れるのではないかと思えるぐらい、小泉所長がふんぞり返って腕組みをして座っている。口への字に結び、眉間にシワを寄せて営業マンを睨みつけている。その隣では課長の前田が同じように、仏頂面で営業マンを睨みつけている。

最初に営業全体の予算と、現在までの実績が前田から発表された。上から降りてくる予算は、とうてい達成できそうもない根拠の無い

数字となっている。発表をしながら前田は、ちらちらと小泉所長を横目で見ている。前田の発表に対して小泉所長の表情が曇ると、それを察知した前田は、巧みに言い訳に入る。その言い訳とは、営業マンへの責任のなすりつけだ。業績未達の原因はすべて営業マンが悪いと言つように、言葉巧みに説明するのだ。これも毎度のことだ。

前田課長の発表で、小泉所長の顔色が一層険しくなった。営業マンからは、いつ爆発しようかと噴火を待っている活火山みたいに見える。その表情に営業マンたちは一様に怯えていた。営業マンの緊張した様子を小泉所長は分かっていたが、今から自分にふりかかる出来事には、何の気配も感じていなかった。否、感じるはずはなかった。自分の活火山が爆発したときに、それ以上の被害が自分に降りかかってくることを。

最初の発表は、一番端の席に座っていた太田を前田課長が指名した。太田は恐る恐る発表を始めた。業績が悪いので自然と声が小さくなる。

「太田！ なんだお前の声は！ 二十八歳と若いんだろっが。もっと元気良く発表できないのか。そんなことだからお前はいつも業績が悪いんだ！ 聞こえるように発表しろ！ バカヤロウ」

発表が始まって一分も経たないうちに、活火山が噴火した。

「わかりました。すみません・・・」

小さい声で謝る太田を、二度目の爆発が襲った。

「バカヤロ！ 全然、分かつたらんな！ もういい、お前は後回しだ。声を出す練習でもしとけ。バカが！」

次の発表は太田の隣に座っている藤村だ。藤村は太田より五歳年上のベテランだ。緊張しきった表情で、パソコンをプロジェクターに繋いだ。全員、藤村同様に緊張しきっている。誰も身動きしない。瞬きもしていないのではないかと思えるほどだ。

内山の右手が藤村のボールペンに当たり、テーブルから転げて床に落ちた。コッソソ！ という音が、ピーンと張り詰めた空気に突き刺さるように、異様に大きく響いたように聞こえた。その音に藤村はピクンと反応した。額には汗が滲んでいる。ゴクリと生唾を飲み込んだ藤村が、今までの業績結果をプロジェクターに映した。それを見た小泉所長は鬼の形相になっているが、まだ爆発しない。藤村が業績の悪い理由を説明し始めた。

「実績は予算の六割です。その理由なんですけど、K社の業績が悪く、今回受注を見込んでいた案件が中止になりました」

「だから何だ！ 中止になったら別の案件を取って来い。バカタレが。M社のほうはどうなってるんだ！」

「はい今月、百万円注文貰いましたが、所長もご存知のように、先月から追いかけている案件は半年先になるそうです」

「たったの百万円か。何やってるんだ！ 先月の案件が半年先になるだとか？ どんな営業のやり方をやってるんだ。来月注文取るためにどうするんだ？ なぜ黙ってるんだ！ おまえ、やる気があるのか！ 今月の目標を達成するためにどうするのか、明日中に報告しろ！ くだらん内容だったら許さないからな。分かったか！」

営業マンたちは、小泉所長が怒り出したときのことを小泉火山と呼んで、怯えていた。小泉火山が爆発を始めたら止まらないのは毎回のことだが、今回は違っていた。小泉火山の爆発が大きいほど、営業マンたちを苦しめるほど、異次元のコップに溜まる水が急激に増えているのだった。コップの水は溢れる寸前のところまで来ていた。あと数滴で溢れ、今まで誰も見たことのない恐怖が、襲い掛かるのだ。

次の発表は、小泉所長のお気に入り黒木の番だ。黒木の発表が始まった。今までとは打って変わって、小泉所長はニコニコ顔で発表を聞いている。

「今のところ実績は、予算の七割しか達成していません」

藤村の発表のときは、ここで小泉火山が爆発したのだが、ニコニコしながら聞いている。

「あとの三割はどうなるかと言いますと、C社で五百万円が三件、D社で二千万円、E社で千五百万円を来月受注できる予定ですから、予算よりも二割ほど多い受注となります」

「さすが黒ちゃんだな！ 俺の期待を裏切らないのはお前だけだ。藤村に内山、お前ら少しは黒木を見習え。やる気がないのなら、北海道へでも転勤してみるか。それとも九州がいいか」

発表を終えた黒木は余裕の表情で座っている。あとは他の営業マンの発表を聞くだけだから気が楽なのだろう。

斉藤は黒木の発表内容が気になった。どう考えても黒木が発表したような注文が、C社、D社、E社から出るとは思えない。この三社は中小企業ではないが大企業でもない、いわゆる中堅企業だ。三社とも業績は悪くはないが、設備投資があると聞いていないし、過去の実績を見ても、黒木が発表したような大きな注文はなかった。三人の発表が終わったところで昼休みを告げるチャイムがなり、十三時まで昼休みとなった。昼一番の発表は斉藤からだ。斉藤は太田と岡田、藤村と一緒にラーメン屋へ入った。小泉所長は前田課長と黒木と三人で、ファミリーストランへと入って行った。

時間の経つのは早く、昼の始業を告げるチャイムが鳴った。昼の発表は斉藤からだ。斉藤の業績も良くないので、小泉火山が爆発す

るのは目に見えている。

斉藤の発表が始まった。

「現在のところ実績は予算まで行っていない。予想ですが、今のお客様の状況から見て、下期の予算達成は非常に厳しい状況です」

「なんだと！ 予算達成は必須だと言ってるのを聞いてなかったのか。未達じゃ済まされないんだぞ！ この前、H社で五百万円受注できると言ってた案件はどうなった」

「受注しましたが三百万円です。五百万円とは言ってます」

「きさま五百万円と言っただろ！ なあ、前田課長」

「はい私もそう聞きました」

「そんなはずはありません。五百万円受注できるかと聞かれたときに、はつきりと三百万円ですと言いました」

「なんだとこのヤロ〜。きさまウソを付くきか！ 前田課長も五百万円と聞いてるんだぞ。それとも俺をウソつき呼ばわりしてるのか！」

「バンツ！ 小泉所長が力いっぱいテーブルを叩いた。全員がビクツとするのと同時に、金属製の灰皿がテーブルから落ちてコロコロンと回った。タバコの吸殻が床に散らばった。」

「斉藤、H自動車からの注文がたったの千万円だぞ。この時期だったら四千万円は注文をもらっていないと予算が達成できない。それなのにお前の業績はまだ予算の半分以下だ。どうやって予算を達成するのか言ってみろ！」

「正直なところ、担当客先が少なすぎます。たったの二社で一億円の予算は無理です。私が担当する以前の二社の業績を調べましたが、実績から言えば三千万円です。予算達成するためには担当客先を増やしてください」

「分かった。増やしてやろう。その代わり予算も増えるからな。前田課長。どうなってるんだ斉藤は。やる気がないんじゃないのか」

「予算を達成するために考えて行動しろ、いろんな部署の担当者に会えと言ってるんですが、なかなか注文を取ってこないんです」

額の汗をハンカチで拭きながら、いつものように前田は部下に責任のなすり付けを始めた。

「要するに、斉藤がサボっていると言っていることだな」

「私は斉藤君にできる限りのフォローはしています。注文をもらうまで帰ってくるな。ゴミ箱も漁ってこいと毎日口を酸っぱくして言ってるんですが・・・」

「斉藤、明日中にどうやって予算を達成するのか報告しろ。客先を増やすと言っるのはダメだからな。それと会議が終わってから、応接室に来い。お前の腐った根性を叩き直すために、直々に説教してやる！」

小泉所長は鬼の形相で斉藤を睨みつけ怒鳴りつけた。その時すでにその小さな出来事は、カウンタダウンに入っていた。ポチャン、ポチャン、ポチャン。異次元のコップに溜まった水が、あと数滴で溢れるところまで来ていた。

ポチャン、ポチャン、ポチャン。カウントダウンは、場の雰囲気
に呼应しながら進んでいて、あと一滴で溢れるのだが誰も気づいて
いない。

「黒ちゃんを除いた全員。やる気が無いのなら辞める！ 俺の言っ
てることが間違っていると思うものは手を挙げる」

「誰も何も言うことはないのか！」

そう言っただけの一言を言おうとした瞬間、ポチャン。コップの
水が溢れた。それと同時に、今まで誰も見たことのない異次元の爆
弾が爆発した。その衝撃は小泉所長を狙ったかのように襲い掛かっ
た。

小泉所長はカツと目を見開き、顔を硬直させ、金魚のように口を
パクパクし始めた。まるで、首に巻きついているロープを振りほど
くかのような仕草で、必死に首を探っている。明らかに呼吸が出来
なくて苦しんでいる様子だ。

「所長！ 大丈夫ですか！ 誰か早く救急車を呼べ〜」

前田課長の悲痛な声が会議室に響き渡った。その声は会議室の外
の社員にも聞こえ、社内が騒然となった。斉藤が救急車を呼ぶため
に会議室を出て受話器を取ったと同時に、小泉所長が元に戻ったと
誰かが叫んだ。

その声を聞いた斉藤は、受話器を置いて会議室に戻ってみた。小
泉所長は、まるで溺れて息が出来なかった後のように、ゼ〜ゼ〜と
肩で大きく息をしている。五分ほどして落ち着いたところで、前田
が心配そうに声を掛けた。

「所長、大丈夫ですか？ 救急車を呼びましょうか？」

「何かが首に巻きついていて、息が出来なかった。死ぬかと思った」

首には爪で引っかいた傷が数本残っていて、血が流れている。ワイシャツの襟は血で真っ赤に染まっていて、見るからに痛々しい。「とにかく今すぐ病院へ行つたほうがいいですよ。斉藤、車で病院まで送って行ってくれ。今日の会議はこれで中止とする」

前田の言い草に少しカチンと来たが、斉藤は小泉を病院まで送ることにした。営業マンたちは小泉所長を心配するよりも、会議が中止になったことが嬉しかった。彼ら全員、腹の中では小泉所長を心配するどころか喜んでいた

病院へ行く車の中で小泉は考えた。一体何だったんだ？ 確かに首に何かか巻きついてた。誰かに何かで首を絞められていた。首を擦りながら考えてみると、今でも絞められた感触が記憶に残っている。

そんな馬鹿なことがあるわけがない。皆も見ていたし、そんなことは常識的に有り得ない。馬鹿げた考えだと一蹴しようとしたが、やはり首を絞められたとしか思えない。

病院へ着いた小泉は、受付で問診表に症状を記入すると、待合室で待った。さっきの状況を何度思い出しても、誰かに首を絞められたとしか思えない。小泉は看護婦に呼ばれ診察室に入った。四十代後半と思える男の医者が、診察にあたった。小泉は会議中に起きた出来事を話した。

「息が出来なかったというのは、どんな感じだったんですか？」

「息が吸えなかったんです。たとえば言うなら、首を絞められているといったような感じです。実際に絞められたわけではないんです」

「そうですか。ちょっと首を見せてください」

医者は首の周りを念入りに調べ始めた。首には爪で引っかいた五センチほどの見るからに痛々しい縦傷が数本あり、血が滲んでいる。その傷からは、呼吸が出来ずに苦しんでいる小泉の姿が読み取れた。

「変ですね。さっきあなたが言ったように、何かで絞められたような跡がうつすらと残っています。これは自分で付けたものではないですね。首の周りを取り囲むように残っていますから。念のために警察に連絡しましょうか？」

何かで絞められた跡が残っていると云う医者言葉に、一瞬背筋がゾクツとするのを感じた小泉だったが、警察へ連絡するのは断った。血圧・体温測定、血液検査、心電図、胸部のレントゲン、腹部のエコー検査などをしたが、特に異常はなかった。明日、脳のMRI検査を予約して病院を後にした。

その頃営業所では、いろいろな噂が飛び交っていた。

「頭がおかしいんじゃないか」

「遊び歩いているから新種のウイルスに感染したんだ」

「性格が悪いから天罰が下ったんだ」

不思議なことに、小泉所長を哀れんだり可愛そうだといった声は全く聞かれない。それどころか、小泉所長の不幸を喜んでいる社員がほとんどだ。夕方五時ごろに会社に戻ってきた小泉所長に、前田課長が真つ先に駆け寄った。

「検査の結果はどうでした？」

「ひと言で言えば原因不明だ。医者は首を絞められた跡があるから、警察に連絡しようかと言ってたが、そんなことは有り得ないから断った。脳のMRI検査を予約してきた」

前田が小泉の首を見ると、確かに何かで絞められたような跡が、丸く残っている。

「所長、首に残っている跡を見れば、医者が言ってたのは分かりませんが、誰も首を絞めてなんかいませんよ。会議室にいた全員が証人です」

「そうだな。俺もそれは分かっている。だから辻褄が合わないんだ」
この日は小泉所長が早く帰ったので、通称、腰ギンチャクの前田課長も早くに会社を去った。

「斉藤さん、軽く行きませんか？ 話したいこともあるんで」

藤村が酒を飲むジェスチャーをしながら、斉藤に声を掛けてきた。「俺もグチを言いたいし、軽く行くとするか。花金だしな」

夕方の六時半、斉藤と藤村は行きつけの居酒屋に居た。フランチャイズのこの居酒屋は、豊富なメニューとリーズナブルな価格で人気がある。最近急激に伸びてきており、都市部を中心に出店攻勢の戦略を展開している。テーブル席に座った斉藤と藤村に、アルバイトのウエートレスが注文を聞きに来た。

「取りあえず、生ビールの大ジョッキふたと枝豆」

ふたりは運ばれてきた生ビールの大ジョッキで乾杯をすると、渴いた喉に生ビールを注ぎ込んだ。

「かああ、美味しい！」

取りあえず生ビールという言葉に続き、ビールの美味さを伝えるために誰もが口にする常套句を斉藤も口にした。

「今日の会議はビックリでしたね。所長どうしたんですかね？ 一緒に病院に行つて、どうでした？」

「あまり話をしなかつただけど、ひと言で言えば原因不明。ただ、首を絞められた跡があると医者が言つてたので俺も見てみたら、確かに何かで絞められたような跡が残つてたんだ。あの席で、誰もそんなことしてないのに不思議だよなあ」

「そうでしたか。フッフフ、ハハハハ、アツハツハツハ」

藤村は何が可笑しいのか、しばらく笑い続けた。

「おいおい、一体どうしたんだ？」

「驚かないでくださいよ。実は、所長の首を絞めたのは僕なんです」「冗談も休み休み言え。誰も首なんか絞めてないぞ。所長が引つかいてたときに、何かの拍子で自分で絞めたんじゃないか？ それか、誤つてネクタイを引っ張つたんじゃないのか？ あの時はそんな感

じだったぞ」

「誰にも言わないでくださいね。あのとき、バカ所長にもの凄く腹が立ったんです。それで、このヤロウ、殺してやる。死ね！ と強く思っただんです。そしたら、それと同時に所長が苦しみ出したんです。もしかしたら僕には超能力があるのかも知れません。マジですよ」

藤村は冗談ではなく、真面目な顔をして言った。

「SF映画じゃあるまいし、そんなことがあるわけないじゃないか。そんなアホなこと他の連中には言うなよ。そうでなくても所長の耳に入ったら、それこそどんな仕打ちを受けるかわからないからな」

「分かりました。でも、もしまた腹が立ったら、所長は同じ目に合いますよ。断言できます」

「まあ、そのときになったら、ひと言声を掛けてくれよ。慌てないように準備しておくから」

斉藤は、藤村の真顔の話しぶりに吹き出しそうになった。

翌週の月曜日、小泉所長は首に包帯を巻いて出社していた。普段なら仏頂面で肩で風を切り、さながらサラリーマンヤクザ風に歩くのだが、今日は心なしか元気がないように見える。

朝礼が始まったが小泉所長は元気が無い。その姿を見て藤村が斉藤に目配せしながらニヤリと笑ったのがまずかった。運悪く、小泉所長に笑ったところを見られてしまったのだ。

「藤村、俺が怪我したのがよほど嬉しいみたいだな。朝礼が終わったら、応接室へ来い。斉藤、お前も一緒だ！」

朝礼が終わり応接に二人が入ると、小泉所長が声を荒げて言った。

「お前ら、俺が話しているときに何をニヤニヤしてた？ 俺の不幸がそんなに嬉しいか？ 死ねばいいとでも思ったのか？」

「とんでもないです。決してそんなことはありません。笑ったのは先週、斉藤さんと飲みに行ったときのことを思い出したからです」

「朝礼のときに笑うほど面白いことってどんなことか、聞かせてくれ。俺の話を聞かずに思い出していたんだから、よつほど面白いことなんだろうな！」

「いえ、下らないことです。言うほどのことではありませんので・・」

口から出まかせを言った藤村は、急に言われても面白いことなど考え付くはずはない。額からは汗が滲んでいる。

「まあいい。それより、予算達成の施策は考えてきたんだろうな？

土日で考える時間は充分あったはずだぞ。言ってみろ」

藤村にしても斉藤にしても、日々考えながら営業活動をしているのであって、そんなに簡単に売り上げが増える画期的な方法など、

考え付くわけがなかった。

「いつまで黙ってるんだ。お前ら、まったくやる気がないんだな。分かった。もういい。その代わり、毎日十萬円の注文をもらうまでは帰ってくるな。朝は八時半に会社を出る。夕方は六時前には帰ってくるな。能無しのバカものが。九州がいいか北海道がいいか考えてろ」

うなだれて聞いていた藤村と斉藤は、同じことを考えていた。このバカ所長が、言わしておけば付け上がりやがって、そんなに簡単に注文がもらえるんだったら、お前が手本を見せてみる！ 能無しのバカ所長が。もう我慢の限界だ。殺してやる！

その時またしても異次元のコップの水が溢れた。突然小泉所長が口をパクパクさせ、首を掻き毟りながら応接室のドアを開けて倒れこんだ。女性社員の悲鳴とともに社内が騒然となった。小泉の顔は真っ赤になり、苦しみ悶えている。

「誰か救急車を呼べ！ 早く！」

前田課長の怒鳴り声が社内に響いた。斉藤と藤村の怒りは、小泉の苦しむ姿を見て消えていった。同時に小泉は、ゼッゼッと肩で息を始めた。首の包帯はめくれ、新しい引っかけ傷からの出血で真っ赤に染まっている。しばらくして救急車が到着した。小泉は平静を取り戻していたが、念のために病院へ運ばれることになった。

小泉は五十四歳。赤ら顔で、でっぷりとした体型をしており、ヘビースモーカーで肉が大好きだ。それに大酒飲みだ。健康診断では生活習慣病の危険性を指摘されていた。血圧が高く、中性脂肪、コレステロール、尿酸値も高い。これだけの状態で、今まで病気になつていないのが不思議なくらいだ。医者からは、いつ生活習慣病を発症してもおかしくないと言われていた。

検査の結果小泉は、自律神経異常と診断された。自律神経の異常

により呼吸器系が異常を起こし、呼吸困難になるという診断だった。様子を見ると休養が必要との診断で、一週間ほど入院することになった。

今日の斉藤の訪問先は、大手製造メーカーのA社だ。斉藤が担当している客先の中でも一番のお得意様で、売り上げの約八割をこの会社で占めている。大会社につき物の横柄な態度は、A社にも当てはまった。どの部署の担当者も、仕入れ業者に対する態度は横柄そのものだ。自分の父親ほど歳の離れた業者の担当者に、若造が偉そうに「おまえ」と言っている姿は見られたものではない。一体この会社の上層部は、社員に対してどんな教育をしているのかと疑いたくなる。ごくまれに常識をわきまえた社員もいるが、十人に一人ぐらいだ。

斉藤が今日会うのは調達課の北沢課長だ。歳は五十代半ばで、ふてぶてしい態度と性格の悪さが顔に表れている。酔っていたとしてもプライベートで付き合いおうという気を全く起こさせない。何が不満でそんな態度、そんな顔をしているのか。あんたは一体何が楽しみで生きているのかと、聞きたくなるほどだ。

斉藤は、北沢の机から二メートルほど離れたところに置いてある、面談用のテーブルで待った。業者はこのテーブルで待つことになっている。

「北沢さん、こんにちは」

挨拶しても、北沢は振り向こうともしない。斉藤が来たのは分かっているのだが、パソコンのキーボードから手を離さない。約束の時間を既に二十分過ぎたが全く無視だ。やがて三十分になろうとしたときに、おもむろに面談のテーブルにやってきた。

「高いぞ！ 見積の半額にしろ！」

挨拶もなしに、いきなり不機嫌そうな表情で言った。

「そんな無茶を言わないでください。御社だけ特別に安い価格にしているんです。この金額の半額にしたら、大赤字です。勘弁してください」

「ふざけるな。他社にはもつと安く入れてるんだろ。分かってるんだぞ。半額でも買ってもらえたら、ありがたいと思え」

「すみません。よろしかったら教えていただきたいんですが、今言われた他社というのはどこですか？ そこに出している見積を持ってきてお見せしますから、この見積と比べてみてください」

「忘れた。会社名は思い出せないが、うちよりも安いと聞いたぞ」「誰から聞かれました？ その人に確認します」

「うるさい。とにかく半額だ。イヤなら今後、注文が減ると思え！」「分かりました。とにかく言われた金額は私が決められる範囲を超えていますので、上司と相談して明日返事させていただきます」

齊藤の腹の中は怒りで爆発寸前だった。

「こっちは急いでるんだ。明日まで待てないんだ。今返事しないと、お前とは取引中止だ！」

このひと言が余計だった。このひと言が、北沢の身に災難として降りかかってくるのを、北沢は知る由も無かった。

北沢の机の対面に座っている女性社員の森岡が、北沢と斉藤のやりとりの一部始終を見ていた。と言うよりも、彼女の視界に面談のテーブルが入ってしまうため、必然的に見えてしまうのだ。その見えてしまっていることが、二十代前半の若い森岡には不運だったが、斉藤には幸運だった。

森岡は北沢が嫌いだった。大嫌いだった。ふてぶてしい態度を見ているだけで腹が立つ。特に、業者に対しての慇懃無礼な態度は許せない。自分に権力があると勘違いし、業者に無理強いすることは日常茶飯事だ。A社という看板に皆がペコペコしているのを、自分の実力だと勘違いしているバカだ。

そんないつものことを思いながら、斉藤とのやり取りを見ていても、斉藤が可愛そうでならない。自分には関係ないのだが、森岡は腹が立ってしようがなかった。森岡にしてみれば、北沢を背後から怒りを込めて睨みつけるのが、斉藤への精一杯の援護射撃だった。

その時突然、北沢が横を向き、そのままバタツと頭をテーブルに打ち付けた。顔を横向きにテーブルに押し付けている格好だ。表情は苦痛にゆがんでいる。必死で顔を上げようとしているが、誰かに顔を押しさえられているような感じで、顔を上げることができない。額は脂汗で濡れている。テーブルに両手をついて、うんうん唸りながら必死で顔を起こそうとしているが、顔がテーブルに張り付いたように動かない。気を失いかけているのか、三十秒ほどすると、白目を向いてぐったりとなった。

「キヤ〜〜〜！」

森岡が悲鳴を上げた。その声に、同じフロアにいる社員が一斉に彼女のほうを振り向き、数人が転びそうになりながら駆け寄ってきた。

た。

「北沢さん！ 大丈夫ですか！」

苦しんでいる北沢が大丈夫なわけではないが、誰もが慌てたときに発する言葉を、駆け寄ってきた男性社員も発した。

「早く救急車を呼べ！」

誰かが叫んだ。その声に社内は騒然となった。一分ぐらい経った頃、北沢がゆっくりと起き上がり、ゼッゼッと肩で息をし始めた。しばらくすると北沢は落ち着きを取り戻したが、顔中、脂汗で濡れている。救急車が来たときには、何事もなかったかのようにだったが、息遣いは荒く、顔面蒼白の状態だ。北沢はイスに座ったまま、救急車を帰すように部下に告げた。かなりショックを受けたのか、放心状態に見える。

面談テーブルから少し離れたところに立っていた斉藤は、北沢のところを集まった社員が、疑惑の目で自分を見ているのを感じた。斉藤はゆっくりと森岡のところまで歩いた。

「森岡さん、北沢さんに何が起こったのか、話していただけですよ
ね？」

森岡は頷くと、見ていた一部始終を話し始めた。心なしか森岡の顔色は青ざめている。

「私、斉藤さんと北沢さんのやり取りをずっと見ていたんですが、話の途中で北沢さんが急に顔をテーブルに打ち付けたんです。それから苦しそうな顔をして、手足をバタバタし始めたんです。そこでビックリして悲鳴を上げたら、皆さんが駆け寄ってきたんです。斉藤さんは何もしていません。あとは、皆さんが見られたとおりです」
森岡の言葉に斉藤の疑惑は晴れた。森岡が見ていたのが幸いしたのだ。

「斉藤、今日のところは帰れ。後でこっちから電話するから、その

ときに返事を持って来い」
「分かりました。お電話お待ちしております。失礼します」

齊藤は帰りの車の中で、今日の北沢に起きた出来事のことを考えていた。

小泉所長のときとは状況は違っていたが、奇妙な点では一致している。もしかしたら、北沢も自律神経に異常があるのか？ そう言えば、北沢の風貌は小泉と酷似している。でっぷりとした体型。醜く突き出た腹はメタボそのものだ。贅肉の付いた首周りや、ヘビースモーカーで酒好きというのは、小泉と瓜二つだ。以前聞いた話では、北沢も医者から生活習慣病の可能性を指摘されていて、節制するようにと注意を受けているということだった。

翌日、齊藤は事件を目撃していたA社の森岡に電話をしてみた。北沢の様子を聞くためだ。森岡の話では、検査のために一週間ほど入院したとのことだった。それ以上のことは分からなかったが、病院と病室の番号を教えてもらった齊藤は、小泉と前田に北沢の症状を告げ、見舞いに行くことにした。正直なところ見舞いなどする気はなく、ただ状況が知りたいだけだ。北沢が入っている病室は、四入部屋の三百五号室だ。

「北沢さん、どんな具合ですか？ 大変心配してました」
心にも無いことを口にしながら、お見舞いの果物を渡した。

「すまん。今のところ何とも無いが、精密検査を受けることになっている。しかしあのときは誰かに頭を押さえつけられたような感じで、動けなかったんだ。その押さええる力も尋常じゃなくて、頭が割れるんじゃないかと思うぐらいの凄い力だったんだ」

「でも、誰もそんなことはしてませんでした。北沢さんが一番ご存知じゃないですか？」

「そうなんだ。誰もそんなことはしてなかったんだが、たとえば言うなら、見えない手で押さえられたといった感じだな」

「ちよつと頭を見せてもらっていいですか？」

注意して見てみると、右側頭部が赤くなっている。かなり強い力で押さえられた結果だと思われる。一体これは何だろう？

「それでは仕事がありますのでこれで失礼します。お大事にしてください」

目的を果たした斉藤は長居はしなくなかったので、一礼すると病室を後にした。小泉と北沢の症状はどちらも奇妙だが、いくら考えても医者ではない斉藤に分かるはずはなかった。

齊藤が勤めている会社は中堅の商社だ。製造業向けの原材料や機械、電気機器、部品などを扱っている。名古屋営業所は経理と資材と営業を含めて、総勢十五人だ。営業の中では齊藤が一番の年長者になる。前田課長は、途中入社 of 四十二歳。前田が入ってきたとき、なかなか職場に打ち解けられない前田を齊藤は気にかけて、何かとこまめに面倒をみてやった。

前田は職場に慣れると小泉に媚を売り始め、小泉の腰ギンチャクのようになった。それが小泉に気に入られ、齊藤を抜いて課長に昇進したのだった。

齊藤は今回の二つの出来事について、あることがきっかけではないかと考えていた。そのあることとは、二ヶ月ほど前の出来事のことだ。その日齊藤は、老朽化した機械を更新するための仕様を調べに、客先担当者と一緒に工場の現場に来ていた。担当者と雑談をしながら、目的の機械のところまで立ち止まったときだった。その機械の二階で作業をしていた作業員が誤って、三キロほどあるハンマーを落としてしまったのだ。

「あぶな〜い！」

作業員が発した声に、反射的に上を見上げた齊藤を不運が襲った。上を見た齊藤の額を、落ちてきたハンマーが直撃した。ハンマーは齊藤がかぶっていたヘルメットをかすり、額に当たって落ちた。もし上を見ていなかったら、ハンマーはヘルメットに当たって齊藤は軽傷で済んでいたかもしれないが、上を見たのがまずかったのだ。

ヘルメットが脱げ、気を失って倒れた齊藤の額からは、鮮血が流れていた。ハンマーを落とした作業員と客先担当者は真っ青になり、齊藤に駆け寄った。担当者が携帯電話で救急車を呼び、工場の安

全管理部に連絡している間、作業員は鮮血が流れ出ている斉藤の傷口を、タオルで押さえていた。

五分も経たないうちに、安全管理部の社員がタンカーを持って現れた。タンカーに乗せられた斉藤は、すぐさま工場の正門へと運ばれた。正門へ着いたと同時に、救急車も到着した。

病院へ運ばれた斉藤は検査の結果、頭蓋骨にヒビが入っていたが、脳への影響は分らない。そのまま入院となり、退院したのは一カ月後だ。退院してからは言葉では上手く言い表せないが、自分の中で何かが変わったような気がしていた。それが何かは自分でも分からない。ただなんとなく、何かが変わったような気がするのだ。そうかと言って、普段の生活をしていても別段何も変化はなく、体調が悪いと言うこともない。変な夢を見るわけでもなく、入院前と何も変化はないが、何か微妙に変化しているような気がしていた。

斉藤が退院してから一カ月後に営業会議が開かれた。会議に出席したときに、小泉所長の奇妙な出来事と遭遇することになったのだ。その後、またしても奇妙な出来事が起きた。今度は客先担当者の北沢が被害者だった。

ふと斉藤は、「もしかしたら、僕には超能力があるかもしれない」と、藤村が言ったことを思い出した。もしかしたら藤村ではなく俺に超能力があるのかもしれない。斉藤は、ほぼ確信的にそう思った。

小泉の時といい、北沢の時といい、その現場に居合わせたのは自分だ。怒りが頂点に達し、殺してやる！ このヤロウ！と思った瞬間に、小泉も北沢も説明のつかない奇妙な目に合ったのだ。

斉藤は頭に怪我をした後、何か微妙に変わったような気がしてならなかったが、これで何が変わったのかはつきりと分った。あの怪我のおかげで、自分は超能力を手に入れたのだ。ほぼ間違いない。

斉藤はそう確信した。

今までSFの世界の話だと思っていた超能力が、実際に自分のものとなった今、全身が鳥肌立つような興奮を覚えていた。よし！この超能力で会社を変えてやる。くたばれバカ上司！

名古屋営業所の朝は営業ミーティングで始まる。小泉所長が、耳に心地よい情報を期待してのミーティングだ。所長の意に反するような報告だと、小泉火山が大爆発を起こし、その営業マンは血祭りに上げられる。そのため営業マンたちは出社と同時にストレスが溜まり、朝から心身ともに疲弊している。全員精気がなく憂鬱な表情をしている。

「ジャンボ宝くじの一等賞が当たったら、所長と課長の前に辞表を叩きつけてやる！」と言うのが営業マンたちの口癖だ。ほとんどゼ口に近い可能性しか口に出せない彼らを、斉藤は不憫に思った。

それにもまして部下の中では一番の年長者でありながら、少しも彼らの力になってやれない自分が情けなかった。彼らに対して申し訳なかった。日頃からそう思っていたが、今日の斉藤は違っていた。彼らの口癖を思い出しながら不敵に笑った。

「みんな安心しろ。宝くじに頼る必要は無い。これから俺が小泉と前田に天罰を与えてやる。今後は二度と俺たちに偉そうな口をきけないようにしてやる」

自分の中でそう言いながら、意気揚々と会社のドアを開けた。

始業のチャイムが鳴り、営業マンはそれを合図に会議室に入った。今朝のミーティングに小泉所長は不在だ。一週間の入院のためだ。所長が不在でも腰ギンチャクの前田が、所長のコピー人間のように営業マンを追及するだけは変わらない。前田の感にさわる言い方でミーティングが始まった。

「太田、昨日の結果を言ってみる」

「昨日は、注文はゼロでした。もらえる予定の百万円の注文が、担当の伝票の発行遅れで来週になりました」

「なんだと！ 何かにつけて、客先の都合ということにすれば済まされるところで思ってるのか。ふざけるな。今日中に注文もらって来い。注文もらうまでは帰ってくるな。分かったか！」

小泉と同じように、仏頂面で眉間に皺を寄せて前田は怒鳴った。

「斉藤くん、昨日の結果を言ってみろ」

「昨日は、受注はありませんでした」

「営業活動が間違ってるんじゃないか？ それとも喫茶店通いに力を入れてるのか？」

「そこまで言われるんだったら手本を見せてください。毎日注文をもらってきてください。自分が出るからそこまで部下をけなせるんですよね？ それだけ自信があるんだったら、課長も予算を持ってください。そして毎日、実績を報告してください」

斉藤の突然の意外な発言に、後輩たちは全員が顔を見合わせた。自分たちが言いたくても言えないことを、斉藤がズバリと言ったからだ。後輩たちは全員、心の中で斉藤に拍手を送ったが、前田は怒りで顔が真っ赤だ。

「斉藤君、あとで応接室へ来たまえ」

「分かりました。煮るなり焼くなり好きなようにしてください。その代わり、どうなっても知りませんよ。それだけは覚悟しておいてください」

開き直りとも思える斉藤の言葉に、営業マンたちは全員拍手喝采でバンザイをした。と言っても心の中で。

ミーティングが終わって斉藤は応接室に入った。

「斉藤君、誰に向かって口をきいてるんだ？ さっきのあの言い草はなんだ。俺は君の上司なんだぞ。口のきき方に気をつける」

超能力を身に付けた今の斉藤に怖いものはない。前田の目を覚まさせてやる。そう思いながら斉藤は口を開いた。

「前田！ お前いい加減にしろよ。お前が途中入社で入ってきたときに、俺が面倒見てやったのを忘れたのか？ それが課長になった途端、手のひらを返したような態度になりやがって。犬でも三日飼えば恩を忘れないんだぞ。お前は犬にも劣るのか？」

「斉藤君、いや、斉藤。君は立場の違いを分かってないな。過去のこともなんか関係ないんだ。今は俺が君の上司だ。俺の言うことに従う気がないんだったら、どこかへ飛んでもらうしかないな。分かっただか！」

「前田！ 言うことはそれだけか？ お前はそんな人間だったのか！ 少し痛い目に合わないか、その腐った根性は直らないみたいだな。あとはどうなっても知らないからな！」

斉藤の怒りは頂点に達した。視線を下に落とした斉藤は、小泉所長と北沢のときと同じ思いを心の中で強く念じた。このヤロー殺してやる！ 斉藤は強く強く念じ続けた。時間的に二、三分だろうが強く念じたのに何も起こらない。さらに念じ続ける斉藤の姿はうなだれたように見える。その姿に前田が声を掛けた。

「斉藤、言いすぎたことをだいたい反省してるみたいだから、今日のお前の失言は無かったことにしてやる。ただし、今回だけだ。今後、

俺に逆らうなよ！ 分かったら営業に行ってこい」

うなだれたまま応接室を出た斉藤は考えていた。小泉と北沢のときと同じ怒りをぶつけたのに、何も起こらなかった。やはり彼らは自律神経の異常が偶然にも一致しただけで、俺に超能力があったわけではなかったんだ。

俺はなんてバカなんだ。超能力で会社を変えてやるなどと夢みたいなことを思つて。そもそも超能力なんてSFの世界のことであつて、そんなのが実際にあるわけがない。ああ俺は何ということをしてしまったんだ。自分のバカさ加減に元氣なく会社を出た斉藤に、藤村が駆け寄つてきた。

「斉藤さん、さっきの前田課長に言った言葉を聞いて、僕ら全員、胸がスカツとしましたよ。さすが斉藤さんですね。それで応接室ではどうでした？ もっときついことを言つたんでしょう？」

藤村は、斉藤の言葉を期待するかのように尋ねた。

「お前じゃないけど、ちょっと勘違いをして偉そうなことを言つてしまった。独身ならまだしも、家族を持つ身なら我慢しないといけないなと反省してたところだ。言わなきゃ良かったと後悔してる」

元氣のない予想外の言葉に、藤村は斉藤が哀れに見えた。勘違いと言つたが、何を勘違いしてあんな強気な発言をしたのが氣になつたが、今はそれを口に出せなかった。

斉藤は、お客へ行く途中の車の中で、再び同じことを考えてみた。小泉と北沢の症状は違っていたが、奇妙な点では同じだ。あのとき自分が強く念じたときに、あの出来事が起きた。それは間違いない。締められてもいないのに、首に絞められたような跡が残っていた小泉。北沢は、何か見えない力に押さえつけられたような感じだったと言っていた。

これらのことから考えられるのは、馬鹿げているかもしれないが、超能力しか考えつかない。自律神経の異常で、あんなことが起きるとは考えにくい。逆に超能力と考えると起こりえる。だが今日は、前田に対しては何も起こらなかった。

だいたい常識的に考えて超能力なんかがあるわけがない。仮にそんな人間が居たとして、それが自分であるわけがない。もし自分にそんな超能力があるとしたら、五十年近く生きてきて気づくはずだ。バカなことを考えたものだ。自分の浅はかな判断、早とちりの性格がつくづく嫌になった。

後輩とは言え仮にも上司の前田に対して、言うてはならないことを言うてしまった。独身ならまだしも、家族を食わしていかなければならないのに、自分の浅はかな考えから大きなハンディキャップを背負ってしまった。後悔先に立たずのコトワザが、頭の中をグルグル回っていた。

夕方の六時過ぎに会社に帰ってきた斉藤は、前田と目を合わせる事が出来なかった。その様子を見ていた前田が斉藤に声を掛けた。「斉藤君、ちょっと話があるから応接室へ入ってくれ。藤村君も一緒にな」

斉藤と藤村は一緒に応接室へ入った。電話をかけた終わった前田が続いて入って来た。前田はソファに踏ん反りかえり、二人に睨み

つけるような視線を送った。小泉所長と瓜二つの態度だ。

「お前たち二人を見てみると、最近、俺と所長に反抗的に見えるんだが、何か気に入らないことでもあるのか？ 言いたいことがあるんだっいたら言ってみろ！」

「反抗的だなんてとんでもないです。実績が少ないので申し訳ないと思っっています。もっと頑張らなくてはと思っっています」

藤村が心にも無いことを言った。

「斉藤君は言いたいことがたくさんあるみたいだから、この際、全部聞いておこうか」

前田の口調には、皮肉と怒りが感じ取られた。

「私も藤村君と同じです。もっと頑張らなくてはと思っっています」

「ウソを言うな！ 今朝のあの啖呵はなんだっただ！ 俺を犬にも劣ると言っただる。忘れたとは言わせないぞ！」

今朝前田は、お前の失言は忘れてやると言っっておきながら、忘れていなかった。それもまだ一日も経っていないというのに。前田はネチネチとしつこいぐらいに、斉藤に食って掛かった。今朝の件は深く反省していた斉藤だったが、前田のいい加減さとしつこさに、段々と怒りがこみ上げてきた。

ポチャン、ポチャン。そんな前田の態度に比例するかのようになり、異次元のコップの水は少しずつ溜まっていき、溢れるまであと数滴のところまでできていた。その時限爆弾は、前田の言葉に呼応してカウントダウンしていたが、前田も斉藤も藤村も、そのことを知らない。

「何とか言っってみろ斉藤！ 金輪際逆らいませんと言え！」

そのひと言が余計だった。ポチャン。この一滴でコップの水が溢れた。それと同時にスイッチが入り、異次元の時限爆弾が爆発した。

前田が突然苦しみだし、首に巻きついていて何かを振りほどくような仕草をして首を掻き毟っている。首を引つ掻いた傷口から流れ出た鮮血で、ワイシャツの襟が真っ赤に染まった。前田は真っ赤な顔をして、カッと目を見開き、金魚のように口をパクパクさせている。呼吸が出来ないのだ。小泉のときと同じ状況だ。応接室のドアを開ける前に斉藤が叫んだ。

「誰か救急車を呼んでくれ！」

応接室に駆け込んできた社員らは、前田の惨状を見て騒然となった。状況が小泉のときと同じだからだ。一分ほど経った頃、前田は平常に戻った。斉藤は首から流れている血をタオルで拭いてあげながら、首の周りを注意深く見てみた。首の周りには、何かで締めたような薄い跡が残っている。小泉とまったく同じだ。一体これはどういうことだ？ 超能力？ そんな馬鹿な。斉藤は馬鹿げた考えを振り払うように、自分の頭を叩いた。

やはり腑に落ちない。小泉はまだしも、前田は痩せていて、毎年の健康診断の結果もすべて正常と言っていた。生活習慣病には縁の無い状態だ。ただ自律神経の異常だけは、健康診断の結果や外見からは判断できない。

奇妙な出来事は前田で三人目だが、そこに同席していたのは自分だけだ。ということは、自分が何らかの関与をしているのではないか？ 斉藤はあれこれと考えていたが、いくら考えても結論は出なかった。

前田は救急車で小泉が入院している病院へ運ばれた。診察した医

者は、警察へ届けようかどうか迷っていた。明らかに首筋には締められたような跡があったからだ。前田はそんなことは絶対にないと聞いた。首を絞められたら本人が一番良くわかるはずだし、話を聞いていてもそんなことはなかった。

一通りの検査を受けた前田は、入院することも無く会社に帰ってきた。首の包帯姿が痛々しい。社内では小泉と前田のことで、いろいろな憶測が飛んでいた。

「何かの祟りだ」

「風俗で、変な病気ででももらったんじゃないのか」

「日ごろの行いが悪いから罰が当たったんだ」

「先祖の呪いだ」

「神経の病気じゃないのか」

結局斉藤と同じで誰も原因を特定することは出来ず、自律神経の異常ということに落ち着いた。

「斉藤さん、やっぱり超能力ですよ」

「誰の？」

「斉藤さんが僕しかいないじゃないですか。だって、この変な出来事の現場に居合わせたのは、僕らだけですよ」

「俺は、客先の北沢さんのときにも居たから、打率十割だ。実はお前をバカにしたけど、俺には超能力があると思って、この前、前田に食ってかかったんだ。でもあのあと応接室で必死になって念力を送ったけど、何も起こらなかったんだ。だからあのときは、あんな啖呵を切って失敗したと後悔してたんだ」

「そうだったんですかあ。じゃあ少なくとも斉藤さんには超能力は無いんですね？　北沢さんのときは僕は居なかったし、一体この奇妙な出来ごとは何なんでしょうね？」

「そうだよなあ。不思議だよなあ。ああ、ダメだ！　いくら考えて

も何も浮かばないや」

「原因は分からなくても結果的には良かったですね。バカ所長とバカ課長が痛い目に合っただけ。そう思いませんか？」

「確かにそうだけど、それは一時的なものだよ。あいつらが考えを変えない限りは良かったとは言えないからな」

斉藤は自宅から電車通勤をしている。自宅は名古屋から近鉄急行で約二十五分の三重県桑名市だ。桑名は名古屋のベッドタウンとなっており、名古屋へ通勤通学している人が多い。

桑名はハマグリの産地として有名だが、日本一うるさいと言われる石取り祭りも有名だ。八月に行われるこの祭りは、その前の練習のときもうるさく、イライラしているときには、文句を言いたくなるほどだ。

斉藤の家族は三歳年下の妻と大学一年生の息子、高校二年生の娘の四大家族だ。十年前に買った4LDKのマンションに住んでいる。バブルの頃と比べたら金利ははるかに安いけど、それでも住宅ローンは家計を圧迫している。二年後は子供二人が大学に通うことになるので、さらに家計が苦しくなる。妻は近くのスーパーでパートの仕事をしている。

あの三件の奇妙な出来事が起きてから約二週間が過ぎていた。小泉と前田の首の傷は治り、あれからは特に変わった様子はない。二人とも自律神経の異常と診断され、処方してもらった薬を飲んでいく。あれ以来、小泉は健康に気をつけるようになった。禁煙にも挑戦しており、会議室が禁煙になったことは、斉藤たちタバコを吸わない者にとってはありがたい。事件以来、毎朝のミーティングは中断されている。

毎朝のミーティングといい毎月の営業会議といい、小泉所長と前田課長の耳に心地良い発表でないと途端に雷が落ち、重箱の隅を突くようにあら捜しされ、徹底的に責任追及される。二人に吊るし上げられた営業マンに限らず、全員やる気はなくなり、こんな会社は早く辞めたいという気持ちになって、会議は終わる。これが毎朝のことだ。

一体何が目的の会議なのか？ 本来の目的を見失った会議など、百害あって一利なしと思っている斉藤だが、どうすることも出来ない自分が腹立たしかった。

しばらく中止されていた朝のミーティングが、所長の一声で始まった。いつものように背もたれを折らんばかりにふんぞり返って腕組みをして座った小泉の隣に、前田も同じようにして座っている。斉藤から発表が始まった。斉藤は発表内容からして雷が落ちるのは覚悟している。

「まず実績のほうですが、今の状況から行きますと、今月は八割ぐらいしか行きそうにありません。やはり景気が落ち込んでいるので私の担当しているお客でもコスト削減が強く言われています、予

定されていた案件も中止とか延期になっています」

「ちょっと待て。君の言い方だと、私は悪くありませんと言ってるけどな、不景気の中からでも注文を取ってくるのが営業だぞ。やる気があつたら取れるはずだ。実績が悪いのは、君がマジメにやつてないからだろ。言い訳ばかりするな。今月の不足分は、来月に加算するからな」

前田はちらちらと横目で小泉を見ながら斉藤を罵った。小泉は満足そうに首を縦に振りながら、前田の言うことを聞いている。

「前田課長の言うとおりだ！ お前はやる気がないから売り上げが上がらないんだ。一番年長者のお前が後輩の手本にならないといけないのに、お前が足を引つ張ってるじゃないか。アホかお前は！ 早く客先へ行って来い。注文をもらうまで帰ってくるな！」

真つ先に吊るし上げを食らっている斉藤を見ていた他の営業マンは、次は俺の番かと怯えながら小泉の言うことを聞いていた。そんな中、またしても異次元のコップの水が溢れるところまできていた。ポチャン、ポチャン。あと一滴で溢れる。恐怖の時限爆弾のカウンtdownは、今は小泉所長の言動に呼応している。座っている斉藤に、小泉が言ったひとりで最後の一滴がコップに落ちた。

「斉藤！ 客へ行けと言ったのが分らんのか！ 早く行けバカタレが！」

ポチャン。斉藤の怒りは頂点に達した。小泉が言い終わったと同時に、小泉と前田が首を掻き始めた。

二人はカツと目を見開き、金魚のように口をパクパクさせている。首に巻きついた何かを振りほどくように、両手で首を掻きまわっている。

る。たちまち二人の首からは鮮血が流れ始めた。会議室は騒然となった。斉藤たちはどうしていいか分からず、ただ見ていることしか出来ない。

一分ぐらいで症状は治まったが、二人のワイシャツの襟は、流れ出した鮮血で真っ赤に染まっている。タオルで血を拭いてあげていた斉藤は、二人の首に、何かで絞められたような跡があるのを見つけた。この前と同じだ。救急車で運ばれた二人は診察を受けたが、原因不明だった。念のため、二人とも一日だけ入院して、様子を見ることになった。

会社では前のときと同じように、いろいろな憶測が飛び交っていた。斉藤と藤村はそれらの声には耳を傾けずに考え込んでいた。

「斉藤さん、この前と同じですよ。しかも今回は二人同時ですよ。一体、どうなってるんでしょうね？」

「一切の常識を無視して考えれば、推定原因は考えられるけどな・

」
「えっ！ 何が原因なんですか？」

驚きながら身を乗り出した藤村に、斉藤はバカバカしいと思いつつ、話してみた。

「常識を無視しての考えだからSF的になってしまっけど、俺が考えたのは、やはり、お前が言ったとおり超能力だ」

藤村は斉藤の言葉に、声を出さずに頷いた。

「まず今回の一連の奇妙な事件の当事者は、皆からの嫌われ者だろう？ 殴つたらか！ と思つたことは何度もあるだろう？ 実際に殴つたら大問題になるけど、腹の中ではいつもそう思ってる。たぶん他の連中も同じだと思うよ」

続けて言おうとする斉藤を制して、藤村が少し興奮気味に喋った。「あとは言わなくても分かります。要するに、その腹の中の思いが超能力という形で二人を襲つたということですよね？」

「そのとおり。だから二人の首には、何かで絞められたような跡があつたんだ。これで説明がつかさう？ 超能力を証明することは出来ないけどな」

「もし斉藤さんの考えが当たっているとしたら、うちの営業マンの中に超能力者がいると言うことですよ。可能性といたら、全ての現

場に居合わせた斉藤さんということになります」

「俺も超能力があつたらな、と思つたことは何度もあるよ。しかし、この前も言つたように、あると思ひ込んで前田に啖呵を切つたけど、結局ないことが分かつて、啖呵を切つたことを後悔したけどな」

会社が終わってから、斉藤と藤村は名古屋の行きつけの居酒屋へ足を運んだ。日ごろのウツプンと、溜まっているグチをこぼしながら飲む。毎回のパターンだ。聞き耳を立ててるわけではないが、近くから聞こえてくるサラリーマンと思しき人たちの話題も、斉藤たちと似たりよつたりの内容だ。

ひとしきりグチを言い合い、ウツプンを晴らした二人が居酒屋を出たのは、午後十時半を過ぎた頃だ。居酒屋を出た二人は分かれてそれぞれの駅へと向かった。

近鉄名古屋駅に着いた斉藤が時刻表を見ると、急行の発車時間まで、あと二十分だ。停車している急行に乗ると、車内は混んではないが、席は埋まりつつあった。

斉藤は吊り革のひとつを持った。酒を飲んだ後は、座ると眠ってしまうことがあるので、いつも立つことにしている。立っている乗客は斉藤のほかにも数人ほどいた。時間が過ぎていき発車のベルが鳴り、ドアが閉まりかけたときに、二人の男が飛び乗ってきた。

「セーフ。危なかったな」

そう言いながら、その男たちは車内を見回した。席は埋まっていた座るところはない。彼らは年の頃は二十代後半ぐらいに見える。一目でヤクザ、それも下っ端のチンピラと分かる風貌をしている。

「ああ、疲れたな。誰か席を譲ってくれないかなあ」

年上と思われるほうが、歩きながら大声で言った。トラブルに巻き込まれたくないのは誰しも同じだ。乗客は下を向いてじっとしている。眠ったふりをしている者もいる。

男たちはある若い女性の前で立ち止まり、その女性の横に座っている五十代と思えるサラリーマン風の男性に声をかけた。

「おっさん！ 俺たち疲れてるんだ。席を譲ってくれるよな！」
トラブルに巻き込まれたくない男性はすぐに席を立つと、別の車両へ移っていった。女性が立ち上がるうとすると、

「あんたは座ってていいんだよ。女性を立たせる男は許せないからな。俺はそんなことはしないから安心しな」

女性は心の中で、トラブルに巻き込まれたことを予感していた。案の定、しばらくして二人は女性に絡み始めた。嫌がる女性が立ち上がることを許さない二人だったが、乗客の誰もが見てみぬふりをしている。斉藤は、女性を助けてやれない自分が情けなかった。彼らを止める勇気がなかった。正直なところ、トラブルには関わりあいたくないが、彼らに対する怒りは我慢の限界まで来ていた。

斉藤だけではなく、車内の全ての乗客の怒りも、すでに限界を超えていた。その時だ。チンピラふたりの身体が、まるで怪力の男に吊るし上げられたかのように空中に浮いたかと思うと、誰かに投げ飛ばされたかのように空中を舞って落ちた。三メートルほど投げ飛ばされたチンピラは、床に倒れて気を失った。

一瞬の出来事に何がどうなったのか、隣に座っている女性にも分からなかったが、トラブルが去ったことだけは確認できた。席を立った女性は、別の車両へと足早に去って行った。

斉藤は、今の出来事の一部始終を見ていた。明らかに超能力だ！ そう確信した斉藤は車内を見回してみた。一体誰が超能力者だ？ 見たところそれらしき人物は見当たらない。

翌日斉藤は、昨日の電車での出来事を藤村に話した。

「本当ですか！ 宙に浮いたということは、やっぱり超能力者の仕事ですね。いつも斉藤さんがそういう場面に出くわすから、やっぱり斉藤さんが超能力者じゃないんですか？」

「俺もそうありたいけど違うな。昨日も皆と同じように腹は立った

けど、吊るし上げて投げ飛ばそうなんて全く思いもしなかったからな。現場に居合わせたのは単なる偶然だと思うよ」

「そうですよね。そうだ！ 念のため、このボールペンを動けと念じてみてください。もしかしたら動くかもしれませんよ」

「よし！ 超能力があることを期待してやってみるか」

斉藤は精神を集中するように目を閉じ、ボールペンよ動けと必死で念じてみた。しばらくやってみたがボールペンはピクリともしない。

「やっぱりダメだ。俺に超能力はない。残念！」

「ますます分からなくなりましたね。でも超能力が実在するのは確認できましたよね。昨日の一件で」

一日入院していた小泉と前田が出社していた。二人とも首に包帯を巻いている。誰かがペアルックだと言ったので、皆が吹き出しそうになった。前田は以前、斉藤が言ったことが、今回の奇妙な出来事をきっかけに妙に気になっていた。

「分かりました。煮るなり焼くなり好きなようにしてください。その代わり、どうなっても知りませんよ。それだけは覚悟しておいてください」と斉藤は言った。考えてみれば、この奇妙な事件が起きるときは、決まって斉藤を問い詰めているときだ。

最初に所長の身に起きたときは、所長が問い詰めていて、所長が不在で応接室でのときは、自分が問い詰めていた。今回、所長と自分と同時に起きたときには、二人で斉藤を問い詰めていたときだ。間違いない！ 斉藤は不思議な力を持っているんだ。もしかた斉藤を怒らせるようなことをしたら、今度は殺されるかもしれない。それも手をかけずに。

前田は小泉を応接室に呼ぶと、今回の事件に関して自分の考えを話した。小泉は前田の話に納得したのと同時に、前田と同じく身震いするような恐ろしさも共有することになった。

翌日も朝のミーティングが始まった。いつものとおり、斉藤が一番に発表を始めた。斉藤は今日も雷が落ちるのかと思うと憂鬱だった。

「昨日もいろいろな部署を回ったんですが、注文は百万円しかありませんでした。いろんな担当者に会ってお願いはしてるんですが、昨日も言ったように、どの客先もコスト削減が言われていて、なかなか注文が出てこないんです。すみません」

誰もがここで、小泉と前田の雷が落ちるものと戦々恐々としていたが、小泉の口からは予想もつかない言葉が発せられた。

「不景気だからしょうがないな。斉藤の予算は高すぎるのかももしれんしな。まあ、気を落とさずに、今までどおり頑張ってくれ」

小泉の意外な発言に全員が耳を疑ったが、その後の他の営業マンの発表にも同じようなコメントを言い、問い詰めるようなことは全くない。

ミーティングのあと会社を出た斉藤に、藤村が駆け寄ってきた。

「どういう風の吹き回しですかね。気持ち悪いぐらい良い子になってましたよ。あの二人」

「俺もそう思ったけど、あの事件で性格が治ったのかもな」

「このままの状態が続けば仕事もやりやすいし、やる気も出るんですけどね。さていつまで続くかが見ものですね。でも一体、何を考えてるんでしょうね」

小泉と前田は疲れていた。ミーティングの間、二人は緊張していた。いつ斉藤があの不思議な力を使うのかと思うと、斉藤を怒らせるようなことは言えなかった。とにかく今日のところは何事もなかったのでホッとした二人だったが、斉藤に対する恐怖が消えることはなかった。それどころか、時限爆弾を抱えているようなものだと思っていた。

夕方の六時過ぎに会社に帰ってきた斉藤に、前田が応接室から声をかけた。

「斉藤さん、ちょっとこっちへ来てください」

斉藤が応接室へ入ると小泉と前田が座っていた。いつものふんぞり返った座り方ではなく普通に座っている。ふてぶてしい態度も消えている。突然の二人の変わりように、斉藤は夢でも見ているのかと思つたほどだ。今まで年上の斉藤を、課長になつた途端に斉藤君と呼んだり、斉藤と呼び捨てにしていた前田が、斉藤さんと、さん付けで呼び始めたのだから首をかしげるしかなかった。

「ちよつと君に聞きたいことがあるんだが・・・」

妙に下手に出る小泉に、斉藤はハツタリをかけてみることにした。「何でも聞いてください。知っていることはなんでも答えますが、腹の立つような質問は無しでお願いします」

斉藤の言葉に、明らかに怯えたような表情が読み取れた。そうか！もしかしたらこいつら、あの事件は俺がやったと勘違いしてるな。だから俺が怒らないように気を遣つてるんだ。超能力はなくても、こいつらよりも優位に立てるぞ！そう確信した斉藤はウキウキしてきた。もう一度、ハツタリをかませてみるか。そう考えた斉藤は、いつもは憂鬱な気分で入る応接室だが、今はなんだかワクワクする場所に思えてきた。

「今回の俺たちの奇妙な出来事といいA社の北沢さんの出来事といい、同じ状況なんだが、医者は原因不明と言ってる。君がたまたま現場に居合わせたから、何か気になったことでもないかと思っただんだが・・・」

「常識を無視して考えれば原因は推定できます」

齊藤は、ハツタリをかませることにした。

「えっ！ 本当かね？ 一体何が原因だ？」

「所長、あくまで常識を無視した推測です。信じるか信じないかは別問題ですから」

「分かった。それで原因は何だと思っのかね？」

「超能力です！ 超能力で首を絞められたんです。それだと説明がつくでしょう？ でも超能力を証明することはできません。現実的に形がないし目に見えないんですから。もしかしたら私が超能力者かもしれません。あつ、今は冗談です。気にしないでください」

二人の表情は齊藤の説明でさらに強ばっている。齊藤は先日近鉄電車での出来事も付け加えることにした。

「実は先日、近鉄電車の中でこんなことがあつたんです。・・・」

齊藤は藤村に話したことをそのまま二人に話した。黙って聞いていた二人の表情は、心なしか青ざめているように見える。

「最近では切れる若者が多いと言いますが、私は切れるのは歳には関係ないと思います。そして決まって言われるのが、普段はおとなしい人だったのに、人が変わったみたいだと言うことです。だからもしかしたら、切れたときに超能力が発揮される人がいるのかもしれませんね。もしそうだとしたら怖いですよ。切れてしまつたら自分で制御がきかないんですから」

「齊藤君ありがとう。参考になったよ」

「それでは今日はこれで帰ります。二人とも気をつけてください。と言っても、もし冗談抜きで超能力の仕業だとしたら注意のしようがないですけど。その超能力者が切れないのを祈るしか手はありませんからね」

齊藤は腹の中で、ざま〜みる！ と叫んで応接室を出た。

小泉と前田は斉藤の話聞いて、彼が超能力者だと確信した。それと同時に斉藤がかなり怒っているみたいで、自分たちにこれ以上俺を怒らせるなと警告しているように思えた。

「前田君、大変なことになったぞ。もし斉藤の機嫌を損ねてあいつが怒ったら、俺たちは本当に殺されるかもしれないぞ」

「私もそう思います。この前の事件ですが、息が出来なくて死ぬかと思いました。もし今度同じようなことが起きて、そのまま息が出来なかったら確実に死にますよ。たぶんこの前は、斉藤も殺そうとまでは思わなかったんでしょう。しかし今日はそれとなく我々に警告してましたから、もし今度あいつを怒らせたら確実に殺されます」

「警察に届けるわけにもいかないしな。なにせ何も証拠がないし、超能力で殺されまうと言ったところで誰も信用しないだろうし。ましてそんなこと言ったら、精神異常者扱いされるのがおちだからな」

「とにかく、くれぐれもあいつを怒らせないようにしましょう」

二人は相談した結果、斉藤には逆らわないという結論に達した。超能力の存在を信じざるをえなくなった二人には、それ以外の解決法は思いつかなかった。

齊藤が小泉と前田に話をした翌日から、朝のミーティングが一変した。今までは実績が悪いと吊るし上げにあっていたのが、それがなくなっただけでなく、小泉と前田が模範的なマネージャーに大変身したのだ。

「実績が悪いのか。じゃあ一緒に施策を考えよう」

「そうか、客先の事情もあるから仕方ないな」

「一生懸命頑張ってダメだったらしょうがない」などと、今までの二人からは考えられないような言葉が出るようになったのだ。齊藤はミーティングの最中、小泉と前田を注意深く観察していた。その結果、自分に気を遣っているのが読み取れた。

応接室で言った、あのハツタリが相当効いているみたいだな。齊藤は理由はともかく、二人が良い方向へ変わったのが満足だった。この際、変えられるところは全て変えてしまおうと考えた齊藤は、ある提案を試みることにした。これで二人がどう出るのが見ものだ。

「所長、すみませんがひとつお願いがあるんですが、よろしいでしょうか？」

「いいぞ。言ってみろ」

「毎朝やっているこのミーティングですが、中止にしてみたいないでしょうか。毎月営業会議もやっていますし、他の営業所で毎日ミーティングをやっているところはあります。その日の結果は毎日課長に報告していますし・・・」

齊藤は下手に出ながら言ってみた。当然、小泉は自分の意見を取り入れると思っていたのだが、小泉の答えは違っていた。

「他の営業所がやっていないのは関係ない。俺が必要だと思うから

やってるんだ。俺のやり方が間違っていると言いたいのか？」

「いいえそうではなくて、毎日やる必要はないと思うんです。さっきも言ったように、帰ってきたらその日のことは課長に報告していただきますからミーティングは必要ないと思うんです」

「俺には報告してないだろう。だからこのミーティングが必要なんだ」

「ということは、我々は毎日、所長と課長に同じことを報告しないといけないんですか？ それはおかしいです。本来なら課長が所長に報告すべきだと思いますが・・・」

小泉は斉藤の意見について我を忘れていた。前田から、斉藤を怒らせないようにしようと言われたこともすっかり忘れていた。そしてこのひと言が余計だった。

「斉藤、いい加減にしる。俺にたて突く気が！」

前田が、まずい！ と思った瞬間、異次元のコップの水が一気に溢れた。それと同時に小泉に三度目の不幸が襲い掛かった。小泉は苦しそうに口をパクパクさせながら、首に巻きついた何かを振りほどくように首を掻きまわった。鮮血が流れ出し、たちまちワイシャツの襟が真っ赤に染まった。

「斉藤さん、やめてください！」

前田が悲痛な声で叫んだ。その声に会議室に居た全員の視線が斉藤に注がれた。一分ぐらいで小泉は平常に戻ったが、化け物を見たかのような恐怖の表情で斉藤を見ている。斉藤は前田の言った一言で、全員が自分を見るのは分かっていた。

「えっ？ 俺が何かしたの？ 冗談でしょう。何もしてないよ」

「斉藤さんは何もしてませんよ。たぶん課長は気が動転してて、変なことを言ったんだと思いますけど、そうですね。課長？」

「皆、すまなかった。藤村君の言うとおりだ。斉藤さんには何の関

係もないのに、つい変なことを口走ってしまつて・・・」

そう言った前田の目は恐怖に怯えていた。そして前田の怯えた視線の先には斉藤がいた。首の血を拭いてもらった小泉は、包帯を巻いてもらつて応接室に入るとソファアに横になつて休んだ。心配した前田が応接室に入りドアが閉められた。

「所長！ あれほど言ったじゃないですか！ 斉藤を怒らせたらいけないと。私が斉藤に止めてくれと叫んだから良かったんですよ。もしあのままいつてたら死んでたかもしれませんよ」

「すまん。斉藤の言ったことについてカツとなつて、君に言われたことを忘れてしまったんだ。しかしこれで間違いないな！ 斉藤が超能力者だ。下手なことを言ったら今度こそ殺されるぞ」

「所長、明日でもいいので、昨日は言いすぎたと言つて斉藤に謝つておいたほうがいいと思いますよ。もしあいつがまだ怒っているとしたら、ちょっとしたことでも切れるかもしれません。そのときは命の保障はありませんよ」

前田の言葉が真実味を帯びて、小泉の耳に突き刺さつた。

今の騒ぎでミーティングは中止になり、営業マンは自分の担当客先へと出かけて行つた。斉藤も外へ出たところで藤村が追いかけてきた。

「やっぱり斉藤さんが超能力者だったんですね。前田課長もそのことを知つてたんですね？」

「この前、所長と課長にハツタリをかませただけけど今の事件は違つぞ。俺は何もしてない。神様に誓つてもいい。藤村、お前じゃないのか？」

「僕は違いますけど、所長が怒り始めたときに、殺してやる！ とは思いましたよ。それだけです。だってミーティングで怒られるたびに、殺してやる！ って昔から思つてましたからね」

「もうこの話は止めよう。いくら考えても原因は分からないし、頭が変になりそうだ」

あまりにタイミング良く、自分が所長と課長に言ったことが起きたので、斉藤自信も不思議な思いだったが、超能力以外にこれを説

明することは出来なかった。そうは言っても誰が超能力者かというのを考えると、まったく分からなかった。

翌日斉藤は入社するなり小泉に呼ばれた。応接室に入って待っていると、小泉と前田が入ってきた。

「斉藤、昨日のミーティングではついカツとなって言いすぎてしまった。悪かった。許してくれ」

いきなり小泉が頭を下げて謝ってきた。もうこの事件には関わらあいたくないと思っていた斉藤は、面倒くさそうに言った。

「もうどうでもいいですよ。所長が謝る必要も気を遣う必要もありません。どうぞ今までどおりにやってください。私は何も言いませんから。なるようになれです」

斉藤の言葉に小泉と前田は、斉藤がひどく怒っていると勘違いしたらしく、額に汗をかきながら言った。

「とにかく機嫌を直してもらえないか。今後は俺も言い過ぎないように気をつけるから」

「分かりました。何でも仰るとおりにします。機嫌は悪くありませんので、気にしないでください。ついでにお願いがあるんですが、他の連中にもあまりきついことを言わないでもらえますか?」

「もちろんだ。そんなことは言わない」
作り笑いをしながら小泉が言ったが、それは笑顔ではなく引きつった表情にしか見えない。

「あつ、ひとつ聞き忘れてました。朝のミーティングは今日から中止ということいいんですね?」

「前田君と相談して、必要ないということになったので中止だ」

朝のミーティングが中止になってから約一ヶ月が経っていた。その後、あの奇妙な出来事は起こっていない。小泉と前田の態度が変わってから、社内の雰囲気は格段に良くなっていった。そろそろ四半期が終わりに近づいたある日、斉藤は小泉に呼ばれた。

「斉藤君、来週の金曜日に本社で営業会議があるんだが、前田課長の体調が悪いんで代わりに行ってくれないか。もちろん俺も行くんだが」

「分かりました。資料は何を準備すればいいんでしょうか？」

「あとで必要な資料のリストを渡すから準備しておいてくれたまえ。それと、パソコンを持っていくように」

「了解しました。もしよろしかったら藤村も連れて行きたいんですが。なかなか本社の会議に参加する機会はないので、勉強のために一度参加させたいので」

「いいだろう。なんなら藤村にも少しぐらい発表させても構わないから」

当日、東京本社に、全国十営業所の所長と営業課長が集まっていた。昔は半期ごとの会議だったが、最近は四半期ごとに開かれるようになってきている。本社からは社長以下、取締役と営業統括部長、鉄鋼や自動車など、各市場ごとの部長十人が出席している。

早速、南の福岡営業所から発表が始まった。名古屋営業所は五番目の発表だ。福岡、広島、神戸営業所と発表が続く、業績の悪いところには厳しい叱責が情け容赦なく飛んだ。本社の出席者二十人ほどから突っ込みが入るので、発表者は質問に答えるのに必死だ。中には現場を良く知らないのか、トンチンカンな質問をする部長もいる。いかに現場に出ずに机に座って仕事しているかが丸見えの発言だ。本社の偉い連中の質問や意見を聞いているうちに、斉藤と藤村は段々と腹が立ってきた。

「どいつもこいつもただの評論家じゃないか。人のアラ捜しばかりしやがって」

そう思っているうちに斉藤の番になった。名古屋営業所は予算に対して九割弱の実績だ。

「予算達成できなかった理由は何だね？」

統括部長が質問した。

「はい、自動車産業の景気が落ちていまして、それに引きずられる形で実績が下がってしまいました」

「利益も良くないみたいだが」

「景気が悪くなると注文をもらうために、どうしても価格競争になってしまいますので利益も悪くなってしまうました」

しばらく営業部長との質疑応答が続いていたが、自動車市場担当部長の鈴木が口を挟んできた。

「話にならん。聞いていると景気が悪いから業績も悪くなったのは分からんでもないが、営業活動に工夫がないよ。今どき御用聞き営業だと注文はもらえないぞ！」

「それは承知しています。ですから皆で知恵を出し合って、少しでも注文がもらえるようにやっています。御用聞き営業しかやっていない営業マンは、一人もおりません」

「じゃあ、なぜ売り上げが増えないんだ？」

「たとえば提案営業をやったからといって、すぐに売り上げが増えることなどありません。競合も同じようなことをやっていますし、客先の予算や納入時期などの都合もありますから」

「言い訳はもういい！ 不足分は今後どうやってカバーするつもりだ？」

「画期的な方法などはありませんから、地道にやるしかないと思つてます」

「要するに無策なんだな！ そんなことだからダメなんだ！」

「もしよろしかったら、どうすればいいのか教えていただけませんか？ あるいは同行していただければありがたいんですが・・・」

齊藤は皮肉を込めて言った。

「私を試すつもりなのか！ 無礼だぞ！ そんな口の利き方をしている、決して君の評価は良くならないぞ！」

追い詰められると権力を振りかざすのは役職者の伝家の宝刀だ。

齊藤は、そういう役職者が大嫌いだ。素手の相手に武器を持って立ち向かってくるのと同じだ。齊藤の怒りは頂点に達した。時限爆弾はすでにカウントダウンに入っていて、異次元のコップの水は、あと一滴で溢れるところまできていた。

二人のやり取りを隣で聞いていた小泉が、まずい！ と思った瞬間だった。

ポチャン。一滴の水が異次元のコップに落ちた。鈴木が苦しそうに

首を掻き毟り始めた。顔は硬直して金魚のように口をパクパクさせている。すでに首の引っかき傷からは鮮血が流れ出している。会議室が騒然となった。小泉が斉藤の手を引っ張り小声で言った。

「斉藤、頼むから止めてくれ！」

小泉は斉藤が心底恐ろしかった。悪魔みたいな存在に思えた。一分ほどすると鈴木は息が出来るようになったが、ワイシャツの襟は鮮血で真っ赤に染まっている。斉藤は鈴木に駆け寄って傷口を見てみた。小泉や前田のときと同じように、首の周りに薄く絞められたような跡が残っている。鈴木は救急車で病院へ運ばれ会議は一時中断となった。時間は十一時半を過ぎたところだったので、そのまま昼食となった。

本社での会議が終わって帰宅した斉藤は、頭が混乱していた。一体どうなってるんだ？誰が超能力者なんだ？どう考えても自分ではないのは確かだし、残るは藤村しかないが、A社の北沢のときと近鉄電車でのチンピラときは藤村はいなかった。辻褄が合わない。そう考えるとますます分からなくなってしまった。

本社での一件は各営業所でも噂になっていた。鈴木部長を知っている者は、天罰が下った、いい気味だ、自業自得だ、これで性格が治るだろうなどと、気の毒に思う者は一人もいなかった。

今夜は、B社の設備管理部の森下課長の接待だ。カニ料理が好きな森下課長は斉藤より五歳年下だ。人柄が良く頭も切れ、仕入れ業者に対しても礼儀正しい。短気なのが玉に瑕だが、斉藤はそんな森下を気に入っている。

名古屋のカニ料理の専門店、久しぶりのカニを堪能した二人は、斉藤の行きつけのスナックに足を運んだ。金曜日とあって店内は満席だが、事前に予約していたので斉藤たちの席は空いていた。

最近はどこでもカラオケが置いてあり、引つ切り無しに聞こえる他人の下手な歌は、一種の公害と言ってもいいほどだ。斉藤と森下はカラオケ嫌いというところが一致している。このスナックは今どきの店にしては珍しく、カラオケを置いていない。そのためゆつくりと落ち着いて話が出るので、斉藤のお気に入りの店となっている。

カウンター席に座った二人は焼酎のお湯割を頼んだ。二人とも最近はウイスキーをほとんど飲まないで、焼酎一辺倒だ。だからどこへ行っても頼むのは焼酎だ。

三十代後半と思える美人の涼子ママと雑談しながら、二人は焼酎を飲んでいく。店内では涼子ママのほかに、三人の女性が客の相手をしている。三人とも二十代だ。斉藤が最近仕入れた手品を始めた。割り箸を使った簡単な手品だが、なかなか面白いので気に入っている。涼子ママと森下に大受けしたので気を良くした斉藤は、もう一度やってみせた。

「凄い！ 斉藤さんお上手ね。お願いだから私に教えて。お願い」
色っぽい涼子ママに言われて斉藤には断る勇氣はない。と言うよりも、ママのその言葉が嬉しかった。

「本当は門外不出で誰にも教えないけど、美人の涼子ママに頼まれたら仕方ないから特別に教えてあげるよ」

「嬉しい。ねえねえ、この際だから森下さんも一緒に覚えましょうよ」

「そうだな。覚えて会社で皆を驚かせるとするか」

涼子ママのファンになつていた森下も、彼女の言葉が嬉しかった。それは表情にも表れている。斉藤は、ここへ森下を連れてきたのは正解だと思った。機転の利く涼子ママは、森下に対する斉藤の思惑はずでに分つていた。

斉藤たちの盛り上がり気が気に入らないのか、カウンターの端の席で飲んでいた三十歳ぐらいの二人連れの男が、斉藤たちに聞こえるような声で言った。

「最近はくだらない手品をやつて自慢するバカが多いんだよなあ」

「そうだよなあ。女に相手にされないやつに限つて、手品で気を引こうとするんだろうな。やっぱりバカだ」

斉藤たちはトラブルに巻き込まれなくなかったので、聞こえないふりをしている。種明かしをしてみせると涼子ママが挑戦した。簡単な手品なので、二回目で成功した。

「上手いじゃないか。さすが涼子ママだ」

「嬉しい！ 早速、明日からお客さんへやってみせるわ」

「門外不出だから種明かしはしないですよ。分かった？」

「はいはい。分かつてますよ。これは教えてもらつたお礼よ」

涼子ママは焼酎のお湯割を二人に差し出した。斉藤と森下がそのお湯割を飲もうとしたとき、背後を通つた客が斉藤にぶつかり、焼酎がこぼれてしまった。

「悪かつたな。つい足元がふらついたんで」

そう言いながらトイレに行った客は、さっきの二人組みの男の一人だ。気を取り直して飲んでいると、トイレから出てきた男が今度は

森下にぶつかって、森下の焼酎がこぼれた。

「悪かったな。つい足元がふらついたんで」

同じ言葉を吐き捨てながら男は席に戻っていった。短気な森下の形相が変わっている。それに気づいた斉藤が森下に言った。

「森下さん、バカは相手にしないほうがいいですよ。腹が立つけど関わりあいになると、何をされるかわかりませんから・・・」

斉藤の言葉に森下は頷きながら男たちのほうを見た。それを待っていたかのように、さっきの男が席を立ち、森下のところへやってきた。身長は百八十センチを超えていて逞しい身体をしている。

「オツサン。何か文句があんのか！俺はさっき謝っただろう！

気に入らないんだったら掛かってこいよ。相手をしてやるぞ」

「すみません。文句なんてありません。気に障ったんでしたら謝りますので、勘弁してください」

斉藤が森下より先に口を出した。

「お前には言っていないだよ！横から口を出すな。バカ！」

男はそう言うのと斉藤の頭を平手で叩いた。斉藤の怒りは限界に達しようとしていた。異次元のコップの水は急激に増え続け、あと一滴で溢れるところまで溜まっていた。

森下の怒りは限界を超えたらしく、イスから立ち上がった。男は待つてましたとばかりに森下の胸倉を左手で掴むと、自分のほうへ引き付けた。男の右こぶしが森下の顔を捉えようとした瞬間、斉藤の怒りが限界を超えた。一滴の水がコップに落ちた。その瞬間、男の身体が後ろへ吹っ飛び、壁に叩きつけられ男は気を失った。連れの男は何事が起きたのかという顔をして、気を失っている相棒を抱え起こした。すぐに意識が戻った男は、化け物でも見たかのような顔をして店から飛び出していった。

「森下さん、すごい！ 空手か何か、格闘技をやってるの？ 私今で森下さんのファンになっちゃった！」

興奮気味にしゃべる涼子ママとは反対に、森下は何がなにやら訳が分からない。自分は何もしていないのに、男が勝手に吹っ飛んだのだ。どう考えても百七十センチそこその自分が、あんな巨漢を投げ飛ばせるわけがない。

斉藤も不思議だった。森下は胸倉を掴まれた状態で、どうやって巨漢の男を壁まで投げ飛ばしたのか。怪力のプロレスラーでも、あの態勢で投げ飛ばすことは不可能だ。まして森下は普通のサラリーマンで、身体を鍛えているわけでもない。

「森下さん、どうやって投げ飛ばしたんですか？」

「斉藤さん。私は何もしていません。男が勝手に自分から飛んでっただんです。一体、何が起きたんですかね。不思議だ・・・」

まただ。これも超能力だ。それ以外に考えられない。でも一体誰がやったんだろう？ 斉藤はそう思いながら店内の客を見回してみただが、見てもわかるわけはなかった。

客たちは森下が投げ飛ばしたと思っている。口々に、あれは合気道だ、カンフーだ、少林寺拳法などと、にわか評論家が自説を力説していた。

森下との奇妙な出来事から一ヶ月ほど経っていた。あれ以来、何事もなく時は進んでいた。斉藤も藤村も超能力の話をしなくなっていたが、小泉と前田は斉藤に対して気を遣っている。

彼らの横柄な態度は影を潜め、社内の雰囲気は良くなっていた。会議でもしつこく責任追及されたり、あら捜ししたりされることもなくなっていた。その結果、営業マンからは前向きな発言が出るよ

うになり、それに伴い実績も少しずつではあるが伸びている。

小泉は、自分の今までのマネージメントのやり方が間違っていたのかと考えていたが、いや、そんなことはない。俺は今まで俺のやり方で売り上げを伸ばしてきたんだ。と自分に言い聞かせた。

今、時代は変わっており、社会環境も経済環境も消費者意識も大きく変化している。その変化のスピードも早い。小泉の若かった頃の時代とは大きく変化しているのに、小泉はその変化に気づいていない。変わっていないのは小泉の旧態依然とした考え方だ。その考えから抜け出せない小泉は、昔ながらのムチを振り回すやり方が絶対だと思いついでいるのだ。

小泉の影響を受けて前田も変わった。二人は今では、理想の上司に近くなっている。以前のことを思うと信じられないような変わりようだ。それは斉藤を恐れて表面上変わっただけで、本質的には何も変わっていないのだが、誰もそれには気づいていない。考えが根本から変わらないことには、それは何かのきっかけで、化けの皮が剥がれるという危険性を含んでいた。

「あああ、何だか毎日が退屈ですね。何か刺激的なことでも起きないかな」

藤村がボヤいた。

「馬鹿なことを言うんじゃない。退屈なことは平和なことだから良いことだぞ。事件でも起きたら、それこそそのんびりとしていられなくなるかも知れないんだぞ。平和が一番、退屈が一番！」

斉藤は正直な気持ちを口に出した。もう二度と小泉や前田の吊るし上げにはあいたくない。

「そうですね。退屈が一番。さあ、今日も注文もらえるように、頑張ってください！」

小泉と前田が変わってから、藤村をはじめ、営業マン全員が変わったと斉藤は感じていた。彼らは注文をもらうために、嫌々ながらではなく積極的に動いていた。藤村の言う退屈な日々がしばらく続

いていたが、斉藤は小さな出来事に遭遇することになった。

第2章 斉藤の仮説

ある日、藤村のクルマで客先まで送ってもらう途中のことだ。藤村の前を暴走族風の改造車が走っていた。片側一車線の道路で制限速度は五十キロとなっている。改造車は時速三十キロぐらいでゆっくりと走っている。追い越し禁止車線なので追い越しができない。改造車の前はガラガラだが、藤村の後ろは渋滞している。苛々していた藤村がクラクションを鳴らした。すると改造車はジグザグ運転を始めた。明らかに藤村を挑発している。

「藤村、あんなやつらに関わったら大変だぞ。この先の信号を左折して、違う道から行こう」

藤村は斉藤に言われたとおり左折した。すると改造車はUターンをして、藤村のクルマを追ってきた。

「まずいな。目を付けられたみたいだ。取りあえず街中に行こう。街の中だと彼らも手出しはしないだろう」

藤村は街に通じる脇道に乗り、制限速度を少々オーバーしながら走った。改造車も脇道に入り、クラクションを鳴らしながら追いかけてきた。掴まるのは時間の問題だ。改造車がすぐ後ろに迫ったかと思うと、追い越しを掛けてきた。改造車が追い抜きざま、助手席に乗っていた暴走族風の男が鉄パイプで藤村のクルマを殴った。鉄パイプで殴られたフロントガラスが割れ、藤村は急ブレーキをかけた。

「くっそう、あのヤロウ！」

一歩間違えば大きな事故になるところだ。前を見ると、改造車がUターンして戻って来るところだ。助手席からは鉄パイプを持った男が身を乗り出している。斉藤と藤村の怒りが一気に頂点に達した。

すでに異次元のコップの水は溢れていた。それと同時に改造車は右側の前後の車輪が浮き上がり、左側へひっくり返ったのだ。改造車はそのまま三十メートルほど滑っていき、ガードレールに接触しなから止まった。

改造車には四人の若者が乗っていた。幸いスピードがあまり出ていなくて、ガードレールに接触して止まったために屋根は潰れていなかったが、大破せずに済んだ。四人はクルマから自力で這い出してきたが、全員顔面蒼白で頭や顔からは血が流れている。

事故を目撃していた何台かのクルマから野次馬が駆けつけてきた。斉藤と藤村が見ていたとき、何かに持ち上げられたかのように改造車の片側がふわりと浮き上がり、ひっくり返ったのだ。血を流しながら震えている若者に斉藤が質問した。

「なんでひっくり返ったんだ!？」

「分かりません。急にふわりと浮いたかと思ったら、ひっくり返ったんです」

改造車を運転していた男は敬語になっている。見れば二十歳過ぎの、まだ子供のような顔をしている。

「天罰が下ったんだぞ。今後、馬鹿な真似はするな。分かったか！」

「は、はい。分かりました。もう二度としません。許してください」
斉藤の言葉に四人は震えながら答えた。全員顔色を失くしていたが、傷は軽く擦りむいた程度だ。フロントガラスの割れた車を運転している藤村に、斉藤が言った。

「藤村、おまえ超能力者だろ？ 隠すなよ。今の事件が証明してるぞ」

「斉藤さん、何を馬鹿なことを言ってるんですか。斉藤さんじゃないんですか？ 今のクルマをひっくり返したのも」

「俺は何度も家で実験してみたけど、バナナひとつも動かすことが出来なかったぞ。そんな男がクルマをひっくり返せるわけがないだ

る」

「じゃあ一体、誰がひっくり返したんですか？」

「本当にお前じゃないとしたら、誰だか分からん」

斉藤の言うとおりだ。退屈なほうが良い。もう面倒に巻き込まれるのはゴメンだ。藤村は今の一件で、つくづくそう思った。

考えてみれば、小泉所長の奇妙な出来事から始まった一連の不思議な事件は、必ず自分の怒りが爆発したときに起こっていた。もしかしたら、その怒りが何か関係しているのかもしれない。何も根拠はないが、斉藤はそんな気がしていた。

斉藤は、お得意様のC社を訪問した。半導体関連の部品を作っている会社で、業績は右肩上がりだ。社員は誰もが忙しそうに働いている。

斉藤は、設備管理部と生産技術部を訪問した。設備管理部はその名のとおり、工場設備の保全や管理を行っている部署で、生産技術部は生産の効率化、生産技術の新規開発などを行っている部署だ。斉藤は、この二つの部署から注文をもらっている。

斉藤の営業のやり方は雑談が八割で、仕事の話が二割というやり方だ。斉藤自身が、一方的な製品の売り込みやPRを好きではない。昔から人との出会いや触れ合いを大事にしているので、必然的に営業スタイルもそれに沿ったやり方になっている。

斉藤は担当者のグチを聞くのが好きだ。グチには本音が含まれているからだ。担当者からグチが聞けるようになると、その担当者と仲良くなれた証拠だと言うのが斉藤の考え方だ。だから雑談しない営業マンや、お客のグチを聞いたことのない営業マンの言うことは、いくら偉そうなことを言っても話半分で聞くことにしている。それは上司に対しても同じだ。

今日も斉藤は、田崎という定年間近の担当者のグチを聞いていた。斉藤が催促して言わせたわけではなく、向こうが勝手に話し始めるというのが、いつものパターンだ。斉藤が思うには、たぶんグチを真剣に聞いてくれる仕入先は自分しかいないのだろう。そしてグチを言える相手が社内にはいないのではないか。

「斉藤さん、私もあと一年で定年だ。やっと一年までこぎつけたよ。定年が待ち遠しいよ」

「定年になつても再雇用で、またこの部署で働くんでしょう？」

「冗談じゃないよ。なんでこんな腐った会社で働かないといけないんだ。ひどい会社だよ、この会社は。というより、この部署がひどいんだけどね」

「ええ？ 私らから見たら御社は右肩上がりだし、給料ボーナスもいいから、羨ましいと思つてるんですけど違うんですか？」

「確かにそれは大事な要素だけど、それが全てじゃないよ。うちの部署は辞める人間が多いだろう。なぜだか分かる？」

「全然分かりません」

「ガンが一人いるんだよ。あいつ」

田崎はそういうと、北岡課長のほうへ目配せをした。

「えっ！ あの人がガンなんですか？」

「そう！ あいつのせいで、皆、辞めてくんだ。本当に根性の腐つたヤツだよ。あいつさえ居なかったら、この職場も良くなるんだけどね。何とかしてくれない？」

「分かりました。何とかしましょう。あつ、冗談ですよ、冗談。私がか何とかできるわけ無いでしょう」

「くたばればカ上司！ だよ。冗談抜きで部下は皆そう言ってる。

まあ、俺の場合はあと一年の辛抱だけど、まだ先の長い連中は可愛そうだよな。北岡のバカは、定年まで七年もあるからね」

グチを言つてスッキリしたのか、田崎は注文をし始めた。斉藤は本心から何とかしてやりたかった。確かに田崎の言うとおり、北岡課長はこの部署のガンだ。斉藤が挨拶しても知らん顔で挨拶をしない。なぜだと思つていたら、部下が挨拶しても挨拶しないと田崎が言っていた。

北岡課長は機嫌が悪いと部下に八つ当たりし、部下が何か失敗すると厳しく責任追及し、部下を一切かばおうとしないということだ。責任逃れが上手で、問題が起きると部下を徹底的に責めるため部下

は疲弊し、やる気をなくしているとも田崎は言っていた。

そういう理由から、会社に内緒で転職活動をしている社員が多数いるとも言っていた。とにかくあのバカ上司を何とかして欲しいと、田崎はいつも斉藤にグチをこぼしていた。

何とかしてあげたいのは山々だが、よその会社のことに口出しは出来ないし、まして相手はお得意様の課長だ。田崎や他の所員の気持ちは充分分かっていても、自分にはどうすることも出来ない。出来ることと言えば、グチを聞いてあげることぐらいだ。そういう意味もあり、斉藤はグチを聞いているのだ。

そんなある日、斉藤が田崎を訪ねて設備管理部の部屋に入ると、岡田という四十代前半の人が、北岡課長に怒鳴られていた。後で聞いた話では、岡田さんの製品手配が遅れたため納期が間に合わず、生産が遅れるということだった。

手配伝票がすぐに処理されていればぎりぎりで間に合ったのだが、北岡課長のところで三日間も眠っていたということだ。もしその三日間がなければ、納期に間に合っていたのだ。自分の怠慢は棚に拳げ、部下を責めるのがいつもの北岡課長のやり方だ。打ち合わせのテーブルで待っていた斉藤は、聞くまいとしても聞こえてくる北岡課長の話を聞いていた。

斉藤は、自分には関係なくても、一方的に部下を責めたてる北岡課長に段々と腹が立ってきた。怒鳴られている岡田さんは、下を向いたまま黙っている。ただひたすら耐えているように見える。

他の社員はどうすることもできなくて机に向かっていている。斉藤が部屋に入ってから十分ほど経つが、北岡課長は怒鳴り続けている。たぶん、十五分ぐらいは怒鳴っているのだろう。

斉藤は我慢の限界が近づいているのを感じていたが、自分には関係ないことなので口出しするわけにはいかない。何も出来ない自分がいても、嫌な思いになるだけなので出て行くことにした。

斉藤は怒りが頂点に達したところで、出て行くためにイスから立ち上がった。そのときすでに、北岡に向けて異次元のコップの水は増え続け、カウントダウンに入っていた。

斉藤が立ち上がったと同時に、北岡課長に信じられないことが起きた。イスに座っていた北岡課長の身体が、二メートルほどふわりと浮きあがり、次の瞬間、そのまま床に落下したのだ。

床に叩きつけられた北岡課長は気を失った。怒鳴られていた岡田

をはじめ、設備管理部の社員らが、その一部始終を見ていた。救急車を呼ぶ者、保安課に電話する者、北岡課長に駆け寄り寄る者などで、社内は騒然となった。そんな中、その不思議な出来事を見ていた田崎は心の中で思っていた。

「ざまあみろ。自業自得だ。天罰だ！ くたばれバカ上司！」と。

会社に戻る途中でいろいろと考えていた斉藤は、突然呟いた。

「俺が超能力者だったんだ！ 間違いない！」

そう確信した途端、全身に鳥肌が立ち身体が震えてきた。その震えは、超能力を手に入れたという嬉しさというか、感動のせいだった。超能力を手に入れた今、俺に出来ないことはない、怖いものはない！ という不思議な自信が溢れてくるのを感じていた。

斉藤が自分を超能力者と断定したのには理由があった。今まで漠然と思っていたことが、さっきの事件で確信に変わったのだ。

斉藤の説はこうだ。自分の超能力は我慢の限界、要するに怒りが頂点に達したときに発揮されるというものだ。だからバナナやボールペンなどを動かさそうとしても、怒りが頂点に達してないので動かないのだ。

ただし、超能力がどういう形で現れるのかは、まったく予測できないし、コントロールも出来ない。これで今までの奇妙な出来事はすべて説明がつく。今度こそこの力を利用して、弱者をいたづめているバカどもを叩きのめしてやる。そう心に決めた斉藤は、小さく呟いた。「くたばれバカ上司！」

会社に戻ってきた斉藤は、藤村を応接室に呼びドアに鍵を掛けた。「どうしたんですか？ 何かあったんですか？」

何か重大なことと思っただ藤村は、小さな声で尋ねた。

「実はな、今まで起きた一連の奇妙な事件だが謎が解けたよ。原因が分かったんだ。今から説明するから決して誰にも言うな。言った

ら大変なことになるから。いいな！」

「分かりました。絶対に誰にも言いません。信じてください」

斉藤は、応接室の外に聞こえないように小さな声で喋り始めた。

「原因は超能力だ！　そして、超能力者は俺だった」

「本当ですか！　マジですか！」

藤村は身を乗り出して、興奮気味に答えた。

「ただし、俺が超能力者といっても、自由に超能力を使えるわけじゃないんだ。ある要因が起きたときだけ、使えるようになるんだ。正確には、俺の意思に関係なしに、勝手に超能力が働くといったほうが正しいんだけどな」

「どういうことですか？　今までの事件とどう関係あるんですか？」

藤村は早く説明を聞きたかった。出来ればこの場で超能力を見たかと思った。その気持ちを察しながら、斉藤はゆっくりと説明を始めた。

「まず、超能力が発揮される要因は怒りだ。怒ってないと超能力は使えない。だから、ボールペンやバナナなどを動かそうとしても動かないんだ」

「なるほど。あとは言わなくても分かります。小泉所長、前田課長、北沢さん、近鉄電車のチンピラ、鈴木部長、スナックの男の客、暴走族、こいつらに対して斉藤さんの怒りが爆発したんですね？　そのときに超能力が発揮されて、首を絞めたり、投げ飛ばしたり、クルマをひっくり返したりしたわけですね！」

「そのとおり。これで俺が居た場所で、不思議な事件が起きたのが分かっただろう。お前も俺と一緒に、あの事件に行くわけだ。逆に言えば、俺と一緒にいないときに、同じようなことは起きてないだろう？」

「なるほど。これでスッキリしましたね。僕も斉藤さんの逆鱗に触

れないように注意しなくては」

「もっと俺に気を遣えよ。手抜きすると容赦しないからな。アツハツハツハ。冗談だよ。俺はそんな悪党じゃないから安心しな」

「超能力者ですか！ すごいなあ。うらやましいなあ。スターウォーズのジェダイの騎士と同じですね。向こうはSF映画ですけど、斉藤さんは本物ですからね」

藤村は心底羨ましいと言わんばかりの顔で、斉藤を見ながら続けた。

「でもいつから超能力が使えるようになったんですか？ どういうきっかけからですか？」

「半年ほど前、頭にハンマーが当たって怪我をして入院したことがあっただろう。あれが直接の原因だと思うんだ。上手く言えないけど、あれから自分の中で何かが変わったような気がしてたんだ。そんな気がしてたときに、最初の事件が起きたんだ」

「そうなんですかあ。僕も頭を怪我してみようかな」

「冗談ではなく、本気で藤村はそう思った。それで超能力が身につくのなら、多少の痛みは我慢できると思った。

「馬鹿なことを言うもんじゃない。たまたま運が良くて助かったけど、下手したら死んでるか、あるいは後遺症が残って障害者になってたところだったんだぞ」

三十分ほどして応接室から出てきた二人は、何事も無かったかのように自分の机に戻った。

今日斉藤が向かったのはC社だ。北岡課長のその後の様子を聞くために、定年間近の担当者の田崎に会う約束をしていた。

「こんにちは。田崎さん。北岡課長のその後の容態はどうですか？」

「あの高さから落ちて、幸いというか悪運が強いというか、怪我ひ

とつなかつたんだよ。あのときは頭を打って、脳震盪を起こしてただけだったんだ。一応、検査のために二日間入院したけど、もう出社してるよ。今は会議でいいけど」

「何事もなくて良かったですね」

「ところが何事もなかったんじゃないやなくて、あれからあのバカが変わったんだよ。それも良いほうだよ」

「どういうことですか？」

齊藤は、田崎の言ってることが信じられなかった。

「考えてみれば、あの事件そのものが常識では考えられなかったよな。人間が空中に浮き上がって、そのまま落ちたんだから。誰も課長に触れてなかったし、何人も人間が見てたから、あの現象は現実だったんだ。齊藤さんも見てたんだらう？」

「はい。私も一部始終を見ました」

「課長は相当ショックを受けたみたいなんだ。だって、常識外のことが起きて、その当事者が自分だらう。課長は自分に天罰がくだったと思っただみたいなんだ。冗談みたいな話だけど、本当にそう思ってるらしいよ。それで今までのことを反省したみたいで、それからさっき言ったように、良い方向へ変わったんだよ。俺たち部下にしてみたら、天罰にお礼を言いたいぐらいだよ」

「そうなんですかあ。理由はどうであれ、結果的には万々歳ですね」
「そのとおり。これでこの部署も仕事がやりやすくなると思うよ。」

「バカ上司が反省してくれて良かったよ。いつも、くたばればカ上司！ と思っていたのが、天に通じたんだな。きっと」

田崎は満足そうな顔をしている。他の担当者の様子を見てみると、気のせいかどうかは分からないが、以前の暗い雰囲気ではなくて、明るく伸び伸びとしているように見える。

齊藤が今まで多くの企業を訪問して思ったのが、くたばればカ上司と思われているマネージャークラスが、たくさん居るといふこと

だ。自分の会社でもそうだが、どこの会社にも必ず何人かはいて、部下を苦しめている。

斉藤は、バカ上司に寄生しているバカ虫を退治して、まともな上司に戻してあげるのが自分の使命だと思った。そのために超能力という素晴らしい力を、神様から与えられたのだと考えていた。

斉藤は、この力はバカ上司に限定することなく、困っている人たちの役に立てなければならぬとも考えていた。まるで自分が、映画のスーパーマンやスパイダーマンなどのスーパーヒーローになつたような気分だった。

超能力を手に入れた斉藤は、それと同時に勇気も手に入れていた。今までは暴力沙汰になりそうな場面に遭遇すると、多くの人たちと同じように見てみぬ振りをしてきた。例の近鉄電車でのチンピラの一件もそうだ。

今は誰にも負けない能力があるので、たとえ格闘技の達人と言えども、負ける気はしない。超能力を手に入れたことで、斉藤のすべてが好転し始めていた。

金曜日の夜、斉藤と藤村の姿が、行きつけの居酒屋にあった。花金の夜は、名古屋の居酒屋はどこも混んでいて、斉藤たちが居るこの居酒屋も例外ではない。会社帰りのサラリーマンは当たり前前の姿だが、最近は若い女性の姿も目立つようになり、女性だけのグループも多くなっている。メニューも女性を意識したものが増えている。女性サービスマンというのをやっている店もある。

斉藤と藤村の話題は、もっぱら超能力のことだ。斉藤は、超能力をどういうふうに役立てるのか、考えていたことを語った。

「素晴らしい！ 最高ですね。斉藤さん。くれぐれも悪事に利用しないでくださいよ。ダースベイダーみたいにならないでくださいね」

「当たり前じゃないか。いくら酔ってもそんなことはしないぞ。」

お前じゃあるまいし」

「良く分かってますね。僕だったらやりかねませんよ。アッハッハッハ」

二人が気分良く居酒屋を出たのは午後十時ごろだ。居酒屋を出て藤村と別れた斉藤は、地下鉄の駅に向かう途中、女子高生が二人の若い男に絡まれている所に出くわした。以前ならそのまま素通りしているのだが、今夜の斉藤は違っていた。そもそも女子高生がこんな時間まで繁華街にいること事体が、犯罪者の餌食になることになるのだが、今はそんなことはどうでもよかった。

「お前ら、なにやってるんだ！ 彼女が嫌がつてるじゃないか。警察を呼ぶぞ。お嬢さん早く帰りなさい。ここは女子高生が来るような場所じゃないよ」

斉藤の言葉に男たちが女子高生から目を離した。その隙に女子高

生は一目散に駆け出して、逃げていった。斉藤も立ち去ろうとしたが、男たちがおとなしく見過ごすわけはなかった。

「おっさん！ 何をカツコつけてるんだ！ こんなことしたらどうなるか分かってるんだろうな！」

チンピラ風の二人は、歳のころは二十代前半といったところだ。身長は二人とも百八センチくらいある。一人が斉藤に近づくと、いきなり左手で斉藤の胸倉を掴んだ。

「ただで済むと思うなよ！ 痛い目に合うのと、カネで解決するのとどちらを選ぶか決めろ！」

「どっちもイヤだね。このまま帰してくれないか。お願いだ」

その次の言葉を言う前に、男の右こぶしが斉藤の腹部を襲った。

「ゲホッ！」

激痛に顔をゆがめた斉藤は、怒りが頂点に達した。

「お前たち、俺を怒らせたらどうなるか知らんぞ！」

そう言うとき斉藤は、このやろう殺してやる！ と、心の中で叫んだ。怒りは頂点を越えている。斉藤は男たちが吹っ飛ぶ場面を確認していたが、何も起こらない。男たちは平然と立っている。

「おっさん。怒ったらどうなるか見せてもらいたいが、先に俺たちが見せてやる！ 覚悟しろよ」

二人の男にさんざん殴られ蹴られた斉藤は、気を失っていた。目を開けると、十人ぐらいのサラリーマン風の男性に囲まれていた。

「大丈夫ですか？ かなり酷くやられましたね。たまたま我々が通りかかったから良かったですよ。もしあのまま殴られてたら、死んでたかもしれませんよ」

斉藤が気絶していたのは、時間的には五分くらいだ。通りかかった男性たちは大学の柔道部の同窓生で、全員が屈強な体つきをしている。斉藤は彼らに礼を言うと思む身体を引きずりながら、地下鉄の駅へと向かった。顔は腫れ上がり血が流れている。地下鉄の駅に

着くとトイレに入り、血の付いた顔を洗った。

帰宅した斉藤は、そのままベッドに倒れこんだが、身体のうちこちが痛んでなかなか眠れない。斉藤はシヨックだった。チンピラにやられたのは痛いだけだが、超能力者だと思っていた自分が、超能力が使えなかったからだ。怒りは頂点に達していたが、何も起こらなかった。超能力というのは、ただの妄想だったのだ。SF映画じゃあるまいし、超能力なんかがあるわけがない。実際にテレビで取り上げられる超能力にしても、曖昧で胡散臭いものがほとんどだ。そんな超能力が自分にあると思っていた自分が情けなかった。惨めだった。

翌日の土曜日、斉藤は家族に顔を見られる前に家を出て、車で十分ほど行ったところにある整形外科に向かった。身体のうちこちにアザが出来ていたが、右の肋骨の辺りが特に痛い。診察を受けた結果、右の肋骨にヒビが入っていた。顔は十二ラウンド闘ったあとのボクサーみたいだが、骨には異常はなく、十日もすれば腫れも引くという診断だ。

整形外科から帰宅した斉藤は妻の香織に問い詰められ、昨日の出来事を包み隠さず話した。ただし、超能力のことは言わなかった。香織は警察に届けるべきだと言ったが、相手の男たちのことをあまりよく覚えてなかったし早く忘れたかったので、警察へは届けなかった。

翌週の月曜日、入社した斉藤を見た全員が驚いた。朝礼のあと、小泉に呼ばれて応接室へ入った斉藤は、金曜日の夜のことを包み隠さず話した。

「そのとき、君は怒らなかったのか？ 怒ってたら相手の男たちは、ただでは済まなかったと思うんだけどな」

「怒ったんですが、何も起こりませんでした。その結果、こんな姿になってしまいました」

「どうして何も起こらなかったんだ？ 俺と前田くんに起きたみたいなのは、何も起こらなかったのか？」

「理由は分かりませんが、結論から言えば、私には最初から何の力もなかったということです。先日、変なことを言って済みませんでした。結局、私が怒っても何も起こらないということなんです」

その言葉を聞いた小泉の顔が途端に険しくなった。

「なに！ この前、俺たちを脅したのはハツタリだったのか！ お前に脅されて、俺と前田がどんな思いでいたか分かってるのか！ すみませんでは済まさんぞ！ お前はもういいから前田を呼んで来い！」

小泉の怒りは相当なものだ。まさに鬼の形相という言葉が相応しい。前田が応接室へ入ってから小泉と一緒に出てきたのは、一時間後だ。中止されていた朝のミーティングが翌日から再開された。

営業マンたちはぶつぶつ言いながら会議室へ入ったが、小泉と前田の変わりように啞然となった。昨日までの物分りのいい上司は何処へやら。以前のふてぶてしい態度の上司に戻っていた。

昨日まで、腫れ物を触るような態度で接していた斉藤を、重箱の

隅を突くように二人で責め始めた。

藤村は心の中で、殺してやる！ くだばれバカ上司！ と叫んでいたが、斉藤の中に怒りはない。いくら責められ怒られても、自分が悪かったと思うと反論する気も怒る気も起きない。

ミーティングでこれでもかと言わんばかりに、徹底的に責められた斉藤だが、それでも腹が立たなかった。逆に小泉と前田は、これだけ斉藤を怒鳴り散らしたのに、何も起きなかったことに心底安堵していた。この前の事件は医者の方の言ったとおり、自律神経の異常が原因だったんだ。そう確信した小泉と前田は、顔を見合わせニヤリと笑った。

それからの朝のミーティングでは、斉藤が標的となった。見てみると、単なるイジメ、パワーハラスメントだ。藤村は、斉藤が可愛そうでならない。心の中で泣いていた。斉藤から、自分は超能力者ではないと聞かされ丸腰になった今、斉藤も藤村も、職権という武器を持った小泉と前田に立ち向かうことは出来なかった。

月、火、水と続いた朝のミーティングでの斉藤への攻撃は止まることもなく、今日で四日目だ。翌日の金曜日にも斉藤イジメが始まった。小泉と前田の叱責が交互に繰り返された。さながら一人の弱者を、よつてたかって袋叩きに行っているようなものだ。ひたすら我慢していた斉藤だったが、ついに怒りが頂点に達した。空っぽだった異次元のコップの水が、一気に満杯になった。

斉藤の怒りが爆発したと同時に、小泉と前田が苦しそうに首を掻き始められた。以前と同じ状況が起きたのだ。

会議室は騒然となったが、今回は前回とは違っていた。首を掻き始めている二人の身体が、メートルほど空中に浮いたのだ。十秒ほど浮いていたかと思うと、そのまま床に落下した。足から落ちたので、落下による怪我はなかったが、首からは鮮血が流れている。前回と同じように一分ほどで正常に戻ったが、二人とも顔面蒼白になっている。

藤村は二人を心配するどころか、歓喜していた。

「超能力は存在したんだ！ やっぱり斉藤さんは超能力者だったんだ！」

今の現象は、藤村にそう思わせるのに充分過ぎるほどの衝撃を与えた。藤村は二人には見向きもせず、斉藤を会議室の外へ連れて行った。

「斉藤さんはやっぱり超能力者ですよ！ 超能力は存在するんですよ！ 自信を持ってください」

社内に聞こえないように小さな声で斉藤に言いながら、藤村は泣いていた。

「藤村ありがとう！ お前に言われて自信が持てそうだ。もう一度、どうやったら超能力が発揮できるのか冷静に考えてみるよ。今ので、超能力があるというのは間違いないと分かったから」

斉藤は帰宅してから考えてみた。確かに超能力が存在するのは分かった。

もし、怒りが爆発したときに超能力が現れるんだったら、飲み屋の帰りに女子高生を助けたときに出なかつたのはなぜなのか？ 本当に自分に超能力があるのか？ あるとしたら、いつ発揮されるのか？ どんなきっかけで発揮されるのか？

考えてみると以前と同じく堂々巡りになって、なかなか結論が出ない。斉藤は、もし自分に超能力があるとしても、それをコントロールできるようになるまでは、出すぎたマネはしないように決めた。

翌日、小泉と前田は検査のために病院を訪れていた。しばらく異常はなかったので、医者は自律神経の異常用に処方した薬が効いていると思っていたが、昨日の出来事でそれは否定された。二人を診断した医者は、宙に浮いたという二人の話から、処方した薬の副作用で幻覚が起きたのだろうと判断した。

医者の診察を受けながら、小泉と前田は同じことを考えていた。前るときと違って今回は宙に浮いて落とされた。常識では考えられない何らかの力が働いたとしか思えない。

二人は一緒に病院を出て、タクシー乗り場に向かった。タクシーは出払っていたので待つことにした。

「もしかしたら、斉藤は俺たちを試したんじゃないか？俺たちの本音を探るために。そうとしか思えないんだが、お前は思う？」
「あの顔の傷は何とも言えませんが、言われてみればそうかもしれない。もしそうだとしたら手遅れですよ。前に斉藤が言いましたよね。次に怒ったらどうなるか分からないと・・・」

「確かに今回は宙に浮いて落とされたし、次はどうなるか分からないぞ。この際、斉藤に本気で謝るしかないな。もう何があっても、あいつには逆らわないほうがいいぞ」

「分かりました。私もその意見に賛成です」

タクシーが来たので二人は話すのを止めて、タクシーに乗り込んだ。二人はタクシーの中では無言だ。これから起こるであろうことを考えると、喋る気にはなれない。これが夢なら早く覚めてくれ！
現実だとは分かっているけど、小泉は心の中で叫んだ。

二人が会社に到着したのは午前十一時だ。二人は強張った表情で会社のドアを開けた。運よく斉藤は出かけており、帰社時間は十七

時になっている。胸を撫で下ろした二人は応接室に入りソファに腰を下ろすと、大きな安堵の息を吐いた。

「所長、斉藤が帰ってきたら、まずどうします？」

「とにかくここへ呼んで謝ることが先決だな。あとは斉藤の出方を見てから決めることにしよう。こうなったら、どうにでもなれだ！」

半ば開き直ったような小泉だが表情は硬い。前田は小泉の口車に乗って、斉藤を責めたことを後悔していた。どんな仕打ちをされるのかと思うと、生きた心地がしない。一時間ほどで応接室から出てきた二人は自分の席に座ったが、仕事が手に付かない。そうこうしている内に、時計は十六時半を指していた。

それから五分ほどして斉藤が帰ってきた。ドアを開けて、ただいまあ、と言つて入ってきた斉藤は、小泉と前田が居るのに気づいた。

「お疲れ様です。容態はどうですか？」

「ああ、おかげさまで、もう大丈夫だよ」

小泉が元氣なく答えた。

「あまり元氣そうに見えませんが、出てきて大丈夫ですか？ 帰って休んだほうがいいんじゃないですか？ また、同じようなことが起きたら大変ですからね」

斉藤の言葉に、小泉と前田はドキツとした。やはり斉藤は怒っているんだ。それとなく、また起きるといふことを俺たちに警告したんだ。そう思うと、小泉は恐ろしかった。居ても立ってもいられなくなり、斉藤に応接室へ入るように言った。斉藤と小泉が先に入り、あとから前田が入ると応接室のドアに鍵を掛けた。

「斉藤君、悪かった。許してくれ」

小泉がそう言つて頭を下げると、前田も一緒に深々と頭を下げた。「何を言つてるんですか所長。私に何を許して欲しいんですか？

仰つてる意味が分かりませんけど」

察しはついていたが、小泉と前田の言うことを聞いてみたかった。「君をさんざん責めて申し訳なかった。今後、二度とあんなことはしないから、許してくれ。頼む」

「私には、お二人の考えが分かりません。徹底的に責めたと思ったら、二度としないから許してくれですか。いい加減にしていただけませんか。私が責められていたとき、言い間違えました。イジメられていたとき、どんな気持ちだったか分かりますか？」

「本当に悪かった。許してくれ」

小泉はオウムのように同じことを繰り返しながら、またしても頭を下げた。前田も一緒に頭を下げた。

「私が言ったことを覚えていますか？ 私を怒らせたらどんなことになるか、自分でも分からないと言いましたよね！ でもあなたたちは私を恐れることはないと思っただけから、ここぞとばかりに徹底的にイジメ始めました。あれはどういう考えからですか？ それを聞かない限りは、許すつもりはありません。今度は宙に浮くだけでは済みませんよ。自分でも何をするか抑えられないような気がしていますから」

「済まなかった。許してくれ。このとおりだ」

小泉はそう言つと、またしてもバカのひとつ覚えのように頭を下げた。

「所長、正直なところ今にも爆発しそうです。かろうじて怒りを止めてるんですが、今度もまた許してくれと言つて頭を下げたら、応接室が吹っ飛ぶかもしれません！ それだと社内の人たちに迷惑がかかるので、爆発する前に席に戻ります。さっきの返事は明日聞かせてください」

齊藤は立ち上がると、そのまま出て行った。

「所長、怒らせてしまったじゃないですか。どうするんですか！ 我々は今、もの凄く危険な状態ですよ」

前田の顔色は真っ青で声も震えている。もともと気の弱い、寄らば大樹の陰みに強いものに寄っていく性格の前田は、生きた心地がしなかった。考えれば考えるほど、恐ろしい光景が頭の中を駆け巡った。

翌日、朝のミーティングが始まった。今朝の小泉と前田は、ふんぞり返らずに普通に座っている。

「前田課長と話し合ったんだが、やはり毎朝ミーティングをやるのは時間のムダということになり、今日限りで永久に止めます。それと、業績が良くなかったので皆さんに八つ当たりして申し訳なかったと思ってます。ついイライラしてカツとなり、皆さんを傷つけるようなことを言ってしまったが、あれは本心ではないので、どうか許してください。もう二度とああいうことはありません。これから先も、一緒に頑張りましょう」

営業マンたちは小泉のあまりの変わりように、頭がおかしくなったのではないかと思った。斉藤は百歩譲ったとしても、今までの小泉を見ていると、言っていることはまったく信用できないと思っている。

「私は所長と一緒に頑張るつもりですから、この前のような災難で身体を壊さないように気をつけてください。どうなったのか分かりませんが、十メートルも二十メートルも浮かび上がって落ちたら、怪我では済みませんからね」

「僕も斉藤さんと同じく、所長と一緒に頑張ります。話は変わりますが、一度、神主さんに来てもらって、この建屋をお払いしてもらったほうがいいと思います。なんだか変なことばかり起こるので」

藤村が斉藤を後押しするように言った。

今日は花の金曜日、花金だ。斉藤は、大手製造メーカーA社を訪れていた。午後一時半に調達課の北沢とアポイントを取っていた。あの事件以降、北沢の仕入れ業者に対する態度が多少良くなったような気がしていたが、まだ何とも言えない。

「こんにちは北沢さん、見積をお持ちしました。ご検討お願いします」

打ち合わせのテーブルの上に見積書を出した斉藤は、北沢の反応を待った。相変わらず約束の時間を無視して、キーボードを叩いている。挨拶を返そうともしない。北沢の対面に座っている森岡は、斉藤に頭を下げた。

そのまま時間は過ぎていったが、北沢はパソコンから目を放さない。まだ時間がかかりそうな様子なので、斉藤は森岡を呼んだ。

「森岡さん、誕生日占いの本をしばらくお貸ししますから、読んでみてください。結構、当たってるんですよ」

そう言いながら、カバンから一冊の本を出して渡した。

「ありがとうございます！ 遠慮なくお借りしますね」

森岡は本をパラパラと捲りながら、小さな声で訊ねた。

「ところで、約束の時間は何時なんですか？」

「すでに二十分過ぎています」

「北沢には本当に腹が立つんです！ 時間は守らないし、業者さんに対する態度は悪いし、早く辞めればいいと思ってるんですけど、定年まであと二年もあるんですよ」

それから五分ほど北沢の悪口を言った森岡は、席に戻った。腕時計を見てみると、約束の時間を三十分過ぎている。段々と腹が立ってきた斉藤は、立ち上がりながら北沢に声をかけた。

「北沢さん、お忙しそうですし、私も次のお客様と約束がありますので、今日のところは失礼します。また出直してきます」

斉藤の言葉に、パソコンの画面を見ながら北沢が答えた。

「分かった。あと五分で終わるんだが、帰るんだったらこの見積の注文は無しだ。もう少し待てないのか！」

斉藤はたちまち怒りが爆発した。異次元のコップの水は一気に溢れ出した。それと同時に、北沢の顔面が激しくキーボードに叩きつけられた。必死で頭を上げようともがく北沢だが、何か見えない力で頭を押さえつけられているようで、上げることができない。

周りに座っている社員が駆けつけて、北沢を起こそうとしたが、顔がキーボードに張り付いたみたいに動かない。顔からは血が流れ出している。一分ぐらい経った頃、ようやく北沢は顔を上げることができた。血が流れている顔には、キーの跡が残っていた。斉藤は森岡に軽く頭を下げると、部屋から出て行った。

斉藤は終業のチャイムが鳴ると、藤村と一緒に会社を後にした。

今日は呑みたい気分だ。いつもの居酒屋に入った二人は、ウェートレスに案内され、テーブル席に着いた。

「取り合えず、生の大を二つと、枝豆二つ持ってきて」

すぐに運ばれてきた生ビールで乾杯をすると、二人は乾いた喉に生ビールを流し込んだ。良く冷えたビールが五臓六腑に染み渡る。

「かああ、美味しい！」

二人は同時に、満足そうな声を発した。

「ところで斉藤さん、所長と課長の件のあと、どこかで力を使いました？」

藤村が興味津々という感じで、身を乗り出して話しかけてきた。

「今日、A社の北沢が痛い目に遭ったのを目撃したよ」

「また他人事みたいに言っつてえ。斉藤さんがやったんでしょう？」

「人聞きの悪いことを言うなよ。俺はただ、腹の中で怒っただけだ

ぞ
「
そう言いながらも、満足そうな表情でビールを口に運んだ。夕方の六時から飲み始め、時間は八時を回っている。店内はサラリーマンと思われる男性が多い。」

齊藤と藤村は店を出ると別れて帰った。今回はこのあと女子高生を見つけて災難にあったため、齊藤は別の通りを歩くことにした。歩いている途中に公園があったので、少しだけ覗いてみることにした。公園にはビニールシートやダンボール、廃材などで作られた、住居らしきものがいくつもあった。それは一目でホームレスのものと分かった。

ある考えが浮かんだ齊藤は、三人で集まって話をしてる彼らに近づいていった。歳は良く分からないが、五十歳から六十歳ぐらいに見える。

「こんばんは」

「何か用ですか？ 私らは、カネは持ってないよ」

ホームレスは警戒しながら言った。

「何も取るつもりも、危害を加えるつもりもありませんよ。ちょっと話をしたいだけです。ここに住んでいて夜とかは危険じゃないですか？」

「危険だよ。時々イカレタ若い奴らが襲ってくることもあるんだ。」

この前も一人やられて、頭を怪我したよ」

「ひどいですね。襲ってくるのは何時ごろですか？」

「だいたい九時以降だね。エアガンや角材で襲ったり、物を投げついたりするんだ。酷いものだよ。何か憂さ晴らしに面白半分やっつてみたいなんだ。俺たちを動物か何かと思ってるみたいだよ。親はどんな躰をしているのか、親の顔を見てみたいよ。ああいう奴らは、一度懲らしめないと止めないよ」

ホームレスの一人は、見ず知らずの齊藤に胸のうちを語ってくれ

た。よほど誰かに訴えたかったのだろう。話しながら目には涙を浮かべている。

「分かりました。一緒に懲らしめましょう。今夜は私がここにいます」

「相手は角材などを持ってくるんだけど、あんた一人で大丈夫か？ホームレスは斉藤を見ながら心配そうに言った。どうみても強そうに見えない斉藤を、心配しているようだ。

「あなたがたの協力がないと、私一人ではダメです」

「無理だよ。相手は若くて体力もあるし、数人で物を持って襲ってくるから」

「私の言うとおりにやってくれば大丈夫です。あなたがたは奴らに対して、腹が立つてるんでしょう？ それだったら、その気持ちに奴らにぶつけてください。このやろう！ 殺してやる！ というぐらい、強い怒りをこめて。それだけでいいです。あとは私がやりますから」

「それだっ たら言われなくてもいつも思ってるよ」

斉藤の言葉に、彼らは憎しみと力を込めて答えたように聞こえた。

斉藤はホームレスの小屋に入れてもらい、奴らが来るのを待った。夜の十時を過ぎた頃、誰かが来る気配がする。ホームレスがビニールシートの隙間から外を覗いて囁いた。

「やって来ました。三人です。皆、手に角材らしきものを持ってます。大丈夫ですか？」

ホームレスは不安そうに怯えながら、斉藤に囁いた。

「いいですか、私の言ったとおりに怒りを込めて、その怒りを奴らに思いつきりぶつけてください。奴らがやられているところをイメージしながら」

「分かりました。もう今にも怒りが爆発しそうですよ」

斉藤はOKと言う様に、ホームレスの肩をポンと叩いた。それが合図だったかのようなタイミングで、奴らの攻撃が始まった。

罵声を浴びせながら、角材でホームレスの作った小屋を叩き始めた。斉藤は段々と怒りが込み上げてきたが、じっと耐えている。まだ限界に達していない。やつらの攻撃はさらに激しくなってきた。ホームレスの一人が、悲鳴を上げながら助けてと叫んだとき、斉藤の怒りが頂点に達した。異次元のコップの水も一気に満杯になり、溢れ出した。

その瞬間、三人の若者が五メートルほど後ろに吹っ飛び、背中から落ちた。しばらくして一人が起き上がったが、二人は気絶しているようで動かない。

起き上がった一人が倒れている二人を起こし、ほっぺたを叩いた。気がついた二人は背中に手をやり擦っている。よほど痛いのだろう。三人は何事が起きたのか確認する時間もなく、今度は三人の身体が二メートルほど宙に浮いて、うつ伏せの体勢で落下した。

「ゲウエ！」

悲鳴とは思えない奇妙な声を発した三人は、腹を抱えて苦しそうに悶えた。

「助けて・・・！」

三人は苦しそうに小さな声で助けを呼んだ。それを聞いた斉藤が彼らに近づいて行つた。見てみると高校生みたいだ。

「お前たちに天罰を与えた。二度と彼らを襲うようなことをしたら、これだけじゃ済まないぞ。分かつたな！」

「わ、分かりました。もう、しません。許してください。許してください」

泣きながら謝る彼らは、親に叱られた子供のようだった。咳き込みながら、許してくださいを何度も繰り返した。

「もういいから早く帰れ！」

自分の子供を叱っているような斉藤の言葉に、角材やエアガンを取るのも忘れ、彼らは一目散に走って去っていった。彼らが立ち去るとホームレスたちが駆け寄ってきた。

「驚いたな！ あんた一体何をしたんだ？」

「何もしてませんよ。あなた達がやつたんじゃないんですか？」

「確かに俺は、やつらをぶん投げてるところと、首根っこを掴んで持ち上げているところをイメージしたけど、実際そのとおりになつて驚いたよ」

「もう大丈夫です。彼らは二度と来ませんよ」

「ありがとう！ あんたのおかげだよ。本当にありがとう！」

ホームレスはきつく斉藤の手を握り締めながら礼を言った。その目には涙が溢れている。斉藤はホームレスに別れを告げると、自宅へと向かった。

自宅へ着いた斉藤は風呂に入ると、A社の北沢課長と公園での若者のことを振り返って考えてみた。今日斉藤は、ある実験をしたの

だ。いろいろと考えていた斉藤は期待通りの結果が出たのか、ニヤリと笑うと右こぶしを握り締め小さくガッツポーズをした。その姿は、自信に満ち溢れていた。

月曜の朝、朝礼が終わってから斉藤は、小泉と前田を呼んで応接室へ入っていった。普通なら小泉たちが部下を呼ぶのだが、今朝は逆だ。応接室へ入った斉藤は、先週の夜の話を始めた。ホームレスたちが若者に襲撃されて怯えていたこと。その晩も若者が三人で襲ってきたこと。襲ってきた若者が、五メートルほど吹っ飛ばされたこと。そのあと二メートルほど宙に浮いて、そのまま地面に落下したことを淡々と話した。

「ホームレスの話を聞いていて、あまりに彼らが可愛そうで若者たちに腹が立つてきたんです。最初は話しあいを試してみてもりだつたんですが、彼らは角材やエアガンなどを持っていて、話す前からホームレスの寝ぐらを襲い始めたんです。こうなると話し合いも何も出来なくて、私も段々と腹が立つてきて、とうとう怒りが爆発したんです。あとは今話したとおり、若者に天罰が下つたんです」

「君が天罰を与えたのか？」

「違います所長。私はただ見てただけです。天罰を与えたのは神様だと思いません。私とホームレスの怒りが神様に通じたんでしょうね。お二人を呼んだのは、こんな不思議なことも現実にあるというのを、知っておいて欲しいと思ひまして。以上です」

そついと斉藤は応接室から出て行った。

「前田君、斉藤はなんのために我々に今の話をしたと思う？」

「理由はひとつしか有りません。今度俺を怒らせたら、お前たちも三人の若者たちと同じになるぞ。という警告です。斉藤の不思議な力は本物ですよ！」

斉藤は自分の仮説が正しいという自信があつたが、まだやってみたい実験がいくつかあつた。その実験で、まだ確認していない自分の仮説が正しいかどうかを、確かめてみるつもりだ。応接室から出てきた斉藤は、藤村を呼ぶと一緒に会議室に入った。

「斉藤さん、何かあつたんですか？」

「五分だけ俺の実験に付き合ってください」

「いいですよ。何をすればいいんですか？」

斉藤はボールペンを取り出すと、テーブルの上に置いた。

「精神を集中して、ボールペンが動くところをイメージして欲しいんだ」

「超能力の実験ですね。分かりました」

そう言うと藤村はボールペンを凝視し、言われたようにイメージした。同時に斉藤も動け動けと念を込めた。五分ほど経つたところで斉藤が言った。

「ありがとう。これで実験終わりだ。ボールペンが動くと期待してたんだが、ダメだったな。残念」

斉藤の仮説は、誰かと一緒に念を送ると、相手の思ったことが起きるというものだが、その仮説はあえなく否定されてしまった。この仮説はダメだったが、斉藤は次の仮説の実験をしようと考えていた。ただ、その実験には斉藤の知らない人物が必要となるし、小道具の準備も必要だ。

第3章 サラリーマン水戸黄門

十七時半に就業時間を知らせるチャイムが鳴った。斉藤は手早く机の上を片付けると、一目散に自宅へと向かった。次の実験に参加してくれる人を探すために、斉藤はブログを開設することにした。そのため早く帰宅したかった。

インターネットで検索してみると、ブログ開設は簡単にできることが分かった。ブログの雛形やパーツが揃っており、すぐに開設することは出来る。ブログのタイトルは、『くたばれバカ上司!』とした。このタイトルが、今からやろうとしている実験そのものだ。ハンドルネームは、斉藤がやろうとしていることにピッタリの名前があった。水戸黄門だ。

「あなたの職場（会社）のバカ上司や、懲らしめてやりたいバカ上司のことを心置きなく書いてください。バカ上司に対してなぜ怒っているのか、バカ上司がいることでどんな目にあっているのか、バカ上司をどうしたいのかも教えてください。私、水戸黄門が、悪代官ならぬ、あなたの職場のバカ上司を成敗したいと思います。もしかしたら、このブログに書くことで、あなたの想いが現実になるかも知れません」と、メッセージを載せた。

ブログを開設してから一週間が経ち、少しずつ書き込みが増え始めていた。斉藤は似たようなブログやサイトを検索してみた。それらへの書き込みを見ると、上司に不満を持っている人は思っている以上に多い。

その内容は、セクハラ、パワハラ、イジメ、評価の不公平、サビス残業の強要など様々で、中にはとても苦しんでいる人もいた。これらの書き込みを見て、やはり水戸黄門として旅をしないとけないと、斉藤は心に決めた。

実験には、ワイヤレス型ＣＤカメラの送受信機が必要だ。少々値が張ったが、実験をやりたいという気持ちで勝り、それを購入することにした。送受信機の準備も出来、あとは実験に参加してくれる人を探すだけだ。斉藤は、さながら水戸黄門になった気分だ。そんな中、次の書き込みが目についた。

「私は名古屋市内に住んでいる二十代の女性で、ニヤンコといいいます。派遣社員として働いています。私が勤務している部署の女性課長はとても性格が悪く、常に誰かをターゲットにしていなないと気がすまない人で、現在私がターゲットにされています。完全に私を無視して、周囲の人にも私を無視するように仕向け村八分状態です。周りの人はその女性課長を凄い大物のように扱うので、自分は特別な存在だと勘違いしています。親切に色々教えた人も平気で裏切り、心底腹が立ちます。とにかく毎日が辛いです。出来れば黄門様に、このバカ上司を成敗していただきたいです」

斉藤は早速、この女性に次の内容のメールを送った。名古屋市内ということもあって場所的にも都合が良い。

「ニヤンコさんこんにちは。水戸黄門です。バカ上司で大変辛い思いをされてるみたいですね。心情、お察しします。もう少し詳しくお聞きしたいので一度お会いしませんか。今週の水曜日の夕方六時に、名古屋地下街の カフェで。お返事お待ちしております」

翌日、ニヤンコからOKですというメールが届いた。メールにはデジカメで撮った写真が付いている。斉藤も自分の顔写真をメールに添付して送った。

水曜日の夕方六時、 カフェに斉藤とニヤンコの姿があった。

二人は、自己紹介をした。

「水戸黄門です。今日はわざわざ来ていただき、ありがとうございます」

「ニヤンコこと、中山恵理子です。こちらこそ、私のために時間を割いていただき、ありがとうございます」

「早速ですけど、その女性課長の話をもう少し教えていただけませんか？」

「とにかく酷い女です。我が物顔で何でも仕切っているんです。彼女の機嫌を損ねようものなら、徹底的に意地悪されるんです。特に私のような派遣だと、何かにつけて派遣社員のくせに、って言うんです。私が彼女に意地悪しているわけでも逆らっているわけでもないのに、今は私が標的なんです。私の前は、やはり派遣社員の女性が標的でした」

「部下から課長に注意はできないでしょうが、所長は彼女のそういうところを知ってるんですか？」

「所長は男性ですが、知っていても何も言わないんです。見て見ぬ振りなんです。あつ、課長の名前は五十嵐恵子って言うんですけど、所長は完全に五十嵐になめられてるんです。見ていたら、どっちが所長か分からないです」

「他の部下の人たちも、五十嵐課長を嫌ってるんですか？」

「もちろんです。目の前ではそういう素振りは見せませんが、影では悪口の言い放題です。五十嵐みたいな女を好きになる人間なんていません」

中山は語気を荒げながら喋った。よほど腹が立っているらしい。

「あなたは会社では五十嵐に対して、このやろう殺してやる！ぐらの気持は持っていますか？ 不謹慎な質問で申し訳ないんですけど」

「誰だって自分がイジメられたり、嫌がらせをされたりしたら、そ

ういつ気持になると思っんですけど」

「ところで彼女を成敗するとしたら、どうして欲しいですか？ 例えばの話ですよ。この際、出来る出来ないは考えないで」

「そうですね。会社を辞めさせたいです。転職させるのもいいかと思っんですけど、そうなると彼女が行った営業所の人可愛そうですから、辞めてもらうのがいいです」

「ほつぺたを張り倒してやりたいとか、ぶん投げてやりたいとか、何かをぶつけてやりたいとかは、思いませんか？」

「思います！ 辞めさせる前に一度、思いっきり張り倒してやりたいです。恥をかかせてやりたいです」

「辞めさせるのは出来ませんが、張り倒すのは協力できます。では、その張り倒し作戦で行きましょう」

「大丈夫なんですか？ 張り倒したりしたら、即、クビですけど」
「大丈夫です。私に任せてください。もちろん、中山さんの協力は必要です。いいですね？」

そう言つと斉藤は、張り倒し作戦を説明し始めた。一通り説明が終わつたが、中山は張り倒し作戦に半信半疑の顔をしている。

「それだけでいいんですか？ 本当に、上手くいくんですか？」

「騙されたと思って、私に任せてください。必ず上手くいきますから。でも、上手くいっても、このことは誰にも言つてはダメです。これだけは守ってください」

「はい。誰にも言いません。よろしくお願いします」

打ち合わせも終わり、来週の月曜日に作戦実行ということになった。

翌週の月曜日の午前中、斉藤は有給休暇を取った。中山恵理子と張り倒し作戦を実行するためだ。斉藤は中山に、ボールペン形のワイヤレスCCDカメラを付けさせた。これで、中山と五十嵐のやりとりが受信モニターで観察できる。斉藤はモニターを見ながら、作戦を実行する手はずだ。実はこの作戦こそが、斉藤がやりたかった実験なのだ。

中山は作戦通りに、CCDカメラ付ボールペンを付けて会社に入っていた。斉藤は怪しまれないように、駐車場の車の中で道路地図を見ている振りをしながら、受信モニターを見ている。朝礼が終わって早速、五十嵐の中山に対するイジメが始まった。

「中山さん、この伝票、今日中に終わらせてちょうだい」

「課長、お言葉ですが、この量だと私一人では無理です。誰かに半分手伝ってもらっていいですか？」

「皆、忙しいのよ。あなたの仕事を手伝ってる暇なんかないの。あなた派遣なんだから、つべこべ言わずにやりなさい。出来ないと言っただったら、辞めなさい。派遣のクセに何をえらそうに言ってるの！」

斉藤はいきなり爆発しそうになったが抑えた。中山の表情は見えないが、相当、頭にきているはずだ。

中山は、五十嵐の後ろに座っている所長の佐々木に直談判するこ

とにした。

「課長から、あの伝票の山を今日中に終わらせるように言われたんですが、正直なところ私一人では無理です。所長もそう思いませんか？」

中山の話聞いていた五十嵐が、佐々木を睨みつけた。佐々木は普段から五十嵐の意のままに、どちらが所長か分からないほどだ。

「中山さん、課長の指示に私ごとやかく言うことじゃないから、言われたとおりにやってください」

「中山さん、今日中に終わらせるのよ。分かったわね！」

五十嵐は念を押すように、嫌がらせの言葉を口にした。その言葉で斉藤の怒りは爆発した。中山はすでに爆発していた。

五十嵐の机の上に置いてあったファイルが、五十嵐にビンタを食らわせるような形で、横から襲いかかった。バシ！ ファイルのビンタが五十嵐の左頬に炸裂した。五十嵐はその弾みでイスから転げ落ちた。

佐々木が五十嵐に駆け寄り、抱え起こそうとして仰向けにひっくり返った。その佐々木の上に覆いかぶさるような形で五十嵐が乗り、両腕で自分の身体を支え、その体勢で五十嵐が腰を上下し始めた。もし、二人とも裸だったら、セックスをしていると思われるも弁解は出来ない。

五十嵐は自分の意思とは関係無しに腰が上下するのを必死で止めようとしていたが、周りで見ている社員たちには、その顔がよがっているようにしか見えない。その光景を携帯電話で撮影している者もいた。中山もこれはスクープとばかりに、携帯電話のカメラで撮りまくった。一分ほど腰を上下させていた五十嵐はさすがに疲れたらしく、あゝ、と声をあげて、佐々木の上に潰れてしまった。

「いつちやった」

不謹慎と思われるような言葉を、誰かが小さな声で呟いた。その言葉にクスクスと誰かが小さな声で笑った。

五十嵐は気を失っている。下になっている佐々木は五十嵐をどけ

ようとしているが、重くて動かない。それを見ている部下たちは、誰一人として起こしてあげようとしなない。

「誰か、五十嵐課長をどけてくれえ」

佐々木に言われて、二、三人が五十嵐の身体を起こし、イスに座らせた。五十嵐は意識を取り戻したが、何が何だか訳が分からなかった。

「課長どうしたんですか？ 急に倒れたと思ったたら、所長の上に乗って、激しく腰を動かしていましたよ」

中山はそう言うと、五十嵐の痴態が写った卑猥な写真を見せた。

五十嵐は気分が悪くなったということで、そのまま早退していった。

「実験大成功！ 俺の仮説どおりだ。あとは中山さんの結果報告だけだ」

斉藤が呟いたところへ、中山がやってきた。

「スカッ！ としました。ありがとうございます。思っていたことが全部実行できて良かったです」

「ひとつ聞きたいんだけど、ファイルで張り倒したのと、所長の上に乗せて腰を上下させたのも、中山さんが考えていたことなの？」

「はいそうです。なんだか自分が魔法使いになったみたいでした。

だって、考えていたことが目の前で現実になったんですから！ 斉藤さん、どうやったんですか？」

「それは聞かない約束だし、誰にも言わない約束です。いいですね？」

「分かりました。この件はなかったことにして、忘れてしまいますから大丈夫です。ではこれで失礼します」

中山はペコリと頭を下げると、会社へ向かって小走りに去って行った。斉藤は、これで中山も気分が晴れただろうと思った。

一週間休んでいた五十嵐は、そのまま退職したと中山から連絡が

あった。中山の一件で自分の仮説が証明された斉藤は、やっと超能力の使い方が分かってきた気がしていたが、まだ確認したい仮説が残っている。斉藤は自分のブログに、「ニャンコさんを苦しめていた悪代官を成敗しました」と書き込んだ。

翌日、斉藤は北沢に会うためにA社の購買課の部屋を訪れた。アポの時間は十時だ。五分前に着いた斉藤は、いつものように打ち合わせのテーブルで北沢を待った。北沢に挨拶をしても返事が返ってこない。毎度のことだ。斉藤が来たのは分かっているのに、パソコンを睨みつけキーボードを叩いている。あんな事件があったというのに、北沢の態度はまったく変わっていない。

「誕生日占いの本はどうでしたか？ 結構、当たってるでしょう？」
「びっくりしました。ほとんど当たってました。あれに書いてあることを参考にします。もう少し借りといてもいいですか？」

「構いませんよ。それより、あの事件後、北沢さんは何か変わりましたか？」

「全然です。相変わらず横柄な態度だし、今日だって斉藤さんに挨拶しなかったでしょう。約束の時間もだいぶ過ぎてるんでしょう？」

あのクソオヤジ、腹が立ってしょうがないです。もう一度、痛い目に合えばいいんだわ」

「森岡さん今から痛い目にあわせましょう。私の言うとおりにしてください」

斉藤はそう言うと、森岡に指示をした。

「まず、あの人をどうしたいかを考えてください。本でひっぱたくとか、投げ飛ばすとか、空中に持ち上げて落とすとか。それだけでいいです。じゃあ、早速やりましょう。席へ戻ってやりたいことをイメージしてください。精神を集中しながら」

森岡は席へ戻り、言われたとおりに精神を集中させ、やりたいことをイメージした。

斉藤は北沢の横顔を見ているうちに日ごろのウツプンが顔を出し、

怒りが爆発した。異次元のコップの水はすぐに一杯になり溢れ出した。その瞬間、北沢のイスが蹴飛ばされたように後ろへ吹っ飛んだ。北沢はイスに座った状態で書棚に背中からぶつかつた。その衝撃で書棚のガラスが割れた。北沢の怯えた顔をめがけ、キーボードが飛んできた。両腕で顔を覆つた北沢の腕に、キーボードが当たつて落ちた。

部屋にいた人間が集まつてきて社内は騒然となつた。北沢の隣の席の部下が一部始終を見ていて、皆に説明を始めた。部下の話聞いていた皆は、そんなバカな、と口々に言つてたが、その中の一人が叫んだ。

「皆、あれを見て！」

そう言われて皆が見た先には北沢のパソコンがあり、その画面に、『北沢に天罰を与えた』と、文字が浮かんでいた。

齊藤は森岡を呼んで、周りに聞こえないように小さな声で訊ねた。「あなたが思ったとおりのことが起きたんじゃないですか？」

「そうです。ビックリしたけど、すうつとしました。これでクソオヤジも変わるかもしれませんね」

「このことは、あなたと私の秘密です。誰にも言つたらダメですよ」「もちろんです。こんなことを言つたら大問題になるかもしれないし、たぶん、言つたところで誰も信じてくれないと思います」

「じゃあ、私はこれで帰ります。本はいつでもいいですよ」

齊藤は、自分の仮説が正しかったことに満足していた。今まで起きたいろいろな事件が、百パーセント解明できたという自信があつた。

上期が終わり、名古屋営業所の業績が発表された。予算に対して九十九パーセントの達成率で、ほぼ予算どおりの結果となった。その中でも黒木は百五十パーセントの業績をあげ、予算未達の営業マンをカバーした結果になっている。小泉所長と前田課長は、そんな黒木に絶大な信頼を置いていた。

それから二週間後、大きな問題が持ち上がった。黒木が先期の下期から架空売り上げをしていたという事実が判明したのだ。その額は五千万円にも達していた。小泉所長と前田課長と黒木は、本社に呼ばれて事情聴取を受けた。架空売り上げ自体がダメなのだが、その理由は、所長と課長からの有無を言わさぬ責任追及に耐えかねてということだった。

結果的に黒木は今までの頑張りを考慮してもらい、懲戒免職だけは許してもらったが、自己都合による退職となった。監督不行き届きと部下に対する指導不足で小泉所長は左遷され、前田課長はヒラの営業マンへ降格となった。

小泉所長の後任として、本社から佐々木が所長として転勤してきた。斉藤は課長に昇進した。前田はその日から、斉藤の部下となった。

「俺が忠告したのに」

斉藤はそう思ったが、名古屋営業所と営業マンたちのことを考えれば、結果的にこれで良かったのだと思った。

斉藤のブログへの書き込みは、日を増すごとに増えていた。その内容を見てみると、部下の悲痛な叫びが聞こえてくるものから、ただ単に、部下自信に問題があるものなどいろいろいるだ。超能力を手に入れた今、斉藤は可能な限り、現代の水戸黄門で居ようと思ったが、

いくら悪代官でも命を奪ったり、後遺症が残るほどのダメージを与えることはできない。

斉藤の超能力は、依頼者が念じるイメージに左右されている。だから依頼者に殺意が有った場合、その結果を考えると今までのやり方を慎重に考えなおす必要があった。

斉藤は藤村を誘って、いつもの居酒屋に来ていた。今日は水曜日で、まだ午後六時なので店内は空いている。端のテーブル席に座った二人は、生ビールで乾杯をした。

「実はお前に折り入って相談があるんだ。単刀直入に言うけど、相談というのは超能力のことだ。実は今までいろいろと実験してたんだが、整理できたんで全てを話すよ。それから力になって欲しいんだ」

斉藤は自分の超能力について話し始めた。それから、超能力を使って人助けをするためにブログを開設したこと。実際にブログで依頼された中山と小川の上司に、超能力を使ったことなどを話した。

「凄いですね！ 驚きですよ。まさにSFから抜け出たヒーローが目の前にいるんですね」

藤村は興奮していたが、斉藤はこの先のことを考えると心配だった。

「俺が実際に超能力を使うんじゃないじゃなくて、超能力のパワーを依頼者に与えるという言い方が正しいんだ。だから俺がボールペンを動かしたりクルマをひっくり返したりは出来ないんだ。言うなれば、ガス欠のスポーツカーがあって、俺はそのガソリンみたいなもんだ。俺自身がスポーツカーじゃないんだ」

「ということは、斉藤さんは、依頼者のやろうとすることを制御できないということですね？ これは考えてみれば非常に危険なことですよ」

「だからどういふうに依頼者に協力したらいいかを相談したいん

だ

しばらく藤村が考えている間、斉藤はツマミを食べながら焼酎のお湯割を飲んでいた。藤村も焼酎を口に運びながら、一点を見つめながら考えていた。

「斉藤さん、こんな案はどうですか？　まず、斉藤さんは依頼者とは顔を合わせない。斉藤さんの存在は知られないほうがいいと思います。依頼者とは僕が会いますから、斉藤さんは僕が持ったCCDカメラの映像をモニターで確認する」

「それはいい案だな」

「あとはもうひとつ実験が必要です。斉藤さんが依頼者に危険性を感じてパワーを送るのを止めたとして、どのぐらいの時間を置いて依頼者の超能力が効かなくなるかの実験です」

「それはここでも出来るよ。早速やってみよう」

実験は斉藤が藤村にパワーを送り、テーブルの上の割り箸を持ち上げてもらうことだ。二人はすぐに実験に取り掛かった。藤村は割り箸が持ち上がるころをイメージした。斉藤は、小泉と前田に責められているところを思い出し、怒りが爆発した。

その瞬間、割り箸が持ち上がった。斉藤はすぐに怒りを静め、パワーを送るのを止めた。それから五秒ぐらいして割り箸が落下した。自分のイメージしたことが起こり、藤村はさらに興奮している。

「すごい！　斉藤さんのパワーはすごいですね！　割り箸を持ち上げるところをイメージしていて、斉藤さんのパワーが送られてきたのを感じましたよ。上手く言えませんが、身体の中でF1のエンジンが始動したみたい、何とも言えない凄いパワーが満ちてくるのを感じました。その瞬間、割り箸が浮きました。以前、小泉所長と前田課長のときはカッカしてたので、全然気づかなかっただけです」

「そのあとはどうだった？」

「すぐにパワーが無くなるのを感じました。送るのを止めたんですよっ。」

「送るのを止めてから五秒ぐらいのタイムラグがあるな。これを縮めればいいんだけど、これは俺の問題だから、すぐにパワーを断つ練習をしてみるよ。」

「じゃあ今後は僕が水戸黄門の助さん格さんになりますよ。ひとり二役ですけど、これでいいですよね？」

「正直なところ、俺一人では手に負えないと思ってたんだ。助かるよ。」

藤村は正義の味方になったような気がしたのか、かなり興奮している。それに合わせて焼酎のピッチも早い。八時になったところで二人は店を出た。何だか気分が高揚した藤村は、怖いものは何も無いといった感じだ。

「藤村、変な気を起こしてヤクザなんか絡んだりするなよ。超能力はいつでも使えるってもんじゃないんだからな。俺も自由自在にパワーを送ることはできないんだぞ。」

釘を刺された藤村は我に帰り、浮かれていた自分を恥ずかしく思った。

名古屋営業所は所長と営業課長が代わって、雰囲気明るくなっていた。

新しく赴任してきた佐々木所長は、部下のモチベーションを引き出すのが巧みだ。そのせいもあって営業マンは皆、伸び伸びと仕事をしている。前田もその中の一人だ。皆のモチベーションが上がったので、それに引きずられるかのように業績も上がり始めた。前田は小泉とまったく違う佐々木のやり方こそ、真のマネージメントだと理解したが、すでに時遅しだった。

斉藤は、担当していた客先を前田に引き継いでから、しばらくどの客先へも足が遠のいていた。

A社の購買の北沢課長の様子が気になったので、久しぶりに北沢に会ってみることにした。十四時にアポを取っていた斉藤が五分前に到着して挨拶すると、北沢が挨拶を返してきた。そのまま打ち合わせのテーブルに着いた北沢の変わりように、斉藤は驚いた。

「斉藤さん、あの事件のあと自分を振返ってみたんです。パソコンの画面に天罰を与えたと出ていたでしょう。誰も私のパソコンに触れてないのにあの文字が出たのは、やはり何らかの不思議な力だと思っています。そう思い自分を振返ったら、情けないぐらいに横柄で生意気な自分に気がついたんです。斉藤さんを含め業者の方々に大変嫌な思いをさせ、ご迷惑をかけていたと分かったんです。今の私は以前の北沢ではありません。これからもよろしくお願いします」

深々と頭を下げた北沢は、表情まで明るく、好感の持てる男に変わっていた。斉藤は辞めさせるだけが解決策ではないと思った。十五分ほど雑談をした斉藤は、森岡とも五分ほど話した。森岡は、今では北沢を好感の持てる上司と思っている。帰り際、森岡が小さな声で言った。

「斉藤さんのおかげです。ありがとうございました。困っている人たちを、あの不思議な力で助けてあげてくださいね」

「了解！」

斉藤はピースサインをして、その場を後にした。

『くたばればカカ上司！』のブログへの書き込みは多い。読者がアドバースを書き込んだりして、斉藤が手を出さなくても解決するものもあった。それが理想だと思ったが、中にはどうしても第三者が介入せざるを得ない書き込みも少なくない。

斉藤は藤村に対応を任せ、自分は裏方に徹することにした。上司をクビにするのではなく、極力考え方を改めてもらえるような作戦を実行することにした。それでもダメなカカ上司には、辞めざるを得ないような行動をとる。斉藤は湯船に浸かりながら、今までのことを振り返ってみた。数こそ少ないが、自分では困っている人を可能な限り救ってきたつもりだ。

そこで思ったのが、超能力を使えばいとも簡単に解決できる問題が多いということだ。簡単に解決できる問題とは言っても、その問題自体は奥が深く、解決することによって多くの人にメリットを与えるものだ。言い換えるなら、超能力がなければ解決できない問題は数多く存在しており、それがあつたために多くの人が苦しんでいるのだ。

超能力を身に付け自分の進むべき道を模索していた斉藤は、今までの経験から、自分の目指すものが見えた実感していた。それは商社勤務のサラリーマンとしての顔と、超能力という印籠を駆使して難題を解決する、現代の水戸黄門の顔という二つの顔を持った生き方だった。ここに今、サラリーマン水戸黄門が誕生したのだった。

第4章 ささまざまな事件

ここのところ変わった出来事もなく、斉藤は超能力を使うこともなかったが、この三ヶ月ほどの間に、名古屋市内のある地域でひっきり事件が頻発していた。小さな事件なので特に気にも留めていなかったが、その手口は、ひっきり事件に共通のやりかただ。原付に乗った二人組が、歩行者や自転車に乗っている人のバッグやカバンなどを、追い抜きざまにひったくるというものだ。

犯人は神出鬼没なので、警察も手を焼いていた。犯人の特徴は、若い男の二人組みということしか分かっていない。被害者の多くは年寄りだ。その中には、年金で生活している一人暮らしの年寄りも何人が含まれていた。事件は一週間に一度の割合で起きていた。たぶん犯人たちが、ひったくったお金が無くなったときに、次の犯行に及んでいるような感じた。

斉藤のブログにも、この事件に関する読者からの書き込みが何件かあった。その中には、年金暮らしの年寄りの金をひったくって遊んでいる奴を絶対に許せない！ という怒りの書き込みも多かった。

ある日の書き込みに、やはりこの事件に関する読者からの書き込みがあつて、ハンドルネームは、年寄りの代理人、となっている。隣に住んでいる一人暮らしのお婆さん八十五歳が、バッグをひったくられ、そのバッグには貯金通帳と印鑑が入っており、途方にくれている。黄門様、バカ上司ではありませんが、ひったくりの犯人を捕まえて成敗してください。と書き込みがしてあつた。

斉藤も何とかしたいという気持ちはやまやまだが、正直なところ、この事件は斉藤には荷が重い。なぜなら、超能力を持った斉藤と言えども、相手が目の前に居ないことには超能力の使いようがないからだ。相手の姿が、テレビカメラでも何でもいいので見えるのであれば、超能力を使って捕まえることは可能かもしれないが、見えな

い相手には手の施しようがない。

「斉藤さん、ブログの書き込みにあるように、やっぱりこのひったくり事件のバカやるうどもは許せませんよ。僕らで何とか捕まえましょうよ！」

「俺もそう思ってるんだけど、いくら超能力があっても難しいぞ。いろいろ考えたんだけど、いい案がないんだ。おまえ、何かないか？」

「言うのは簡単ですけど、難しいですね」

二人は何も考え付かなくて途方にくれたが、それもそのはず、警察が追っかけているのに捕まえられないのだから、ちょっと考えただけで名案が浮かぶわけがなかった。

「この際、ブログ読者に名案がないかどうか聞いてみましょうか？二人で考えるよりはいいと思います。三人寄れば文殊の知恵といえますから」

「藤村、お前にしてはいい考えだ。今夜、早速ブログに書くことにするよ」

その日、帰宅した斉藤は、早速ブログに書き込んだ。

「最近頻発しているひったくり事件の犯人を、水戸黄門が成敗したと思います。相手が神出鬼没なのでどうすることも出来ません。相手と遭遇することさえ出来れば何とかなると思います。どなたか、相手を見つける名案があれば教えてください」

翌日、読者からの書き込みはあったが、どれも名案はないというものだ。

「地道なやりかただけど、ひったくり犯が出そうなところへ出かけてみるしかないな」

斉藤は独り言を呟きながら、過去の被害があった場所を、インターネットで調べてみることにした。名古屋市中区と東区で十件の被害

届が出ていた。その中の一件が、年寄りの代理人さんの知り合いのお婆さんだ。中区に限ったとしても、いつどこに出るかも分からないひったくり犯を当てもなく待つのは、サラリーマンの斉藤には不可能だ。仮に時間が有ったとしても、ひったくり犯と出会う可能性は、ゼロに近いぐらいの確率に思われる。それに東区を加えると、たとえ十人で巡回したとしても、犯人に遭遇するチャンスはゼロに近い。警察が手を焼くはずだ。

斉藤は年寄りの代理人さんの力になれないことが悔しかった。途方に暮れているお婆さんのことを思うと、残念でならない。超能力を身に付けた斉藤は、この能力さえあればほとんど何でも解決できると考えていたが、ひったくりという単純な事件に無力な自分を罵った。

「何が超能力だ。何が水戸黄門だ。お前には何も出来ないじゃないか！ 悔しかつたら、ひったくり犯人を捕まえてみる！ まさか俺には出来ないと言って、止めるんじゃないだろうな？ お婆さんを見捨てる気か？」

斉藤は自分の逃げ場を失くすために、自分を追い詰める言葉を呟いた。能力を超えた能力である超能力。その力を持っている自分が逃げることは許されないと決めていたからだ。

そんな矢先斉藤は、昨日の昼過ぎ、東区の路上でひったくり事件があつたというのを出勤前の朝のニュースで知つた。被害者は二十代の女性だ。その女性の話では、犯人は黒い原付に乗った二人組みの若い男で、グレーのジャージに野球帽をかぶっていたということだ。後姿しか見てないので、人相などはまったく不明だ。

出勤した斉藤と藤村は応接室へ入つた。ひったくり事件の犯人成敗について話し合うためだ。始業時間までにはまだ三十分ある。話し合いを始めたが、全く名案は浮かんでこない。

「斉藤さん、この事件は諦めましょうか？ 単純な事件ですけど、難しいですよ。いくら超能力があつても、相手が見えるところがないと、どうしようもないですから・・・」

「ダメだ。絶対に諦めないぞ。そう決めてるんだから必ず犯人を捕まえる」

そう言いながらも何も案が浮かばない斉藤は、最終的には警察に頼ろうとしている自分が居ることに、腹立たしかつた。

「予知能力でもあつたら、次に犯人が現れる場所が分かるのになあ」
何気なく藤村が漏らしたひと言に、斉藤が鋭く反応した。

「藤村良くやつた！ 犯人を成敗できるぞ！」

何のことか分からずキョトンとしている藤村に、犯人を捕まえる作戦の説明を始めた。

「名づけて、年寄りの代理人作戦だ。助さん、今から作戦を説明するから、しっかり頼むぞ」

「黄門様、大船に乗つたつもりで、この助さんに任しといてください」

年寄りの代理人作戦の説明が終わると、早速準備に取り掛かった。「助さん、お客さんへ行つた帰りに、今回のひつたくり事件の被害届のあつた警察署へ寄つて、作戦を実行してくれ。時間はかからなはずだから」

「かしこまりました。黄門様」
二人はニヤリと笑うと自分の席へ戻つた。

藤村はお客さんのところへ行つた帰りに、ひつたくりの被害届のあつた中区の池田交番へ立ち寄つた。被害者の女性の個人情報については教えてもらえなかつたが、捜査に協力したいので連絡を取つて欲しいというお願いをして、被害者からの返事を待つことにした。五分ほど待つていた藤村は、今日の夕方六時に、この交番に女性が来るということを告げられた。会社に戻つた藤村は、今日の仕事の結果を報告しながら、池田交番でのことも報告した。

「ありがとう。これで作戦は八割がた成功したようなもんだな」
斉藤は被害者の女性と接触できるかどうかが鍵だと思つていたが、拍子抜けするほどすんなり行つたので、成功を確信したのだった。

斉藤と藤村は、約束の十分前に池田交番に着くと女性を待つた。女性は五分遅れでやつてきた。交番の警官は他の市民の相手で忙しい、斉藤たちに女性を紹介すると仕事に戻つていった。

「今回の事件に関して教えて欲しいことと、お願いがあるんですが、コーヒーでも飲みながらでいいでしょうか？」

近くの喫茶店に入った三人は奥の席に座つた。斉藤と藤村はコーヒーを注文し、女性はレモンティーを注文した。女性の名前は小田香織。それ以上の情報は必要なかつたので聞かなかつた。斉藤たちも名前だけ名乗つた。勤め先や住所が知られると、あとあと活動に支障が出る可能性があるためだ。

知り合いの一人暮らしのお婆さんが、通帳と印鑑の入つたバッグ

をひつたくられ途方に暮れているので、何とか犯人を捕まえたいので協力して欲しいということを付け加えた。

「早速ですが小田さん、犯人の顔は見てないということですが、後姿とか乗っていた原付とかは、記憶に残っていますか？」

「はい。はつきりと覚えています。絶対に忘れるもんですか？」

小田は小鼻を膨らませながら、強い口調で答えた。当たり前のことだが、相当頭にきているみたいだ。

「では今から、私の言うとおりにして欲しいんです。これで犯人を捕まえられるかもしれませんので」

不思議そうな顔をしている小田に、斉藤は続けて言った。

「まず目を閉じて、犯人のことを出来るだけ詳しく頭に描いてください。次に、犯人が今度はどこに現れるのかを考えてください。それだけで結構です」

「あのおう、それだけで犯人を捕まえられるんですか？」

小田からは、当然と思われる質問が返ってきた。

「信じる信じないは別として、今私が言ったことをやってもらいたいです。紅茶を飲んでリラックスしてください。そして精神を集中してみてください」

言われたとおりに小田は紅茶を飲むと、目を閉じた。それと同時に斉藤は、犯人を思いながら怒りを高めていった。斉藤の怒りはすぐに頂点に達した。

「犯人の姿がはつきり見えます！ 次の犯行は明後日です。新栄の市営住宅の路上で夕方の四時ごろに、買い物帰りの主婦が被害にあいます」

斉藤は怒りを静めた。小田は目を開け、興奮気味に喋った。

「まるで映画を見ているように、目の前に犯人の姿が浮かんできました。間違いなく明後日、犯行がおきます。でも一体、なぜこんなリアルに次の犯行が見えたんですか？」

「たぶん、小田さんの犯人を捕まえたいという強い気持ちと、私の同じ気持ち重なって、犯人が見えたんでしょうね。ご協力していただきありがとうございます。犯人は必ず捕まえます」

小田は不思議そうな表情だったが、目的を果たした斉藤と藤村は、小田に礼を言々と料金を払って店を出た。店を出るときに振り返ってみると、小田はまた目を閉じていた。

「黄門様。やりましたね！ 作戦どおりでしたね」

「助さん、明日、作戦会議だ。明後日まで一日しかないからな」

黄門様と助さんは、胸が高鳴るのを楽しむかのように、自宅へと向かった。

翌日早めに出社した斉藤と藤村は、応接室で作戦を練っていた。

「黄門様。僕たちだけで捕まえるんですか？　警察へは連絡しておかなくてもいいんですか？」

「助さん、もし警察が近くに居たら、犯人は犯行を止めるかもしれないぞ。だから警察がいらないほうが都合いいよ。それに犯行が起きてからでないと捕まえられないから早とちりするなよ。現行犯というのが条件だからな」

「なるほど。分かりました。さすがは黄門様だ。抜かりがないですね」

二人は冗談を言いながら作戦を練っていった。すでに気分は、悪を成敗する水戸黄門と助さんになっていた。

「よし！　これで作戦は完璧。助さん、チャンスは一回だけだから、失敗は許されないぞ」

「黄門様、大丈夫です。任せといてください」

助さんはそう言う胸をポンと叩いて、ゲホゲホとむせる真似をした。相変わらずトボケタ奴だと斉藤は笑った。

犯行当日、斉藤と藤村は有給休暇を取った。午後二時に現場へ行くと、念入りに下調べを行った。このあたりには市営住宅が点在している。犯行現場は、飯田街道と呼ばれる国道百五十三号線の西側になる。犯人は、市営新栄荘四棟の前の路上でひったくり、新栄小学校の方へ逃走するつもりだ。市営住宅の隣は白山神社だ。

市営住宅の前の道路には、数台のクルマが路上駐車していた。斉藤たちは路上駐車車の列にクルマを止め、犯行時刻になるのを待った。人通りは少ない。時間は刻一刻と過ぎて行き、犯行時間の五分前になった。藤村は神経を集中させ、犯人を捕まえるところをイメージした。斉藤は小泉の顔を思い浮かべながら、徐々に怒りを高めて

いった。

犯行の一分前になった。クルマのバックミラーを見ていた斉藤は、右手にスーパリーの買い物袋を下げた主婦が映っているのを確認した。左手には手提げバッグを持っていて、道路の右側を歩いている。

「助さん、準備はいいか！ いよいよ犯行が起きるぞ！」

「黄門様大丈夫です！」

二人は神経を集中した。斉藤の怒りは、頂点に達しようとしていた。主婦が斉藤たちのクルマまで十メートルの距離に近づいたとき、二人の男が乗った原付が、主婦の後ろからゆっくりと近づいてきた。

原付が主婦を追い抜きざま、後ろに乗っていた男が主婦の手提げバッグを掴んで引つ張った。その弾みで主婦は転倒した。バッグをひたたくった男たちは逃げるために、一気にスピードを上げ始めた。そのスピードに追いつくかのような声で、主婦が叫んだ。

「ドロボウ〜！ だれか捕まえて〜 ドロボウ〜！」

犯行の一部始終を見ていた斉藤と藤村の怒りが、即座に頂点に達した。その瞬間、原付がバランスを失い左側に転倒した。二人の男はすぐに立ち上がると倒れた原付を起こし、逃走しようとして原付に跨った。ところが原付をスタートさせる前にバランスを崩し、また転倒してしまった。倒れた二人は立ち上がろうとしているが、何か目に見えない力で押さえられているようで、立ち上がることができない。

斉藤と藤村は倒れた二人に近づくと、準備していたロープで二人の手足を縛った。二人は転倒したときに手を擦りむいていたが、大きな怪我はしていない。二人を縛った斉藤は怒りを静めた。それと同時に二人は、自分たちを押さつけていた力が解放されるのを感じていた。

駆け寄ってきた主婦が斉藤と藤村に、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます。おかげで助かりました。ありがとうございます。ございました」

犯人の二人は縛られた状態で道路に座っている。見たところ、二十歳前後に見える。それから十分ぐらいしてパトカーが到着した。斉藤と藤村と主婦は、一通り事情聴取を受けた後、現場を離れた。クルマに戻った藤村が、興奮が覚めやらぬ口調で喋り始めた。

「黄門様、やりましたね！　こんなに上手くいくとは思いませんでした。今夜は興奮して眠れないかもしれません。警察が捕まえられなかった犯人を、僕たちが捕まえたんですよ。素晴らしい！」

興奮しながら喋る藤村の目は、満足感で輝いている。

「俺も今、もの凄く興奮しているぞ！　全身に鳥肌が立ってるよ。俺たちみたいなサラリーマンが、世のため人のために役に立ったと思うと、何て言ったらいいかわからないけど、とにかくやったぞ！」

斉藤はガッツポーズをしながら叫んだ。二人は充実感と満足感でいっぱいだった。とにかく何とも言いがたいほど、心が満たされていた。今まで生きてきて、これほどの満足感に満たされたことはなかった。

翌日の朝刊の三面記事に、昨日のひつたくり犯人逮捕の記事が載っていた。

犯人は十九歳と十七歳の無職の男で、余罪は三十件にも上るということだ。通りがかったサラリーマン二人の協力で逮捕できたと書いてあったが、名前は書いてなかった。斉藤が名前は伏せるように頼んでいたからだだった。警察からの感謝状も辞退していた。

入社すると早速、藤村が話しかけてきた。

「昨日の事件、今朝の朝刊に載ってましたね。何だか、もの凄くいい気分ですよ。ああ、早く次の事件を解決したいな」

「助さん、乗ってるな！ 仕事のほうも乗ってくれよ」

「両方とも任せといてください。大丈夫ですよ」

夜八時に帰宅した斉藤は、日課となっているブログの読者からの書き込みをチェックするために、パソコンを立ち上げた。今朝の朝刊に載っていた、ひつたくり犯逮捕の記事を見た年寄りの代理人さんが、書き込みをしていた。

「黄門様ありがとうございます。記事に載っていた通りがかったサラリーマン二人は、黄門様か助さん格さんだと思っています。隣のおばあちゃんに黄門様が犯人を捕まえたと話してあげたら、手を合わせて喜んでいました」

書き込みの内容を否定も肯定もしないで、斉藤はコメントを書いた。

「あなたとおばあちゃんの願いが、天に届いたのでしょう。でもひつたくりは今後も起きるものです。おばあちゃんに注意する点を、教えてあげてください」

コメントを書き終えた斉藤は、別の書き込みを読み始めた。相変わらず上司に不満を持っている人は多い。書き込みはほとんどが相談的な内容になっている。その書き込みに対して読者がアドバイスや意見を述べて、それで解決するものも多かった。斉藤としてはそれが理想だ。

そんな中、読者からのアドバイスだけでは解決できないような相談の書き込みが目についた。それは、レモンというハンドルネームの、三十代半ばの主婦からの相談だった。

レモンさんは、女性上司の苛めにより鬱病になり、通院しながら仕事をしているのだが、その上司は鬱病と知っていながら、陰湿な苛めを繰り返しているという内容だ。

「私は、ある保険会社で経理の仕事をしています。この会社に入ってから二年になります。苛めが始まったのは、今の上司が転勤してきた一年前からです。何の前触れもなく、いきなり苛めが始まりました。上司は四十代半ばの独身女性です。私がちよつとでもミスをする、大袈裟に騒ぎ立てしつこく責めます。いつも私のミスを待っているようで、ちよつとでもミスをすると、待ってましたとばかりに重箱の隅を突くように粗探しをしては責めるのです。

そればかりか、自分のミスはすべて私のせいになります。残業しないで早く帰れと言われ早く帰ると、他部署の人間に、レモンは仕事が残っているのに早く帰ると言いふらしていたそうです。休憩時間にお茶を飲んでいると、きつちり時間を計っていて、一分でも仕事を始めるのが遅れると怒られます。

とにかくブログに書ききれないぐらいの小さな苛めを、これでもかというぐらいに繰り返し受けています。こんな苛めを受けていたら、鬱病にならないほうがおかしいのではないでしょうか。一緒に働いている仲間も、どうして私だけ苛められるのか分からないと、不思議がっています。

黄門様、どうか助けてください。このままでは自殺にまで追い込まれそうです。この上司は酷すぎます。成敗してください」

ニヤンコこと中山英理子の件に似ていると思いつつ、レモンさんを助けるために水戸黄門になった斉藤は、今週の木曜日の午後六時に、名古屋地下街のBカフェで詳しく話を聞きたいとeメールを送った。

指定した時間に助さんこと藤村が、カフェでレモンさんと会っていた。レモンさんの写真をメールで送ってもらっていたので、迷うことなく会うことが出来た。斉藤は、自分と藤村の素性は知られなくなかったので、こちらの情報は一切与えないことにしている。写真はもちろんのこと、名前は水戸黄門と助さんで通すことにしている。

斉藤は別のテーブルで、受信モニターを見ていた。モニターには、藤村が胸に付けているボールペン型CCDカメラの映像が映っている。

レモンさんは、中嶋由美子と名乗った。人の良さそうな顔つきと同様に、話し方も穏やかで、人に対して意地悪をしそうな感じには見えない。話を聞いていた斉藤と藤村は、あまりの酷さに怒りが爆発しそうになっていた。

確かにレモンさんの言うように、これだけの苛めを受けたら鬱病になるだろうと思う反面、自分だったら一発ぶんなぐって辞めてるかもしれないと藤村は思った。

レモンさんは俗に言う、苛められやすいタイプに思えたが、人の弱みに付け込んだり、権力を楯に苛める奴は成敗しないといけないというのが、水戸黄門と助さんが心に決めている正義だ。

「中嶋さん、話は良く分かりました。あなたの上司の木村係長は成敗される運命にあります。ところで、どんなふうになら成敗したいですか?」

「どんなふうにと言いますと?」

藤村の言ってる意味が分からないというように、中嶋は藤村の質問をそのまま返した。

「成敗するのにルールがあります。それは、誰も手を出さずに成敗するということです。手を出したら負けですから。手を出さずに成

敗するということは、たとえば、机に置いてあるファイルが飛んできて頬つぺたを張り倒すとか、上司が歩いていてドブに落ちるとか、上司がいきなり誰かに喧嘩を吹っかけて問題になるとか、要するに、中嶋さんが手を出さずに、どういうふうに成敗したいかということ。です。言ってる意味は分かりますか？」

中嶋は藤村の言ったことに対して、誰もが持つであろう疑問を口にした。

「あおう、本当に成敗していただけるんですか？」

「中嶋さん、我々を信じる信じないは別として、あなたがどういふふうに成敗したいかを教えてください。それだけです。それとひとつ約束して欲しいんですが、成敗した結果は誰にも言わないでください」

「分かりました。成敗のやり方ですが、上司を辞めさせたいです。今は私が標的となってますが、必ず違う人がまた標的になります。あんな奴に人生を狂わされるのは我慢できないんです」

「中嶋さん、今から成敗の方法を説明します。私の指示どおりにやってもらえれば、あなたの望みどおりの結果になります」

藤村は成敗の方法を中嶋に説明した。それは、中嶋が上司を成敗しているところを強くイメージするだけという、至って簡単なことだ。

中嶋は正直なところ、藤村の言うことをまったく信じていなかった。信じられなかった。ブログには、水戸黄門が天に代わって悪代官ならぬバカ上司を成敗すると書いてある。それを信じて投稿し、わざわざ会いに来たのに、上司を成敗しているところをイメージするだけでいいと言われただけだ。人をバカにするのもいい加減にしてほしい。そんなことを中嶋は思っていた。

私は騙されやすく苛められやすい人間なのか。私の人生は一体何なのか。わずか一秒足らずの間に、そんな想いが中嶋の頭の中を駆

け巡った。そんな中嶋の想いは彼女の表情に表れていた。藤村は彼女の気持ちを察したかのように、言葉を切り出した。

「中嶋さん、私の言ったことに疑問を持たれているようですから、信じていただくためにある実験をします。見ていてください」

自分の心が見透かされたようで、中嶋は顔が熱くなった。

「テーブルの上に両手をつけてください。私が、あなたの手がテーブルにくっついて離れないところをイメージします。私が、どうぞと言ったら、テーブルから手を離してみてください。そして、その結果を見てください。これは手品でも何でもありません」

中嶋は言われたとおりにテーブルに両手をついた。そのとき、モニターを見ていた斉藤の怒りが頂点に達した。藤村は何かもの凄いパワーが、身体の奥から湧いてくるのを感じた。

「どうぞ」

藤村の声に、中嶋はテーブルから手を離そうとしたが、何か目に見えない力で押さえられているようで離れない。力いっぱい引き離そうとしたが、張り付いた手はビクともしない。

「今度は離れますよ」

藤村がさういうと、簡単に手が離れた。

「中嶋さん、私がつこく上司を成敗したい方法を聞いた理由が分かりましたか？ これで信じていただけますね？」

中嶋は声を出すことができずに頷いた。全身に鳥肌が立っていた。

「やるなら早いほうがいいですから、明日の午前中にやりましょう」
藤村は作戦の説明を始めた。作戦といっても簡単だ。藤村が持っているCCDカメラ付のボールペンを胸に差しておいて、上司の苛めが始まったら、成敗しているところを強くイメージする。イメージできたなら、CCDカメラの前で、準備OKの意味でピースサインをする。それだけのことだ。

翌日、出社した中嶋の胸ポケットには、CCDカメラ付ボールペンが差してあった。斉藤と藤村は、少し離れたところに車を止め、受信モニターのスイッチを入れた。モニターに社内の様子が映し出された。感度良好だ。

仕事が始まって三十分ほど経った頃、上司の木村が近寄ってきた。木村は、痩せていてメガネをかけている。メガネのせいもあるのか、きずきすぎた感じに見え、いかにも人に意地悪しそうな表情をしている。

「中嶋さん、この伝票の金額だけど、私が仕入れた備品の分が抜けてるわよ。何やってるの！」

「係長からまわってきた伝票には、その分は何も書いてなかったの
で、ここに書いているので全部だと思っていました」

「私が仕入れたことは知ってたでしょう？ それぐらい気を利かせてやらないでどうするの！ あなたどこまで抜けてるの。バカじゃないの！」

木村の言ってることは、責任のなすりつけ以外の何物でもない。ヤクザが言いがかりをつけるのと同じだと藤村は思った。

「それに、昨日までに処理するように言ってた伝票が、まだ半分しかできてないじゃないの。何やってるの！」

「あの量だと残業しても三日はかかります。それを一日でやれと言われても無理です」

「真面目にやればできるはずよ。出来てないというのはサボってるからよ。今日は終わるまでやりなさい。昼休みも弁当を食べながらできるでしょう。やってないあなたが悪いんだから、それぐらいや

って当たり前よ」

斉藤と藤村の怒りは急激に上がっていったが、中嶋からはまだ合図がない。

十時になり中嶋は休憩を始めた。休憩用のテーブルへ行き、自分で買ってきて会社に置いてあるインスタントコーヒーを飲みながら、新聞のチラシを見ている。他の社員もコーヒーや紅茶などを飲みながら、雑談をしている。そこへ木村がやってきた。

「中嶋さん、スーパーのチラシ見るより、新聞の記事に目を通したらどうなの？ そんなことだからあなたには、常識やモラルが欠けてるのよ。どうせ家でも、くだらない番組しか見てないんでしょ。たまにはニュースでも見たら」

「藤村、俺はもう爆発しそうだ！ 中嶋さんには悪いけど、あのクソ女をふっ飛ばしてくれ！」

斉藤が右のこぶしを強く握り締めながら、はき捨てるように言った。

「斉藤さん、僕もそうしたいですけど、中嶋さんのやりかたでやらないと意味がないですよ。落ち着いて、落ち着いて」

藤村が斉藤に話しかけているときに、モニターには次の苛めの映像が映っている。木村のしつこい嫌がらせの攻撃に、たまらず席を立った中嶋は、休憩もそこそこに自分の席へと戻った。

それを見た木村がコーヒーカップを持って、中嶋の席へと寄ってきた。

「中嶋さん、私がアドバイスしてあげてるのに、あなたのその態度は何なの？ 何か文句があるの？ 私が親切にアドバイスしてあげてるのに、あなたのその態度は何なの！ 言いたいことがあるのなら

はつきり言いなさい。あなたを見ていると本当にむかついてくるわ」

周りの人間はまた木村の苛めかと思いながら、誰も木村に注意できなくて、聞こえない振りをしながら、チラチラと二人の様子を見ている。斉藤の怒りは、ティッシュペーパーが触れただけでも爆発するところまで高まっていたが、まだ中嶋からの合図が来ない。

中嶋は、木村を成敗しているところを強くイメージし始めた。強く強くイメージしたところで、CCDカメラの前でピースサインを出した。待つてましたとばかりに、斉藤の怒りが一気に爆発した。その瞬間、超能力のパワーが一気に中嶋に注ぎ込まれた。木村は右手に持っていたコーヒーを、いきなり自分の顔にかけた。

「アツチツチ！」

コーヒーカップを落とした木村は、顔にかかったコーヒーを右手で拭り払った。今の騒ぎで、社内の全員の視線が木村に注がれた。木村は顔にかかったコーヒーをハンカチで拭きながら所長のところに歩いていくと、所長の頭を思いつきり引っぱりたい。次に木村の取った行動は、奇怪というか理解できない破廉恥なものだった。

いきなり服を脱ぎ始めブラジャーも外し、上半身裸になった。そのまま所長の顔に乳房を押しつけたのだ。痩せている割には木村の乳房は大きい。突然頭を叩かれた後、乳房を押し付けられた所長は混乱していた。周りで見ている社員たちも、木村の奇怪な行動に我が目を疑った。その目には驚きとともに、なぜ？ どうなってるの？ という疑問も浮かんでいた。

所長に乳房を押し付けている木村は、自分の意思でそうしているとは思えない表情をしている。それもそのはず、木村は中嶋のイメージどおりに動いているので、自分でそれをやめようとしても出来ないのだ。

「やめて〜」

木村が叫んだ。それと同時に中嶋はイメージするのをやめた。木村は所長から離れると、すぐさま脱いだ服をかき集めそれで胸を隠し、更衣室へと駆けていった。

社内は騒然となっている。あちこちで囁いている声が聞こえる。

「今まで独身だから欲求不満じゃないの？」

「所長と何かあるんじゃないの？」

「変な病気じゃないの？」

更衣室から出てきた木村は、何も言わずにそのまま会社から出て行ってしまったが、彼女を追いかけるものは誰もいなかった。

中嶋は、全身の毛が逆立つような興奮を覚えていた。なぜなら、自分がイメージしたとおりのことが、木村の身に起きたからだ。

「助さんの言ったとおりにして良かった。これで終わったわ」

誰にも聞こえないような小さな声で呟いた中嶋は、これでやっと苦痛の日々から開放されると思った。心が軽くなったような気がした。鬱病も治ったと思った。中嶋の思いとは反対に、所長は不機嫌な顔をしていた。誰かが囁いた声が耳に入ったみたいだ。

「木村係長はどうなってるんだ！ 言つとくが、俺と木村係長とは何の関係もないんだからな。変に勘ぐるようなことはしないでくれ。あんな誤解を招くようなことをされて、迷惑してるんだからな！」

中嶋は木村を追いかけけるような振りをして会社を出ると、藤村の車へと向かった。

「中嶋さん、思いどおりにいきましたか？ こちらは水戸黄門様です」

藤村の言葉に軽く頭を下げた中嶋は、満足した表情をしていた。

「黄門様、助さん、本当にありがとうございます。これで私の苦痛の日々は終わると思います。ありがとうございます」

「中嶋さん、バカ上司を成敗しましたが、このことは誰にも言うてはダメですよ。いいですね！」

「もちろんです！」

今朝は久しぶりに快適な目覚めだった。昨夜はゆっくりとぐっすり、とにかく気分良く眠ることが出来た。こんなに気分良く眠れ

たのは何日ぶりだろう。そう思いながら中嶋は、昨日の金曜日、木村係長を成敗した光景を思い出しながら、その不思議な出来事を噛み締めていた。

月曜日の朝、いつもどおり出社した中嶋は、電話が鳴っているのが普段どおりに受話器を取った。相手は名乗らなかったが、あきらかに木村係長の声だ。始業時間の二十分前だ。

「所長、お電話です」

「誰から？」

「所長の知り合いだと仰ってますが・・・」

木村係長だと分かっていたが、あえて所長には言わずに電話を取り次いだ中嶋は、所長の話し声に聞き耳を立てていた。

「うん、うん、そうか。退職するのか・・・。分かった。残念だが致し方ないな。そうか・・・、なるほど・・・、君の意思じゃないかもしれんが・・・。そうか、分かった。ご苦労さん」

その日の仕事も終わり帰宅した中嶋は、すぐにパソコンを立ち上げ、斉藤のブログを開いた。一刻も早く今日の結果を、黄門様に報告したかったからだ。黄門様と助さんから、絶対に誰にも言わないようにと口止めされていたので、簡単にそれとなくお礼の書き込みを行った。

「レモンです。今日、私を苛めていた上司がいきなり退職しました。黄門様のおかげだと信じています。ありがとうございます」

斉藤は自宅で焼酎のお湯割を片手に、パソコンに向かっていた。レモンさんからのお礼の書き込みを確認し、ひと言呟いた。

「これにて一件落着！」

今夜は、焼酎のお湯割がいつになく美味しく感じる。心地良い酔いを感じながら、いつものように読者からの書き込みを順番に読んでいった。その中に、斉藤のブログの趣旨に合わない投稿があった。

「主人は癌です」と書いてある。癌の相談は畑違いだと思いつつも、折角の書き込みなので読んでみることにした。

「主人は三十六歳です。一年前に胃癌が見つかり、胃を全部摘出しました。それで治ったと思っていたのですが、癌は転移しており、あと半年の命と宣告されました。主人もそのことを知っています。小学生の子供が二人いるのですが、子供たちに申し訳ないと毎日泣いています。本当に神様がいるのなら助けて欲しい・・・」

斉藤には、この奥さんは何のために自分のブログに書き込みをしたのか、分からなかった。俺は神様ではないし、神様の遣いでもない。そんな俺に何を期待してるのだろうか。力になれるものならなつてあげたいが、いくら超能力が使えると言っても、元気付ける言葉をかけるくらいしか思いつかない。一辺に酔いが醒めた斉藤はこの書き込みを読まなければ良かったと後悔しながら、パソコンを閉じた。

翌日、始業前に机で新聞を読んでいると、藤村がいつものごとく声をかけてきた。

「レモンさん良かったですね。これで彼女の鬱病も治るんじゃない

ですか？」

「俺もそう思うよ」

「どうしたんですか？ 何だか元気がないように見えるんですけど。」

いつもなら成敗したあとは元気はつらつらの斉藤だが、今朝は元気がない。藤村には、斉藤が落ち込んでいるように見える。

「黄門様、もしかしたら悩みでもあるんですか？ 黄門様の悩みは誰も直せませんが、助さんが相談に乗りますよ。バックに格さんも控えてますから」

冗談まじりで笑いを誘うつもりだったが、斉藤は乗ってこない。始業のチャイムが鳴り自分の席に戻った藤村は、帰りに斉藤を誘ってみることにした。

藤村は気になり一日中斉藤の様子を見ていたが、まったく元気がない。

「やっぱり飲みに行くのかなさそうだな」

そう独り言を呟いた藤村は、終業のチャイムが鳴ると同時に声をかけた。

「斉藤さん、軽く行きませんか？」

「そうだな。気分転換にちょっとだけ行くとするか」

二人が飲みに行くのはリーズナブルな価格の居酒屋だ。最近はこの居酒屋チェーンも低価格なので、小遣いの少ないサラリーマンには大助かりだ。取りあえず生大と枝豆という、いつものパターンでスタートした。

「何かあったんですか？」

いきなり藤村は思っていることを口にした。

「実はお前も読んだかもしれないけど、ブログに書いてあったことが気になってるんだ」

藤村は、昨日のブログの書き込みを思い出しながら、尋ねた。

「もしかしたら、癌の書き込みのことですか？」

「そうなんだ。畑違いの書き込みだと思ったんだが、なんだか助けを求められているようで無視できなくてな。だからといって、俺が癌を治せるわけがないし、どうしたものかと考えてたんだ」

「そうだったんですか。僕もちょっと気になって読みましたよ。確かにバカ上司は成敗できるけど、癌は成敗できないですからね。やれるとしても、元気付ける言葉をかけるぐらいです。しかし、余命半年の人を元気付けることなんて出来ないですよ。正直なところ」「どうしたらいいと思う？」

「どうするもこうするも、ほっとくしかないんじゃないですか。仕方ないですよ。出来ないものは出来ないんだから」

藤村の言うことはもっともだが、癌のご主人の心情を察すると、不憫でならない。

「何とかならないかなあ。小学校の子供が二人いるんだぞ。働き手がいなくなったら生活が大変だよな」

「斉藤さん、そんなこと言ったら、日本には同じような境遇の人が何千人、何万人もいるんですよ。世界中だったらそれこそ、何千万人もかもしれません」

「それはそうだけど、俺のブログに頼って来たんだから、何千万分の一かもしれないけど、何とかできればいいんだけどな・・・」

「分かりました。そこまで言うのだったら、何とかしてみましよう」「えっ！ 何か方法があるのか？」

「ありますよ。ひとつだけ」

そう言つと藤村は、その方法を説明し始めた。

「やり方はバカ上司を成敗するのと同じです。斉藤さんの超能力を

使ってます。そのご主人と奥さんに、癌が治って健康になったところをイメージしてもらってます。そこへ斉藤さんが超能力パワーを送る。結果はどうなるか分かりませんが、やってみる価値はあるでしょう?」

「助さん、でかした！ それだ。やろうやろう。すぐにもやってみよう」

斉藤は小躍りして喜んだ。藤村はとぼけた奴だが、実に良く自分をフォローしてくれるし、問題解決のヒントを見つけてくれる頼もしい相棒だと、今更ながら思った。

「今日帰ったら、書き込んでくれた奥さんにメールを送るよ。またよろしく頼むよ。助さん」

「へいへい。任しといておくんなさいまし黄門様。あっしが居ないと何もできないんだから。では成功を祈願して乾杯といきますか。カンパ〜イ」

帰宅した斉藤は早速、奥さんへメールを送った。余命半年と言われているので、すぐにでも会う必要があった。

「私のブログへ書き込みありがとうございました。ご主人は闘病生活されているそうで、ご心情お察しします。私、水戸黄門が力になれるかどうか分かりませんが、一度お会いしたいと思います。明日の午後一時にお願いできますか？ 病院待合室で結構です。奥さんの写真をメールに添付してください」

翌朝、奥さんからメールが届いていた。メールには写真が添付されており、病院の名前と、病室の番号が書いてあった。

斉藤と藤村は約束の五分前に、待合室へ行った。奥さんの姿を確認した二人は、彼女の前まで行くと軽く会釈をして声をかけた。

「始めまして、水戸黄門と助さんです」

「奥村美智子と申します。主人は靖弘と言います。今日はわざわざ来ていただいて申し訳ございません」

「名前がなかったなので、なんとお呼びしていいか迷っていました。早速ですが奥さん、ご主人を助けるために、あることをやりますので奥さんも協力してください。いいですね？」

「はい！ 主人が助かるのでしたら何でもやります！」

美智子は、藁にもすがるという目で二人を見ながら答えた。斉藤は自分に言い聞かせるように、今からやることの説明を始めた。

「奥さん、今から私が言うことは、たぶん信じてもらえないかもしれませんが、信じる信じないは奥さんの判断に任せますが、騙されたと思って、ご主人と一緒に私に協力してください。ご主人が治るか

どうかは、私を信じるかどうかにかかっていると思ってください。
いいですね？」

美智子は真剣な眼差しで、斉藤の言うことを聞いている。たぶん、画期的な何かを期待しているのだろう。

「やってもらうことは、もの凄く簡単なことです。あなたとご主人とで、癌が治って幸せいっぱいのところを強く強く強く、イメージしてください。それだけで結構です」

案の定、美智子は期待外れだったかと言わんばかりの表情になり、小さな声で尋ねた。

「あのう、それだけで癌が治るんですか？」

「奥さん、私には特別な力があるんです。でも、ご主人の癌が治るかどうかは、あなたがたお二人に、健康になったところを強くイメージしてもらわないとダメなんです」

「すみません。お医者様が治せないのに、イメージするだけでいいと急に言われても信じられないんです」

美智子の言ってることは、もっともなことだと斉藤も藤村も思った。

「奥さん、診察券を右手の上に置いて、浮かべ浮かべと強く念じてみてください。その結果を見て、私が言ったことを判断してください」

美智子は言われたとおり、診察券に意識を集中してみた。斉藤の怒りは一分ほどで頂点に達した。その瞬間、美智子の手にあった診察券が、二十センチほど宙に浮いた。

「奥さん、これは手品ではないんです。世の中には常識で考えられない力も存在するんです。この力でご主人の癌が治るかどうかは分かりませんが、やってみたいんです。そのために、お二人の協力が必要なんです。分かっていただけでしたか？」

美智子はただ頷くだけで何も言葉に出せなかったが、涙が溢れて
いる目を見て、斉藤は全てを悟った。

病室へ入ると美智子が斉藤と藤村を紹介した。

「あなた、こちらは水戸黄門様と助さんよ。あなたの病気を治すために来てくださったの。気休めじゃなくて本当に治るのよ。お二人は、常識で考えられない不思議な力を持ってらっしゃるの」

美智子はなだめる様な口調で言いながら、今からやることを説明した。靖弘は美智子の言うことを一言も聞き逃すまいという表情で聞いている。その姿には弱弱しいながらも、生きることへの精一杯の意気込みが感じられる。

「では二人ともいいですか？ 神経を集中して、癌が治って健康になったところを強く強く強くイメージしてください。さあ、始めてください」

藤村の合図とともに二人は目を閉じて、言われたとおりに健康になったところを強くイメージした。それに合わせて斉藤の怒りが爆発した。美智子と靖弘は、身体の奥から何とも言えない物凄いパワーが湧いてくるのを実感していた。それとともに身体がポカポカと温かくなってきた。

自分が何かとんでもない超人になったような気分だ。力が全身にみなぎり、何でも出来そうな気分だ。癌にも勝てる気がする。

五分ほど経ったところで、斉藤が息切れしてしまった。全身、汗びっしょりになり、肩で息をしている。五分というのは、今まで斉藤が経験したことのない長い時間だ。斉藤は、百メートルを全力疾走したときの倍ぐらいの疲れを感じていた。

斉藤の息切れとともにパワーが落ちた美智子と靖弘は、確かな手

ごたえを感じていた。それは抗がん剤や放射線治療でも感じなかった、治るといふ確かな手応えだった。

「奥さん、どんな感じでしたか？」

藤村が尋ねた。

「身体の奥から凄い力が湧いてくる感じでした。身体の奥がポカポカとし始めて、言葉で言えないほど、とにかく幸せな感じでした」

「ご主人はどうでしたか？」

「こんなに爽快な気分は、癌になる前にも味わったことがありません。妻が言ったのと同じで、身体の奥から凄いパワーがみなぎってくるといった感じでした。癌に勝てそうな気がします」

藤村には、二人の目に希望の光があるのが見て取れた。二人の生への欲求が強ければ強いほど、この実験は成功するはずだと思った。息が整った斉藤が、二人に念を押すように言った。

「私に出来るのは今やったことですが、お分かりのように、五分が限度です。明日から毎日、仕事が終わってから来ますので、今の要領で一週間続けてみましょう。ただし、主治医にも誰にもこのことは言わないでください。それだけは絶対に守ってください。いいですわね！」

「分かりました」

二人は同時に返事をした。

翌日から毎日仕事帰りに立ち寄ることにした斉藤は、二人に超能力のパワーを送り続けた。二人は斉藤のパワーを信じていた。癌を治すのに必死だった。その気持ちが通じたのか、靖弘の顔色は日を増すごとに良くなっている。

「黄門様が来られてから、食欲が出てきたんです。今では病気になる前と同じです。何でも美味しく食べられるんです。とても信じられません」

靖弘の言葉に斉藤も心から満足していた。

今日が一週間の最後の日だ。斉藤はいつものように超能力のパワーを送った。二人は目を閉じ、癌が治って健康になったところをイメージした。いつもより強く、強く、強くイメージした。五分後、斉藤のパワーが切れた。

斉藤は肩で大きく息をしている。全身、汗びっしょりだ。靖弘に話しかけられたが手で制し、しばらくの間、息を整えていた。五分ほどして斉藤は、靖弘に話しかけた。

「今日で終わりですが、一度、精密検査を受けてみてください。私に出来ることはこれだけです。結果が出たらメールで連絡いただけませんか」

「ありがとうございます。黄門様のおかげで、日に日に体調が良くなっていくのが分かりました。結果はメールでお知らせします」
軽く頭を下げると、斉藤は病室を後にした。

それから一週間後、奥村靖弘からメールが入っていた。

「黄門様ありがとうございます。奇跡です！ 転移していた癌が消滅しました。医者もなぜ癌が消えたのか原因が分からず、首を捻るばかりです。このご恩は一生忘れません。私に出来ることがあれば何でも言ってください。恩返しをしたいと思います。本当に、ありがとうございます」

ブログには、靖弘の妻の美智子の書き込みがあった。

「黄門様。主人に奇跡が起きました。癌が治ったんです。なぜ治ったのか理由は分かりません。黄門様のブログに書き込んだのが天に

届いたのかなと思っています」

言ってみれば、斉藤にとっては今回のことも実験だった。実験は大成功だった。これで斉藤は、自分の超能力に限界がないことを知ったが、まだやりたい実験があった。その実験は、どれぐらいの重さのものを持ち上げることが出来るか。コンクリートのように硬いものを破壊することが出来るか。相手の考えを読み取ることが出来るかの三つだ。

第5章 完成した超能力

日曜日に斉藤は藤村を誘って海岸に来ていた。そこには消波のために無数のテトラポッドが置いてある。斉藤はテトラポッドを超能力で持ち上げられるかの実験をしようとしていた。

「助さん、準備はいいか？」

「今から神経を集中します。はい、と言ったらパワーを送ってください」

藤村は目を閉じて神経を集中した。しばらく目を閉じた後、カット目を開き、合図をした。斉藤は藤村の合図に合わせて、超能力のパワーを送った。藤村は、体の奥底にとてつもないパワーが湧き上がって来るのを感じ、テトラポッドが持ち上がるところをイメージした。その瞬間、四十トンほどもあるテトラポッドが浮き上がった。

「助さん、何個か同時に持ち上げてくれ」

斉藤の要求どおりに藤村はイメージした。テトラポッドが三個宙に浮いた。なんとという力だ！ 斉藤は超能力の圧倒的なパワーに驚いた。超能力の前には、ティッシュペーパーもテトラポッドも同じ重さみたいに思える。

「助さんOKだ。もういいぞ。次の実験だ」

斉藤は一旦パワーを送るのを止めた。続ければ続けるほど、体力を消耗するからだ。二人は三十分ほど雑談しながら休憩した。

「助さん、一個持ち上げるのと三個持ち上げるのとは、何か違ったか？」

「何も違いませんでした。たとえば手で持ち上げるときは、重いほうが力を使いますよね。超能力の場合は、重さは全然関係ないです。イメージするだけですから。だから極端に言えば、地球でも持ち上がるんじゃないですか」

「なるほど。これでまた超能力の性質がひとつ分かったな。次は、破壊の実験だ。テトラポッドの足をひとつ破壊してみよう」

「そんなことしたら怒られますよ。誰かに見られてたらどうするんですか」

「俺たちが壊すんじゃないくて、テトラポッドの足が勝手に壊れるんだから、大丈夫だ。さあ、やってみよう」

藤村は目を閉じて、テトラポッドの足が折れるところをイメージした。イメージできたところで目を開け合図をした。斉藤は藤村の合図を見て超能力のパワーを送った。さっきと同じように、身体の奥底からとつもない力がみなぎってくるのを藤村は感じた。その瞬間、まるで割り箸でも折るかのようになり、テトラポッドの足が簡単に折れた。

「助さん、OKだ」

斉藤はパワーを送るのを止めた。

「今度はどんな感じだった？」

「さっきと同じで力はいりません。簡単でしたよ。超能力の前ではイメージが全てですね。それだけです。いかに詳細にイメージするかだけです」

「なるほど。イメージが全てということか。よし！今思いついたことがあるから、実験してみよう」

斉藤は、飲み干したお茶のペットボトルを藤村に渡した。

「そのペットボトルが、この防波堤にめり込むところをイメージしてくれ」

藤村は言われたとおりにイメージした。斉藤がパワーを送ると、ペットボトルが防波堤のコンクリートにめり込んでいく。信じられない光景だ。

「助さん、超能力で何ができるか分かったよな。今更ながら、超能力は素晴らしいぞ！ イメージどおりになるから、不可能なものはないな」

斉藤は今更ながら、超能力の凄さに興奮していた。

「黄門様。凄いですね！ 超能力は。と言っても、黄門様のパワーがないと超能力は使えないし、パワーをもらったら誰でも超能力者になれるし、でも肝心の黄門様は超能力が使えないんですよ。何だか黄門様が一番損してますね」

「まあ、損得の問題じゃないよ。俺のこの力が何かの役に立つんだつたら、それこそが一番だよ」

俺は選ばれた人間なんだ。斉藤は超能力を身に付けたときから、いつもそう思っていた。だからこそ、いつも自分の生き方を模索していた。超能力を授かったということは、何か意味があるはずだ。その意味とは何だ？ 超能力で俺に何をしろと言ってるのか？ この二つの疑問が、常に付きまとっているのだ。

その答えが今はつきりと分かった気がした。なぜなら、超能力で出来ることが分かったからだ。その答えは、超能力を使う相手を選ぶべし！

テトラポッドを使った実験は大成功だった。斉藤はあらためて超能力の凄さと素晴らしさを実感した。今までの実験の結果、超能力はどれほどの力があるのか、どんな力があるのかがかなり分かってきたが、一番重要な問題がまだ残っている。その問題が解決しないことには、斉藤の考える超能力は、まだ不完全なのだ。

その問題とは、怒りが頂点に達したときに超能力のパワーを送ることが出来るのだが、なぜそのときだけパワーが出るのかだ。

脳波には 波や 波などがあるというのは聞いたことがあるが、その他にも、 波、 波、 波があり、それぞれ周波数が違うということは知らなかった。雑学の好きな藤村から教えてもらって、初めて知ったのだった。

脳のことについてはまったく興味のなかった斉藤だが、超能力の実験をしていくうちに、興味を持たざるを得なくなってしまった。怒りの気持ちで頂点に達したときに、特定の脳波が超能力を起こさせるのではないかと、根拠も何も無しに漠然と思った。

今の斉藤は、超能力の研究をするつもりはなく、超能力を自分の意思でコントロールしたいだけだ。それには根拠は必要ない。思いついたことをやるだけだ。実際のところ、今までも思いつきや閃きで作戦を立ててきた。思いつきで問題を解決してきた。思いつきも成功への大事な要素だと思っている。

人間の思考回路というのは面白いもので、必死で考えていると、閃きという形で解決のためのヒントを与えてくれる。斉藤はそう思っている。言い換えれば直感や閃きも超能力なのかもしれない。あとはその閃きに従うだけだ。

そんなことを考えているうちに、突然脳裏に座禅という言葉が浮か

んだ。

これだ！ 今の俺の問題を解決するのには座禅が必要なんだ。意味もなく座禅という言葉が浮かんだはずはない。それには理由があるはずだ。斉藤はそう直感した。

斉藤の姿が、あるお寺にあった。場所は京都。今日から一週間座禅の修行をして、残っている一番大事な問題を解決するつもりだ。問題解決には座禅しかないと思っている。

禅僧の話を聞きながら、自分を振り返ってみた。今の自分は心のコントロールが出来ていない。そのために自我に振り回されている。自我で心が濁っている。「無の心」になれない。無の心は水のようなもので、どんな状況にも順応できる。無の心になれば、怒りではなく自在に超能力パワーを送れるはずだ。

足の組み方、手の組み方、目線、呼吸の仕方などの基本的なことを教えてもらい、座禅の修行が始まった。静かな境内での座禅修行は、精神統一には理想的な場所と言える。一週間の座禅修行を終えた斉藤は、心の濁りが取れ、リフレッシュされた気分だ。なんとも言えない澄んだ感覚に思える。

一週間ぶりに出社した斉藤に、待ってましたとばかりに藤村が話しかけてきた。始業時間の三十分前だ。二人は応接室に入った。

「お疲れ様でした。どうでした座禅修行は？ 期待してたものは得られました？」

「ひと言で言ったら、心が洗われたという感じだな。心がリフレッシュできたよ。お前も一度行ってみたらいいぞ。濁った心が綺麗になるぞ」

「確かに僕の心は濁りきってますよ。自分でそう思うんだから間違いないです。それは置いといて、超能力のほうはどうですか？」

「それはまだ実験してないから分かん。今から実験するから手伝

「つてくれ」

斉藤がそう言ったのと同時に、藤村は身体の奥底からパワーが湧き出してくるのを感じた。超能力が使える状態だ。藤村は、テーブルの上に置いてある灰皿が浮かんでいるところをイメージした。灰皿はイメージどおりに宙に浮いた。実験は成功だ。

「斉藤さん、今までは斉藤さんの顔が怒りに満ちてからパワーが送られてきてたんですけど、今回はそんな表情でもなく、タイムラグもなく瞬時に届きましたよ」

小さくガツポーズをした斉藤は、確かな手ごたえを感じていた。これで、思ったときに自在に超能力パワーを出すことが出来る。一番重要な問題を解決できたことで、瞬時の出来事にも対応することが可能になったのだ。

「助さん、座禅修行のおかげで、いつでも瞬時にパワーを送ることが出来るようになったぞ。これで、一秒以内にやらないといけないようなことが起きたとしても、大丈夫だぞ」

「ついに理想の超能力の完成ですよね！」

「そうだ！」

斉藤と藤村は興奮していた。

「助さん、あとひとつ、瞬間移動の実験をしたいんだけど手伝ってくれ」

「はい、分かりました。それで、どうしたらいいですか？」

「今、対面に座ってるけど、俺の隣に座ってるところをイメージしてくれ」

斉藤が言い終わらないうちに、藤村にパワーが送られてきた。藤村は言われたとおりにイメージした。その瞬間、対面に座っていた藤村の姿が、斉藤の隣に現れた。まるで手品を見ているみたいだ。

「やった〜！」

二人は同時に叫んだ。

「どんな感じだ？ 身体は大丈夫か？」

「大丈夫です。身体はまったく何ともありません。移動した瞬間は、なんというか、ジェットコースターで急降下するときの感じでした」

「実験は成功したけど、瞬間移動の場合は気をつけないと大変なことになるぞ。というのは、たとえばアメリカに瞬間移動した場合、俺はお前がそこにいることが分からないし、パワーを送ることができない」

「要するに、斉藤さんに僕が見えないとパワーを送れないから、戻って来れないということですよな？」

「俺も一緒に移動できれば問題はないんだけどな。それだけは覚えといてくれよ。さて、そろそろ仕事の時間だな」

腕時計を見ると、始業時間の五分前になっている。斉藤と藤村は応接室を出ると、自分の机へと向かった。

藤村は超能力を使えることが、楽しくて楽しくて仕方がなかった。まるで子供が、欲しい欲しいと思っていたおもちゃを買ってもらったのと、同じような感じだ。仕事でも超能力のことが頭から離れず、そればかりを考えていた。超能力自体は斉藤からパワーをもらわないと使えないが、SF映画の世界のことだと思っていたことが実際に使える喜びは、とても言葉では言い表せないほどの喜びであり、感動的なものだ。

今日もあつという間に時間が過ぎ、昼休みを告げるチャイムが鳴った。斉藤と藤村は、近くの喫茶店へと入っていった。最近の喫茶店はほとんどどこでも、定食や日替わりランチというメニューがあるので便利だ。二人は日替わりランチを注文した。コーヒー付で八百円と手頃だ。

「藤村、あのウェイトレスが何を考えてるか、心を読んでみてくれ」
藤村は言われたとおりにやってみた。すでにパワーは送られている。二十代半ばと思えるウェイトレスは、四人組みのサラリーマンの注文を聞いていた。サラリーマンはメニューを見ながら、どれにしようか迷っている。

「早く決めるよオツサン。こっちは忙しいんだよ。たかが昼飯だろ。こんなことも即決できないんだったら、仕事も出来ないんじゃないのか！」

ウェイトレスの心を読みながら、藤村はニヤニヤしている。斉藤は続けて藤村に言った。

「彼女の考えが読めたら、口に出さないうで俺の頭に直接話しかけてくれ」

藤村はウェイトレスが考えていたことを斉藤に送った。斉藤は右手の親指を立てて、目の前に突き出した。

「完璧だ！ パーフェクト。どこから聞こえてくるのか分からないけど、頭の中に声ではない声が聞こえてきたぞ。凄くはつきり」と

「またまた実験大成功ですね。これも座禅修行の結果ですか！」

「お前もやってみろって。超能力に関係無しに、自分の心が洗われ
てリフレッシュできるぞ」

「了解しました。そのうちに」

藤村は何時間も座禅を組んでいるのは、とても自分には無理だと思っただ。

それにしても斉藤さんは凄い。よく一週間も頑張ったものだと感じました。

「斉藤さん、一週間のブログは見ましたか？ 斉藤さんが留守の間に、結構、書き込みがありましたよ」

「まだ読んでないんだ。一週間留守にすると書いておいたから、今夜、座禅の結果を書いておくよ。ところで何か目に付いた書き込みはあったか？」

日替わりランチを食べながら、藤村はブログの大まかな内容を斉藤に話した。ランチを食べ終わった二人は勘定を済ませると、実験が成功したことで、ウキウキ気分で会社へと戻っていった。

帰宅した斉藤は、一週間ご無沙汰していたブログを開いた。昨夜は座禅から帰って、座禅疲れか移動時間での疲れか、とにかく眠かったので、パソコンを立ち上げることもなくベッドに入ったのだ。

ブログにはまず、座禅修行の結果報告を書いた。ただし当たり障りのない、一般的な座禅のやり方と、その結果心がりフレッシュできたことだけを書いた。結果報告を書いたあと、読者からの書き込みに目を通していった。黄門様に成敗してほしい、助けてほしいという相談的なものも何件もあった。その中には、読者からのアドバイスで解決できているものもあった。

「はあ〜ん。藤村が言っていたのは、このことだな」

そう呟きながら、ある相談の書き込みを読んでいた。相談者は四十代後半の主婦だ。ハンドルネームは、平凡な主婦と書いてある。

「主人は半年前に自殺しました。一般的には誰でもそうかと思いますが、主人も、曲がったことや不正が嫌いな真面目な人でした。そんな主人が粉飾決算をしたという理由で会社をクビになり、その二日後に自殺しました。これは濡れ衣です。本当の首謀者は何も咎められず、ぬくぬくと生きているのかと思うと許せません。黄門様、本当の犯人に白状させてください。それだけで結構です。よろしくお願いします」

弱者が被害を被るのはもつてのほかだ。責任のなすりつけは絶対に許せない。ましてそれが人命に関わることならなお更だ。平凡な主婦さんの書き込みを読んでいた斉藤は、ハラワタが煮えくり返るほどの怒りを覚えた。絶対に成敗してやる！ 強く心に誓った斉藤は、平凡な主婦さんあてにメールを送った。

翌日の夕方五時に、助さんこと藤村は、平凡な主婦さんであるカフェで会っていた。胸ポケットにはCCDカメラ付のボールペンを差している。水戸黄門こと斉藤は、カフェの駐車場に車を停めて、受信モニターで平凡な主婦さんの様子を見ていた。彼女は北村純子と名乗った。

「ところで奥さん、ご主人は本当に不正はやってなかったんですか？」

藤村はCCDカメラの前で、右手の親指を何気ない仕草で立てた。パワーを送れという合図だ。一秒の遅れもなく瞬時にパワーが送られてきた。身体の奥から力が湧いてくるのが分かる。藤村は純子の考えを読んで、それを斉藤に送った。

「ご主人は真面目一徹の人だったみたいだな。間違いない。ご主人は濡れ衣を着せられて、自殺に追い込まれたんだ。奥さんの言うてることが正しい」

藤村は純子と作戦を練ることにした。

「奥さん、ご主人の濡れ衣を晴らすために、何か考えてることはありますか？」

「いいえ、まったく何もございません。どうしたらいいのかも分からなくて、黄門様のブログに書き込んだんです。警察は主人が犯人だと思っっていますから、これ以上調べようとはしないんです。だから正直なところ、何も考えはないんです」

申し訳なさそうに話す純子に、藤村は自信たっぷり自分の考えを伝えた。

「分かりました。そしたら、粉飾決算に関係している人間に、そのことを喋ってもらいましょう。そして、それを録音して警察に持っていくという作戦でいきましょう」

「あおう、失礼な言い方かもしれませんが、誰が関係しているかも分からないし、仮に分かったとしても、どうやって喋ってもらうんですか？」

純子の目は、あきらかに藤村を疑っている。それもそのはず、常識的に考えて、藤村が言っているのはバカげているとしか思えない。

「奥さん、あそこに座っているカップルの男性は何を考えてると思いますか？」

またしても藤村の予想外の質問に、むっとした純子はきつい口調で答えた。

「そんなこと分かるわけないでしょう！ そんなことを聞いて何になるんですか！ 私はあなたの馬鹿げた話を聞きに来たんじゃありません。これで失礼します！」

純子はコーヒー代を置くと、席を立ちかけた。藤村はそんな純子を制した。彼女が怒るのは最初から計算済みだ。

「奥さん、ご主人の名前と年齢を聞いてませんでした。それと息子さんの名前と年齢も。でも言う必要はありません。私には分かりませんから。二人の名前と年齢を心の中で思ってください」

藤村はCCDカメラの前に親指を立てた。またしても一秒も経たないでパワーが送られてきた。

「ご主人は五十二歳、真一さん。息子さんは二十六歳。真也さん。間違いないですよね？」

「どうして分かったんですか？ どこで調べてきたんですか？」

純子は動揺していた。助さんは信用できない。自分たちの個人情報をどこかで盗んできたのだ。このまま別れて警察に届けたほうがいいんじゃないか。そもそも助さんというふざけた自己紹介も怪しい。純子の頭の中を、様々な思いが駆け巡った。

そんな純子の動揺した様子を見ながら、にやりとした藤村は、純子が考えていることをそのまま純子に告げた。純子は愕然とした。なぜなら、自分が今考えていたことが、寸分違わない言葉で告げられたからだ。

「助さん、あなたは一体・・・」

「それ以上言わなくてもいいですよ。奥さんが考えてることは全部分かりますから」

純子は怖くなってきた。この男は一体何者なんだ。私をどうするつもりなんだ。何が目的なんだ。

「奥さん、怖がらなくてもいいです。何もしません。ご主人に濡れ衣を着せたやつを見つげるために来たんです。それが奥さんの望みなんですよね？」

藤村は続けた。

「奥さん、私の言うことを信じられないかもしれませんが、あのカップルの男性の頭の中を読んでみてください。そして、私のことを信じてもらえると思います。さあ、騙されたと思ってやってみてください」

藤村が喋り終わったのと同時に、斉藤は純子にパワーを送った。純子は自分の耳を疑った。藤村に言われたとおりをやってみたら、カップルの男性の声が鮮明に聞こえてきたのだ。

「今夜はフランス料理店で食事をして、ムードのあるスナックに連

れて行つたら、絶対に落ちるぞ。あとはホテルへ直行だ。今夜こそいただきだ。遊びで付き合ってるんだから、かかった費用はちゃんと身体で払ってもらわないとな」

「助さん、あの男、彼女の身体が目的です。あいつの考えることが手に取るように聞こえてきたんです。彼女に注意してきます」

純子は興奮していた。彼女も根っからの正義漢らしく、椅子から立ち上がると藤村の制止を振り切って、カップルの席へと向かった。

「まずいですよ斉藤さん、今から止めに行きますから、僕にパワーを送ってください」

藤村がカップルの席へ行つたときには、純子が女性にさっきのことを話した後だった。

「ひどい！ あなたってそんな人だったの！ もう二度と私の前に現れないで！」

女性は席を立つと、男の左頬に平手打ちを放った。目には涙が溢れている。彼女は何か言おうとしたが、もう声にはならず、足早に店から出て行つた。

「おばさん、お前な、なんの恨みがあつて根も葉もないことを言つたんだ！ 名誉毀損で訴えてやるから覚悟しとけよ！ 今から警察を呼ぶから逃げるな！」

「すみません。姉はちょっと疲れ気味でして、とんでもないことを言つたみたいです」

藤村はそういいながら純子のほつを振り向き、怒つたような口調で言つた。

「姉さん。ちょっと顔でも洗つて、頭を冷やしなよ」

藤村は純子の腕を引つ張ると、洗面所のほうへ連れて行つた。洗面所は店の奥にあり客からは死角となつている。藤村は死角に入つたところで、斉藤の車の中に瞬間移動した。

「黄門様、騒ぎが起きないうちに出発しましょう。あつ、料金はちゃんとテーブルの上に置いてきましたよ」

「助さん、またひと悶着起きたみたいだな。まあ今回は大目に見るとするか」

純子は申し訳なさそうにうつむいている。

「奥さん、初めまして。水戸黄門です。ご主人のために協力させていただきます。今の助さんの話で理解していただけたかどうか分かりませんが、我々には少し変わった力があるんです。この力は、善良な人たちを救うために神様からいただいたものなんです。言つての意味は分かつていただけますか？」

「はい。疑つて申し訳ございませんでした。よろしく願います」
純子は申し訳なさそうに頭を下げながら言つた。作戦実行の日は明日の午後三時に決めた。斉藤と藤村は、やると決めたら即実行することになっている。というよりも、短気な斉藤に藤村は従っているだけだ。

翌日の朝一番に、純子は部長の坂本に電話をすると、今日の夕方六時に会う約束を取り付けた。約束の五分前に会社に着いた純子は、受付に坂本とアポがあることを告げた。定時は午後五時だが、社内にはほとんどの社員が残っている。応接室へ案内された純子は坂本を待った。約束の時間より五分ほど遅れて応接室へ来た坂本は、歳のころは五十代半ばと思える。

純子の胸ポケットに差してあるCCDカメラ付ボールペンからの映像信号は、斉藤の受信モニターに鮮明に映っている。

純子は間をおかずに、いきなり核心に触れる質問を浴びせた。

「主人が不正をするとは信じられないんです。もう一度、社内で調査をしていただけませんか？」

「奥さん、残念ながら、ご主人が不正をやっていたというのは事実なんです。これ以上調べても何も出てきません。お気の毒ですが我々には何ともしようがないんです」

坂本は前もって準備していたかのような言葉を、なんの感情も入れずに淡々と口にした。

「坂本部長、本当にそう思われるんですたら、主人が本当の犯人だと頭に思ってみていただけませんか」

そう言う純子は、CCDカメラの前で親指を立てた。その瞬間、斉藤は超能力のパワーを純子に送った。

「奥さん。仰ってる意味が分からないんですが・・・」

坂本は本当に分らないのか、しらばっくれているのか分らない表情をして、純子に言葉を返した。純子は坂本の言葉には耳を貸さず、

坂本の考えを探った。

「このクソ尼、しつこい野郎だ。お前のバカ亭主は俺たちの身代わりになつたんだよ。お前のバカ亭主が出すぎた真似をしたからこうなつたんだ。あんたの言うとおり俺は犯人だが、他にもいるんだよ」

坂本の鮮明な声が純子の頭に響いてきた。坂本の表情を見ていると、この男が言っていると思えないような内容だ。人間はどこまで化けの皮を被れば気が済むのだろうと純子は思った。いろいろなことを思いながら、純子は涙を流していた。それを見ていた坂本が声をかけた。

「奥さん、大丈夫ですか？ どうされたんですか？」

「坂本部長、真相がはつきりしました。今、死んだ主人の声が届きました。」

主人はこう言っていました」

そう言うとき純子は、坂本の頭の中から聞こえた声をそのまま喋り始めた。

「このクソ尼、しつこい野郎だ。お前のバカ亭主は俺たちの身代わりになつたんだよ。お前のバカ亭主が出すぎた真似をしたからこうなつたんだ。あんたの言うとおり俺は犯人だが、他にもいるんだよ」それを聞いていた坂本の額には脂汗が滲んでいる。顔色を失くした坂本は、動揺の色を隠せなかった。

「お、奥さん、今言われたことはどういうことですか？」

「さつき急に主人の声が聞こえたんです。それを喋っただけです。当たってたんですか？」

「すみません。急にめまいがしてきたんで、今日のところはお引取り願えませんか」

今にも倒れそうな表情の坂本を見ながら、純子は確かな手ごたえを感じていた。これで主人の疑惑が晴れる。そんな想いが脳裏を駆け巡った。

「分かりました。今日はこれで失礼いたしますが、もう一度、調べてもらっていいですか？ 主人が死んでまでもウソを付いているとは思えませんので、よろしくお願いします」

坂本は純子の後姿を見送りながら、不吉な予感を感じていた。

斉藤たちのところへ戻ってきた純子は、坂本の考えていたことを二人に話した。坂本も粉飾決算のグルだったのだ。

「奥さん、犯人が分かりましたね。次回は坂本部長と一緒に誰か役員を一人を同席してもらいましょう。その席で彼らに真実を喋ってもらうので、ICレコーダーで録音してください。これで作戦完了です」

「疑うようで申し訳ないんですけど、彼らが真実を喋るでしょうか？」

「任せてください。必ず喋ります。我々には神様からいただいた不思議な力がありますからね」

翌日、純子は再び坂本にアポを入れてみたが、予定が詰まっており二日後の十九時以降であれば時間が取れるという返事だった。遅い時間だと諦めるのではないかという考えだろうが、純子はその時間に会うことにした。

約束の時間に会社に行くと社員は誰もおらず、坂本と男が一人待っていた。応接室へ案内された純子へ、坂本が口火を切った。

「こちらは長谷川専務です。専務にも話を聞いてみてください。あの件はすべてあなたのご主人がやったことに間違いありませんから」
純子は斉藤に合図を送り、長谷川の考えてることを読み始めた。
「どうしてこんなにしつこいんだ。この件はもう終わったんだ。坂本と俺と、執行役員の畠山があんたのバカ亭主に指示したんだよ。逆らったらクビだぞと言ってな」

長谷川の心を読んでいた純子が涙を流し始めた。驚いた坂本と長谷川が声をかけた。

「奥さん、どうしたんですか？具合でも悪いんですか？」

「今、主人の声が聞こえてきたんです。主人は、こう言っていました」

純子は今読んだ長谷川の考えていたことを、そのまま口に出した。長谷川の顔色が真っ青になった。坂本も動揺を隠せない。

「でたらめもいい加減にしてください！どこにそんな証拠があるんですか！死んだご主人が言ったなんて誰が信じますか！それが証拠だというのなら、どうぞ警察で今のことを話してください。我々は一向に構いません」

長谷川が一気にまくし立てた。額には汗が滲んでいて、明らかに動揺しているのが見て取れる。

「お二人とも本当のことを話してください。主人が怒っています。本当のことを言わないと、自分と同じ苦しみを与えると言っています」

純子が言い終わると同時に、坂本と長谷川が苦しそうに首をまさぐり始めた。まるで、首に巻き付いている何かを外すように。十秒ぐらいで二人は元に戻ったが、ゼッゼッと肩で息をしている。

「主人が、首吊り自殺をしたときの苦しみを与えたと言っています。本当のことを話していただけますか？」

「バカなことを言うんじゃない！本当のことにも、あなたの亭主がすべて一人でやったことだ。それ以外に本当のことなどない！」

坂本がそう言ったのと同時に、二人は再びさつきと同じように苦しみ始めた。三十秒が過ぎた。二人は首を掻き篋り、すでに首には引っかけ傷が出来て血が流れている。藤村はイメージするのを止めた。

息が出来るようになって、大きく肩で息を始めた二人は、化け物でも見るような目つきで純子を見ている。

「本当のことを言うていただけますよね。坂本部長さん」

坂本は返事をせず大きく頷くと、息が整うのを待ってから喋り始めた。

「当時のままだと赤字になるのは目に見えていました。社長からは何としても赤字は避けることという指示が出ていました。赤字を回避するには粉飾するしかなくて、長谷川専務と執行役員の畠山の指示で、私があなただご主人にやらせました。上手くいったと思っていたら粉飾決算がばれてしまい、長谷川専務の指示で、一切の責任をあなただご主人に押し付けたのです。これが真実です」

「バ、バカなことを言うんじゃない！ 私は北村君に責任を押し付けると言った覚えはない。君が勝手にやったことだろ！」

坂本と長谷川はしばらく言い合っていたが、純子はその一部始終をICレコーダーに録音していた。

「ありがとうございます。これで主人も満足したと言ってます」
頭を下げると、純子は会社を後にした。

斉藤たちの待つ車へ戻ってきた純子は、深々と頭を下げるとCCDカメラを返した。

「黄門様、助さん。ありがとうございます。お二人のおかげで、真実が分かりました。録音した証拠もありますので、これを警察へ持っていきます。きっと天国の主人も喜んでいると思います」

「奥さん良かったですね。我々も嬉しいですよ。約束ですが、私たちのことと今日のことは絶対に誰にも言わないでください。いいですね」

「はい、承知しております」

翌日のブログに、純子の書き込みがあった。

「昨日、主人が夢に出てきました。真実が分かって良かったと喜んでいました。何のことか分かりませんが、大変喜んでる夢でした。黄門様、素敵な夢をありがとうございました」

数日後、粉飾決算の発覚し、長谷川、畠山、坂本が逮捕されたこと純子から連絡があった。

「藤村、正直なところ、サラリーマンと水戸黄門の二束のワラジは時間的にしんどいな。お前はどうか？」

「やっぱり水戸黄門一派としては、世のため人のためにやらないといけませんから、泣き言は言ってもらえませんよ。ね！ 黄門様」

こいつ、とぼけたところがある割にはしっかりしたことを言う奴だ。斉藤は藤村が頼もしかった。時にくじけそうになる自分を、それとなく励ましてくれるのが嬉しい。

「今のところ名古屋近辺だけだけど、遠方からの依頼があつたらどうする？まさか名古屋近辺にお住まいのかた限定です。なんて言えないよな」

「当たり前前田のクラッカーですよ。外国は別として、どうしても僕らの力が必要だったら、行かないといけませんよね。そうになると、交通費やら宿泊費やらで出費がかかりますよ」

「それはそうと急にどうしたんですか？ 遠方からの依頼があつたんですか？」

「そうじゃなくて、もしそうなつたらどうしようかと、漠然と考えただけだ。いずれ必ず相談は来るよ」

始業時間の三十分前に、いつものように応接室で、斉藤と藤村は黄門会を開いていた。黄門会とは、水戸黄門会議を略して藤村が付けた呼び方だ。相変わらずユニークな発想をする奴だと斉藤は感心した。

「黄門様、またまた大事なことを忘れてますよ。ほら、ほら・・・」

藤村に言われても、何のことが全く分からない。

「なんのことか全然分からん。助さん、まいった。教えてくれ」

「まったく頼りないんだから。黄門様が超能力者ですよ。考えたら

すぐに分かるでしょう?」

「分かん。黄門様は歳だから、頭が回らんのだよ。助さん」

「瞬間移動したら交通費はかからないし、時間もかかりません。だから距離と時間は僕らには関係ないんです。分かりましたか黄門様」

「あつ、そうだった。すっかり忘れてた。さすが助さん。これで全国どこからの依頼にも大丈夫だな」

「ダメです。黄門様と一緒に瞬間移動したことがないし、どれぐらいの距離まで移動できるのか分かっていませんから」

「じゃあ、今日の昼休みに早速実験してみよう。本場の博多ラーメンを食べに行ってみるか」

ラーメン好きの斉藤の意見で、昼休みは博多までラーメンを食べるために、瞬間移動することになった。

昼休みを告げるチャイムが鳴り、斉藤と藤村は会議室へ入った。

人に見られないように実験するには、会社の外では無理だ。会議室へ入ると藤村は、以前行った博多のラーメン店の場所をイメージした。斉藤は両手で藤村の肩を掴んだ。

「助さん、パワーを送るぞ」

斉藤の言葉に合わせて、藤村は身体の奥からとてつもない力が湧いてくるのを感じた。その瞬間、二人の姿が藤村がイメージした場所に現れた。北九州のラーメン屋の前だ。たまたま店から出てきたおじいさんが、二人を見てしまった。

「わあ、お化けだ!」

「違いますよ、おじいさん。僕らは人間ですよ。急に大声を出すからビックリしましたよ」

「今、お化けみたいに現れたけん、たまがった。あんたら、ほんなこつお化けじゃなかな?」

老人は博多弁で尋ねてきた。

「店が一杯だったから、ずっとドアの横で待ってたんです。そしてらおじいさんが急に大声出すからビックリしましたよ。大丈夫ですか？」

藤村の咄嗟の機転で、老人は納得して店を去っていった。

久しぶりに本場の豚骨ラーメンを堪能した二人は、近くの公園へ向かった。公園へ着くとベンチに腰を下ろした。始業時間までは、まだ十五分ある。

「助さん、瞬間移動して現れるときに、人が居ないところを選べないかな？」

「やっぱり誰かに見られるのはまずいからな」

「練習してみましよう。でも、どうしてもダメだったらしようがないですよ」

「それともうひとつ。水戸黄門として成敗するためのルールを決めようと思うんだ。早い話が、依頼を受ける基準だな」

「いいと思いますよ。でもできる限り、一人でも多く人の役に立つようにしましよう。それが力を授かった理由だと、斉藤さん言っていましたよね？」

藤村の言うとおりで。出来る限り一人でも多くの人を救わなくてはならないのに、自分たちが決めた基準で、相談者を選別して本当にいいんだらうか。斉藤が考えていると、藤村が続けて言った。

「斉藤さん、相談者全員に対応するのは物理的にも、肉体的にも無理ですよ。だからこうしましよう。あきらかに僕たちの力がないと解決できないと思われるものだけに絞りましよう」

「そうだな。超能力なしでも解決できることはあるはずだから。今度から、ブログの書き込みに関しては、お前と相談してから決めよう」

そうこうしているうちに、昼休みの終わりまで五分となった。二人は人目につかない場所を探した。ちょうどいい具合に、植え込みが茂っている場所があった。

「助さん、会議室に移動してくれ」

「分かりました。やってみます」

斉藤がパワーを送った。その瞬間、二人は会議室に現れた。

「大成功だな！」

「意外と簡単でしたよ。今度からはどこでも好きな場所に移動できますよ」

あっけらかんと言う藤村が、斉藤には頼もしく見えた。

斉藤は自宅の居間で水戸黄門を見ていた。結末は毎回決まっている。最後には水戸黄門が出てきて伝家の宝刀の印籠を見せて、一件落着となる極めて単純明快なストーリーだ。

結末ははつきり分かっていて、最後に悪人が成敗されるというストーリーは、見ていて実に気分いい。子供の頃から父親と一緒に水戸黄門を見ていた斉藤は、最初から印籠を見せたらすぐに片付くに、なぜ最後まで見せないのか不思議だった。父親に聞いても、俺は水戸黄門じゃないから分からない。という返事しか返って来なかった。

今は江戸時代ではないが、現代の自称水戸黄門となった斉藤は、伝家の宝刀の超能力を出し惜しみするつもりはない。自分たちが関与して解決できる問題は、できるだけ解決するつもりだ。

ブログには今のところ、斉藤たちが関与しなければならぬような書き込みはなかった。藤村は例のごとく、いささか退屈気味だ。

「斉藤さん、何も依頼がないと退屈ですね。すみません。平和が一番なんですよね」

「大人になったな、そのとおり。平和になるように俺たちは活動してるんだらう？ だったら今、何も問題がなくて平和だからいいじ

やないか」

「そうですね。この平和な時間を利用して、超能力の実験をしましょうよ。やりたい実験があるんですけど、パワーを送ってもらえないですか」

「どんな実験だ？」

「それはお楽しみということだ」

「ダメだ。超能力は遊びじゃないんだから、言わないと送れないぞ」
「次回のロト6と競馬の予想をしたいんです」

齊藤は冗談かと思ったが、藤村は真面目な顔だ。

「ダメだ。そもそも超能力を授かったのは、それなりの理由があるんだぞ。」

私利私欲のために使って、もし超能力がなくなってしまったらどうするんだ」

「すみません。つい、欲に目が行ってしまいました。まだ修行が足りませんね。今言ったことは忘れてください。すみませんでした」

斉藤は帰宅後いつものように、ブログへの書き込みを見ていた。ここ最近、斉藤たちが手を貸さないといけないような問題はなく、ほとんどが斉藤や読者からのアドバイスや意見で解決できるものだった。

パソコンの電源を切ると夕食を済ませた。斉藤の帰宅時間は、夜の七時半から九時ぐらいだ。家族には先に食べるように言っている。食事後しばらくして風呂に入った。風呂から上ると発泡酒を一本飲むのが、毎日の習慣になっている。

今日の出来事を書き込むために再度パソコンを立ち上げ、ブログを開いた。ブログには、さっきはなかった書き込みがしてあった。内容は結婚詐欺だ。

「モンブランです。ある男に騙されて、今までコツコツと貯めてきた結婚資金を全部奪われました。詐欺です。気づいたときには手遅れでした。警察に届けましたが、相手は巧妙で取られたという証拠は何も見つからず、結果的に名誉毀損で訴えられ、さらに慰謝料まで取られてしまいました。黄門様お願いです。奪われたお金を取り戻してください」

「これは酷いな！」

小さく呟いた斉藤は、藤村の携帯電話の短縮番号を押した。五回の呼び出し音の後、藤村が電話に出た。

「助さん、俺だけど、今パソコン見れるか？ ブログに結婚詐欺にあった女性の書き込みがあるんだけど、助けてやらないか？」

「ちよっと待ってくださいね。ええと、あったあった。ふむふむ。」

これは可愛そうですね。助けてあげましょう！ これを見逃したら罰が当たりますよ。場所が横浜ですね。瞬間移動でやりましょう」
電話を切り、早速モンブランさんあてにメールを送った。

「水戸黄門です。こんにちは。ひどいですね。私と助さんが協力します。明日の午前十時に会って、詳しい話をしましょう。場所は・

」
彼女もパソコンの前にいるのだろう。すぐに返信のメールが届いた。

「よろしくお願ひします。黄門様は名古屋ですけど、十時に待ち合わせの場所に来れるのですか？ 時間の間違いではないですか？」
「大丈夫です。十時に行きますので、よろしく」

翌日の九時半過ぎに、斉藤と藤村は一緒に会社を出た。今日の予定は、二人で食品会社のK社を十一時に訪問の予定だ。横浜でモンブランと話をしても充分間に合う。二人が乗った車がショッピングセンターの駐車場に停まった。九時五十分だ。

「助さん、横浜へ出発だ」

斉藤は藤村の肩を掴み、超能力パワーを送った。藤村は身体の奥底から、とてつもないパワーが湧いてくるのを感じた。次の瞬間、二人は横浜の待ち合わせ場所の、人目に付かないところに現れた。

「助さん、大成功だな。さあ、待ち合わせ場所へ行こうか」

二人が指定した場所へ行くと、依頼者のモンブランが立っていた。「こんにちは。水戸黄門です。こっちは相棒の助さんです。早速ですが時間がないので話を聞かせてください」

三人は近くの喫茶店に入ると、一番奥のテーブルに席を取った。

「森裕子と申します。実は、半年前まで一年間付き合っていた男に、今まで貯めた八百万円を騙し取られたんです。それに、ブログにも書きましたが、慰謝料を百万円取られたんです。相手は凄く巧妙で証拠がないので、泣き寝入りするしかないんです。でも私以外の女性からも同じ手口で騙し取ってるんじゃないかと思えます。絶対に許せません」

「分かりました。それで我々はどうすればいいですか？ どんな協力をすればいいですか？」

「騙し取られたお金が全額戻ってきたらそれでいいんです。それ以上のことは望みません」

「相手はどんな男なんですか？」

「年齢は三十五歳で既婚者です。私には独身とウソを付いていました。父親は建築会社を経営していて、その跡取り息子なんです。資産家なのでお金はあるはずなのに、どうしてこんなことをするのか分かりません」

「では作戦を考えましょう。森さん、何か作戦はありますか？ 出来る出来ないは別として、こういうことをやりたいというのは」

「すみません。黄門様たちは何か考えがあるんですか？」

裕子は何も考え付かないのか、あるいは斉藤たちに全てを任せつつもりているのか、逆に質問してきた。

「あなたの話を聞いてから考えようと思ってました。我々は何でも出来ます。森さんの考えがあるんですしたら、それをやりますよ。たとえ現実的に不可能と思えるようなことでも」

「言われている意味が分からないんですが。もっと分かりやすく言ってもらえませんか。現実的に不可能なことは不可能ですよね」

「助さん、森さんに分かるように説明してくれ」

「はい黄門様。それでは森さん、右手にスプーンを持ってください。それをテーブルに押し当ててください。今から起きることを見ても絶対に声を出さないでください。周りのお客さんに聞かれるとまずいですから」

藤村が言い終わると、斉藤は藤村にパワーを送った。森が持っているスプーンが徐々にテーブルにめり込んでいく。信じられない光景だ。裕子は声を出すまいと、左手で口を押さえた。スプーンが半分ほどめり込んだところで、藤村が囁いた。

「どうですか？ 現実的に不可能なことが起きたでしょう？ 次は元に戻しますから、スプーンを引っ張ってください」

裕子は言われたとおりにすると、スプーンが抜けた。テーブルには傷も何も付いていない。最近テレビで時々見かける、イリュージョンを見ているみたいだ。

「森さん、これは手品ではありません。種はありません。我々が言った意味が分かりましたか？」

「はい分かりました」

そう言っただけで森がニヤリと笑ったのを、黄門様も助さんも気づかなかった。

作戦は早いほうがいいということになり、明日の土曜日の午後一時ということにした。

打ち合わせが終わって喫茶店を出ると、斉藤と藤村は裕子とは別の方向に歩いていった。裕子が何かを言おうと振り向いたときには、二人はショッピングセンターに停めていた車の中に居た。

「さて助さん、お客様のところへ出発だ。約束の時間まであと十五分だ」

「黄門様、充分間に合いますよ」

翌日土曜日の昼十二時。作戦開始時間の一時間前だ。斉藤と藤村は待ち合わせ場所の公園にいた。

「黄門様、ひどい男ですね。一体何人の女性を騙してるんでしょうね」

「結婚を餌に騙す男も悪いけど、女性のほうも、もつとしっかりしないとな。騙されるといのは、どこかに隙があるんだろうな。それにしても、取られた金だけは取り返してやらないと」

「まったくですね。自分は資産があるくせに、安月給の中からコツコツ貯めたお金を騙し取るのは絶対に許せませんね。少し痛い目にあわせたほうがいいですね」

「助さん、何だか良く分かんただけど、変な感じがするんだよな。何だろうな。彼女が男に会ったら、彼女の作戦の前に男の頭の中を覗いてみてくれないか」

二人が話していると裕子がやってきた。一時十分前だ。

「すみません。わざわざ来ていただいて」

「では森さん。作戦通りにやりますから、これを付けてください」

藤村がCCDカメラ付ボールペンを渡すと、それを胸ポケットに差した。森は男に電話して、昼一時に カフェに来るように連絡をしていた。そのカフェは公園から二百メートルほど離れたところにある。裕子は カフェへ歩いていくと、入り口の前で男を待っていた。一時を五分ほど過ぎた頃、男がやってきた。裕子と男は一緒にカフェへと入り、窓際のテーブル席へ座った。

CCDカメラに映った男は、穏やかで優しそうな表情だ。この仮面の裏に隠された、結婚詐欺の正体を暴いてやるぞ！ 藤村は呟きながら、男の頭の中を読み始めた。すでに斉藤からパワーが送られ

ている。

「変だな。話が違うぞ」

男の頭の中を読んだ藤村は、なんだか解せないという表情をしている。

「どうした助さん」

「黄門様、男の名前は林田雄一郎です。彼の頭の中を読んだ結果を送ります」

「助さん、この男は詐欺なんかじゃないぞ。いたって真面目で優しい男だぞ。なんだか様子が変だな。今度は彼女の考えを読んでみてくれ」

藤村は森に意識を集中した。

「黄門様、彼女は資産家の男を食い物にしている悪党ですよ。林田をゆるするつもりです。私との浮気をネタに脅すみたいですよ。すでに三百万円取ってます。彼女が被害者じゃなくて、林田が被害者ですよ。騙されましたね」

人の好意を逆手にとって利用しようとは、斉藤の怒りが爆発した。斉藤は一旦、パワーを送るのを止めた。今までなら怒りが爆発すると、無意識にパワーが発散されていたのだが、座禅修行をしてからは、怒りが爆発してもパワーを制御できるようになっていた。

「助さん、しばらく二人のやりとりを見ることにしよう」

斉藤と藤村は、受信モニターに目を凝らした。

「手切れ金は渡しただろう。何の用だ？」

「人聞きの悪いことを言わないでよ。あなたが悪いんでしょう！」

私との浮気を奥さんにばらすわよ。それが嫌だったら例の写真を返

してちょうだい。それと慰謝料として八百万円もらうわよ」

「ふざけるな。そんな脅しに乗ってたまるか。ばらしたらいいじゃないか。」

その代わりこつちも、お前の知り合いにあの写真をばら撒いてやる」

例の写真とは、裕子が高級ソープランドに勤めていたときの写真だ。林田がそのソープランドに行ったとき、相手をしたのが裕子だった。林田は持っていた小型のカメラで、冗談半分に裕子に内緒でそのときの写真を撮っていたのだ。

その後何度かソープランドに通い、裕子と浮気するようになった林田は、彼女に弱みを握られ、その代償として手切れ金二百万円を渡していた。裕子は林田が資産家と知ると、自分との浮気をネタに林田から金をせびるようになった。そのときに林田から、友達の資産家の息子を紹介してもらい、彼らとも浮気をしていた。裕子は同じ手口で、林田の友達からもお金を脅し取っていた。

「いいわ。返してくれないのなら私にも考えがあるわ」

そう言つと裕子は、斉藤たちと打ち合わせたとおり、あることを強くイメージしながら、CCDカメラの前にピースサインを出した。本来ならここで、裕子のイメージどおりのことが起きるはずだったが、何も起きない。

「お前、どこか悪いんじゃないのか？ 病院へ行つて診てもらえ。それと、もう二度と俺の前に現れるな。分かったか」

林田は自分のコーヒー代を置くと、不機嫌そうな表情で店を出て行った。林田の後から店を出た裕子は怒りに目を吊り上げながら、斉藤たちのところへやってきた。

「一体どうなってるのよ！ 何が水戸黄門と助さんよ。ふざけるな！ この落とし前はどうしてくれるの！ ブログにメチャクチャ書

いてやるから、覚悟しなさい！」

凄い剣幕で怒っている裕子は、さながら般若の面のような顔つきになっている。

「助さん、とうとう本性を現したぞ。見てみる、この醜い顔を。まさに悪の塊じゃ。これはワシらが成敗せんといかんみたいじゃ」

「黄門様、そのとおりです。あつしも、そう思っていたところです。二人がふざけて言ってるのが余程勘に触ったらしく、裕子が吼えました。」

「てめーら、ふざけるな！ 今から痛い目にあわせてやる。怖かったら逃げてもいいんだぞ。腰抜けの黄門ヤロウ」

「どうぞやっってください。ここで待ってますから。のう、助さん」

「ご隠居、どんな目に合わせてもらえるのかワクワクしますね。ああ、待ちどうしいなあ」

二人の会話に完全に切れた裕子は、携帯電話で怒鳴っていた。待つこと二十分、見るからに暴力団風の男が二人やってきた。ここまではドラマや映画で良く出てくるシーンと同じだ。斉藤と藤村は、待ちくたびれたかのように腕時計を見ながら、裕子と二人の男に言った。

「場所はここでもいいですか？ 人目に付かないほうがいいんだったら、そこへ行きますけど」

「ふざけたヤロウだ。お前らの望みどおり人目の付かないところへ行ってる」

五人は公園を出ると、人通りの少ないビルの間の路地へと入っていった。

「ところで、ワシらは何をしたらいいんじゃない？ 助さん、分かるか

「？」

「黄門様、分かりません。この三人に聞いてみましょう」

「どこまでバカにしてるんだ！ 何が黄門様に助さんだ。少し痛い目にあってもらうぞ。それから詫びの印に、取りあえず百万ほどもらおうか。今持ってなかつたら、今度会うときに持って来い」

そう言つて二人の男が殴りかかろうとしたが、そのまま前に倒れてしまった。足が出なかつたのだ。

「あんたらどうしたの？ 足が地面にめり込んでるけど」

助さんに言われて、裕子と二人の男は足を見た。そこには信じられない光景があつた。二人の男の靴が半分ほど、アスファルトにめり込んでいたのだ。さながら、アスファルトから人間が生えているような感じだ。

「森さん、昨日言つたでしょう？ これは手品じゃないつて。このまま僕らは帰つてもいいんですけど、どうします？」

藤村の淡々と喋る口調が三人には不気味だつた。二人の男の声は泣き声に変わっている。

「すみません、許してください。もう二度とこんなことはしません。どうか勘弁してください。助けてください。お願いします」

「世の中には常識で考えられないことが存在するんです。森さん、我々は離れていてもあなたの考えてることが、手に取るように分かるんですよ。そればかりか、この二人にやつてるようなことも出来るんですよ。たとえば、頭をめり込ませることもできますよ」

「私が悪かつたんです。今から真面目に生きます。どうか今までのことは許してください。お願いします」

「助さん、森さんが本心で言ってるのかどうか、彼女の心の中を読んでみてくれ。もしウソだったら、彼女の足も道路に埋めてくれ」

裕子が逃げようとしたが左足が出なかった。彼女の左足も、道路にめり込んでいたのだ。裕子は泣きじゃくった。泣きながらひたすら謝った。

「黄門様、本当に改心したみたいですよ。今日一晩このままにしておきますか？ それとも許してあげますか？」

「ワシらは悪魔じゃないからな。許してあげよう」

斉藤が言った瞬間、三人の足は道路から抜けた。

「森さん、悪いことはいかんよ。悪いことをしたら必ずその報いは受けるよ。覚えておきなさい。じゃあ、助さん帰るとするか」

斉藤はそう言うつと藤村の肩に手を掛けた。その瞬間、二人の姿は三人の目の前から、煙のように突然消えたのだ。信じられないものを見てしまった三人は、その場に呆然と立ち尽くしていた。

斉藤と藤村は、藤村のアパートの中に現れた。冷蔵庫から缶ビールを取り出した藤村が斉藤に一本手渡し、二人は乾杯をして一気に飲み干した。

「斉藤さん、今度から依頼を受ける場合、相手の心の中を読んだほうがいいですね。下手すると、犯罪の片棒を担ぐことにもなりかねませんからね」

「俺もそう思ってたんだ。しかし、危うく森に騙されるところだったな。気づいて良かったよ」

しばらく雑談した後、斉藤は藤村のアパートを後にした。

その夜、居間で家族とテレビを見ていた斉藤は、画面に映し出された臨時ニュースの字幕に目が行った。

「日本刀を持った男が、東京のＡＢ銀行 支店に女性従業員を人質に立て籠もっている。人質は十人ほどいる模様で、男は逃走用の車を要求している。支店長が腕に怪我を負っており、現在警察が銀行を取り囲み、説得を続けている」

別のチャンネルに切り替えると、立て籠もり事件の現場の映像が映し出されていた。今までもこの手の犯罪は何件か起きていたが、銀行に立て籠もって逃げられた犯人は、斉藤の記憶には無かった。必ず捕まるものだ。

「アホな犯人だな。立て籠もったら捕まるに決まってるのに」

「そうかもしれないけど、人質の人は怖いでしょうね。早く何とかならないのかしら」

斉藤の言葉に、妻の芳恵が独り言のように呟いた。しばらくその様子を見ていた二人は、電話が鳴っているのに気づき、芳恵が受話器を取った。相手は藤村だ。

「課長は居ますか？」

「はいおります。代わりますのでお待ちください。あなた藤村さんから・・・」

「斉藤さん、立て籠もり事件の番組を見えますか？」

「ああ、見てるよ。犯人はバカだよな。立て籠もったら逃げられるわけがないのに。たぶん最悪の場合、射殺されるかもしれないよな」
「それより、あの 支店に従妹が勤めているので、心配になって東

京の叔母さんに電話したら、従妹から人質になつてるといふ携帯メールが届いたそうなんです。斉藤さん、従妹を助けるのに力を貸してもらえませんか」

「分かった。今からパワーを送るから、うちの前のコンビニの駐車場に来てくれ」

斉藤がパワーを送ると、藤村の姿がコンビニの駐車場に現れた。駐車場には人影は無く、誰にも見られることはなかった。

「ちよつとコンビニに行つてくる」

芳恵に言つて家を出た斉藤が五分ほどしてコンビニに着くと、待っていた藤村が駆け寄つてきた。

「斉藤さん、超能力を使えば犯人を捕まえるのは簡単です。早く行つて捕まえましょう」

「分かった。人質に何かあつたら大変だから、すぐに行くぞ」

斉藤が藤村の肩を掴んだその瞬間、斉藤はジェットコースターが急降下するときのような感覚を全身で感じた。時間的には一秒も経つていない。二人は、たくさんの野次馬と警官で騒然となっている支店の近くに現れた。外から銀行の中の様子は見えない。犯人には警察のトランシーバーが渡されており、それにより犯人が警察に、いろいろな要求をしていた。

銀行の中の様子は見えないが、犯人は人質の手足を粘着テープで縛っており、あと三十分以内に逃走用の車を用意しないと人質を殺すと言っていた。

「助さん、作戦だけど、一瞬で片付けないと人質が危ないぞ。まず瞬間移動したら、犯人の足を床にめり込ませて動けないようにしてくれ。その隙に人質を全員逃がし、人質が逃げたら俺たちは瞬間移動でコンビニの駐車場に戻る。この作戦で行こう。顔を見られると

「まずいからマスクを持ってきた」

「分かりました。僕はサングラスを持ってきましたよ」

斉藤と藤村はサングラスとマスクを掛けた。

「準備OK！」

斉藤の言葉と同時に、藤村に超能力のパワーが送られた。

銀行の中では、犯人に縛られた人質が、カウンターの前に一列に座らされていた。犯人は警察からの差し入れのサンドウィッチを食べながら、人質の前を行ったり来たりしている。その右手に持たれた日本刀が、不気味な光を放っている。

斉藤と藤村はカウンターの中に現れた。犯人は窓側を向いているので二人には気づいていない。カウンターの前に座らされている人質も気づいていない。

藤村が頭の中で犯人をイメージした。犯人は何かにつまづいたような感じで前に倒れ手を付いた。人質の誰かが犯人の足を見て悲鳴を上げた。足首から下が、床にめり込んでいるのだ。

カウンターの中から飛び出した斉藤と藤村は、用意していたカッターナイフで人質の粘着テープを切っていった。

「早く外に逃げてください！」

斉藤が叫んだ。全員が逃げるのに三分がかかった。人質が全員逃げたのを確認した藤村は、犯人のめり込んでいる足を元に戻した。自由になった犯人は、日本刀を振りかざして斉藤と藤村に襲い掛かった。その瞬間、二人の身体は煙のように消え、斉藤の家の近くのコンビニの駐車場に現れた。

「ふうう、危なかったですね！一瞬、ヒヤッとしましたよ。今度からこんな綱渡りみたいなことは止めましょう。今日は従妹が人質だったから仕方が無かったんですけど。まだ震えてますよ」

「俺も震えてるよ。怖かったな。何しろ俺の超能力は五分が限界だ

から、それ以上になるような場合は使えないな。慎重に作戦を練らないと、こっちの身が危なくなるぞ」

コンビニで缶ビールとツマミを買った斉藤は、自宅のドアを開けた。自宅を出てから、まだ十五分しか経っていない。妻の芳恵は居間で立て籠もり事件の番組を見ていた。

斉藤は買ってきた缶ビールを飲みながら、一緒にテレビを見始めた。人質が全員逃げた後、警察隊が銀行に突入し、犯人は逮捕された。犯人は、目の前に居た男二人が消えたと、訳の分からないことを口走っている。たぶん、麻薬か何かをやっているのではないかとニコースで言っていた。

銀行内に設置されたカメラには、斉藤と藤村の後姿が映っていたが、誰かを特定できるような画像ではない。ましてその時間、斉藤と藤村は名古屋に居たのだから、常識的に考えれば二人に疑惑がかかるおそれはなかった。

「良かったわね。犯人が捕まって。でもどうやって人質は逃げ出せたのかしら」

「スーパーマンが助けたんじゃないか」

斉藤は笑いながらそう言うと、自分の部屋へと戻った。

翌日の朝、斉藤と藤村はいつものように始業前に応接室で、超能力について話し合っていた。

「助さん、超能力の使い方だけど、正直なところ何に使ったらいいかわからなくなってきたよ。当初、悪代官を懲らしめるために始めたけど、最近はいろいろな事件にも関わっているだろう」

「黄門様、その能力は黄門様が言ってたように、世のため人のために使うように与えられたものだと思いますよ。だから、何に使おうか考える必要はなくて、人のためになるようなことだったら上司を

成敗してもいいし、犯罪事件に使ってもいいし、病気で苦しんでる人を助けてもいいと思います。ただ、慎重に吟味しないとイケませんけどね」

「そうだな。分かった助さん、時間の許す限り、この能力を使うことにするよ。と言っても俺はパワーを送るだけで、実際に超能力を使うのは、助さんだけだな」

「二人で力を合わせて、少しでもいい世の中にしていけばいいんじゃないですか。それが僕らの使命ですよ」

「助さん、話は変わるけど、アメリカの911テロのとき、もしこの能力があつたら、旅客機が突っ込むのを止められたかな？」

「超能力には重さや大きさは関係ありませんから、止められたと思います！」

迷うことなく言い切った藤村の言葉は、確たる自信が言わせていた。藤村は、斉藤から送られてくる超能力パワーは、原爆何十個分にも匹敵するパワーを秘めていると感じていた。

第6章 超能力が役に立たない

「仁美ちゃん、もし何かひとつだけ願い事が叶えられるとしたら、何をお願いする?」

藤村はコンビニで買ってきた弁当を、会社の応接室で食べていた。応接室では二十代半ばの松下仁美と、四十代後半の岡本須美子も弁当を食べていた。

「藤村さん、突然何を言い出すんですか。もしかしたら私の願いを叶えてくれるんですか? だったら、お金が欲しいです。取り合えず三億円でもいいですよ」

「お金? 彼氏とが要らないの?」

「なんだかんだと綺麗ごとを言っても、まずはお金ですよ。そう思いませんか? だって全部とは言いませんけど、いろんな事件が起きて、その原因はお金というのが多いでしょう? お金がないから犯罪が起きるんですよ。お金はないと困るけど、有りすぎて困るということないじゃないですか」

「岡本さんもお金ですか?」

「うちは住宅ローンと子供たちの学費で大変なんですよ。愛や恋とというのは結婚するまでです。やっぱり落ち着くところはお金ですよ」「そうだよな。俺らもお金をもらうために、サラリーマンやってるんだから」

「どうしたんですか? 頭でもぶつけたんですか?」

「仁美ちゃんは、悩みは無いかもしれないけど、俺は悩める年頃に

なっただよ」

三人は他愛のない雑談しながら昼食を食べていた。話が途切れたところで、藤村がテレビのスイッチを入れ、ニュース番組にチャンネルを合わせた。ニュースは東京で起きた連続通り魔事件のことを報じていた。五人目の被害者は二十代のOLで、今朝六時頃、出勤途中に背後から背中を一突きされており即死の状態だった。

「怖いわね。最近、頭がおかしい奴が多いのよね。地球環境が悪化してるのが原因なのかもしれないわね」

藤村は、岡本が言ったことが満更デタラメとも思えない。ゲリラ豪雨や干ばつなどの異常気象が起きるように、人間も異常な状態になるのではないかという気がする。

「後ろからいきなり襲われたら防ぎようがないわね。おお怖い。こんなときにスーパーマンでもいてくれたらね」

仁美は心底怖そうに、身震いしながら言った。

今のところ犯人の手がかりはまったくなく目撃者もいないため、男か女かさえ分からない状態だ。藤村には、次の被害者が出るのは時間の問題のように思えた。こんな変質者を野放しには出来ない。藤村は、この通り魔を成敗することに決めた。

昼食が終わり雑談しているうちに始業のチャイムが鳴った。斉藤はお客様を二社訪問して、十五時に帰社予定となっている。

十五時半になって斉藤が帰ってきた。藤村は斉藤が席に着くと、頃合を見て応接室へ誘った。藤村も斉藤も誰かを成敗するときは、お互いを黄門様、助さんと呼ぶことにしている。

「黄門様。どうしても成敗しないとイケない奴がいます。早くしないと、次の犠牲者が出ます」

「助さん、東京の連続通り魔事件のことじゃないのか？」

「そうです。こいつだけは絶対に許せません！ 僕の思いとしては、こいつは自分の死をもって償っても償いきれないと思います」

「俺もそう思っていたところだ。早速作戦会議だ」

無差別殺人事件は近年多くなっており、そのどれもが犯人は凶器を振り回し、あるいは車で突っ込むなどして殺人を犯していた。犯人は姿を隠すのではなく、白昼堂々と犯罪を犯していたのだが、今回の事件は違っていた。犯人は一度犯罪を犯すと、ほとぼりが醒めるまで次の犯行は止めているように思える。

警察は、背後から鋭利な刃物で刺している犯行の手口から、一連の通り魔殺人事件は、同一犯と見ている。犯行は西部池袋線の石神井公園駅を中心に、半径十キロメートルの範囲で起きていた。犯行日時はバラバラで関連性は無く、目撃者もなく、被害者は全員が死亡していたため、手がかりは全くない。

「助さん、これは難しいな。以前ひったくり犯を捕まえたときは、被害者に協力してもらったから逮捕できたけど、今回は被害者が全員亡くなっているし、目撃者もないし、手がかりがまったくないだろう」

「黄門様、僕も同じことを思っていました。超能力があっても今回の事件は難しいですね。正直なところ、どうしていいか全然分かりません。こうなると、いくら超能力があっても何ともなりませんね」
二人はそのまま黙り込んでしまった。今回の事件に関しては、まったくと言っていいほど、何もアイデアが浮かばない。

コンコン！ 応接室のドアをノックする音が聞こえた。

「はい。どうぞ」

「失礼します」

ドアを開けて入ってきたのは、松下仁美だ。

「課長、K社の澤田様からお電話ですが、こちらの電話に出ますか

「？」

「仁美ちゃん、俺の席の電話に繋いでくれるかな。すぐに戻るから」
「はい、分かりました」

仁美は斉藤の席の電話に繋ぐと、応接室に戻ってきた。

「藤村さんどうしたんですか？ 二人とも深刻な顔をして。何か問題でも起きたんですか？」

「いや別に大したことじゃないよ。心配してくれてありがとう」

藤村は明るく答えると、自分の席へと戻った。仁美は小首を傾げながら、納得いかないという表情をしながら応接室のドアを閉めた。

その日帰宅した斉藤は、パソコンを立ち上げると、埼玉の通り魔事件の記事を検索した。いつもならブログの書き込みをチェックするのだが、通り魔事件のことが気になり、ブログのチェックは後回しにした。

通り魔事件は五月中旬に二件、六月末に二件起きていた。それ以後、七月から九月には起きていなかったが、十月になった今月中旬に、五人目の犠牲者が出ていた。

犠牲者は全員が二十代の若い女性で、背中から鋭利な刃物で刺されていた。前から襲われるのであれば多少とも抵抗できるだろうが、後ろからいきなり刺されたら抵抗のしようがない。

被害者のうち三人は心臓を刺されており、即死状態だった。残り二人は、心臓は外れていたが、出血多量による失血死だった。発見が早ければ助かる可能性があったと思われる。五人の被害者に関連性はなく、行き当たりばつたりの犯行だろうと警察は報じていた。

目撃者はいない。凶器も見つかっていない。不審な人物も目撃されていない。五人の被害者の身辺調査でも何も出てこない。手がかりはまったくない。犯人が捕まっていないから、次の被害者が出るのは時間の問題だ。被害者が出る前に何とかしなくては。斉藤は、やり場の無い怒りとともに焦っていた。

「何かヒントはないのか？」

「何か証拠はないのか？」

「何か見落としていることはないのか？」

「俺は超能力者だ。非常識なことができるんだ。非常識に考える！」

斉藤は必死だった。必死に考えたが何も思いつかない。警察は巡回を強化すると言っていた。有効な策がない以上、犯罪を防ぐには

それしかないだろうと思ったが、それは解決策ではない。

「三人寄れば文殊の知恵か」

そう呟くとブログの画面に切り替え、読者の意見を聞くために、書き込みをした。

「通り魔事件がまた起きました。犯人は残虐な奴です。絶対に許せません。このままでは、次の犯行が起きるのは町がありません。どうしたら犯人を見つけられるか、何か案はありませんか？」

アパートで缶ビールを飲みながらパソコンを見ていた藤村が呟いた。

「黄門様は行き詰ってるみたいだな。俺が何とかしなくちゃ」

そのときふと、会社で岡本須美子が言ったことが頭をよぎった。

「怖いわね。最近、頭がおかしい奴が多いのよね。地球環境が悪化してるのが原因なのかも」

もし犯人が精神異常者だったら、犯罪が起きる日時は天候に関係があるのかも知れない。そう言えば以前、虫垂炎は高気圧のときに発生する確率が高いというのを、何かで読んだことがあるのを思い出した。

藤村は早速、今まで起きた五件の事件のときの天気と、気温、時間、気圧を調べてみることにした。

五月の二件は、晴れのとくと曇りのときだった。六月の二件は、晴れのときで、十月の今月に起きたときは晴れだった。時間帯は早朝、夕方、午後十時過ぎとばらばらだ。

調べた結果、犯罪が起きた日時と天候との間には、何の関連性もなかった。もしかしたらと思っていて藤村の考えは、あっけなく粉碎されてしまった。

「まいったなあ。何にも分からないや」

何のアイデアも閃かないので、取りあえずパソコンを閉じて今日のところは寝ることにした。このまま考えていたら眠れなくなりそうなのがする。

「おはようございます」

始業時間の三十分前に出社した藤村は、ドアを開けると挨拶をした。

「おはよう」

挨拶を返したのは斉藤だ。斉藤以外には誰も出社していない。藤村と斉藤は、毎日、始業時間の三十分前に出社している。特に時間を決めていないが、水戸黄門、助さんとして話をするには、この時間に出社するほうが都合がいいからだ。応接室に入った二人の表情は重かった。

「助さん、通り魔事件だけど、成敗しようにも犯人を見つけないアイディアが浮かばなくて困ってるよ。頭打ち状態だ」

「黄門様、実は僕も何も思いつかなくて弱ってるところです。昨日、ふと天気と犯罪の起きる日に何か関係があるのかと思って調べたんですが、結局何も関連性がなくてダメでした」

「助さん、もう一度初心に帰って考えてみようか」

「どういうことですか？」

斉藤は藤村と質問のキャッチボールをすることで、何かアイデアが出るのではないかと思った。

「そもそも、俺たちが水戸黄門と助さんになったのはなぜだ？」

「バカ上司を成敗して、善良なサラリーマンを助けるためです」

「どうやってバカ上司を成敗するんだ？」

「伝家の宝刀の印籠に替わる超能力を使ってです」

「超能力がなければ成敗できないのか？」

「常識的に考えれば成敗できないものもあります。それを非常識な超能力で成敗するんです」

「それは、常識的に考えていては成敗できないということか？」

「常識的に考えてダメなので、非常識的な超能力という力が必要なんです」

「ということは、複雑な問題を解決するには非常識に考えて、非常識的な超能力を使う必要があるということか？」

「そのとおりです」

「今回の通り魔事件に関して、俺たちは非常識に考えてるか？」

「黄門様、分かりました。少し時間をください。考えてみます」

藤村は斉藤の言わんとしていることが分かった。超能力を忘れた発想をしているのは、それは常識内での発想だから何も閃かないということだ。せつかく能力を超えた能力があるのに、常識的な能力での発想では宝の持ち腐れになってしまう。

藤村は自分が使える超能力について整理しなおしてみた。今使える超能力は、瞬間移動、相手の考えを読み取る、物を持ち上げる、物を破壊する、物を融合させる、この五つの能力が確認できている。ただしこの能力は、相手が目の前にいなくては意味をなさない能力だ。今回の事件には、これ以外の能力が必要になる。

非常識に考えた場合、どんな能力があれば、犯人を捕まえることが出来るのか。藤村は自問してみた。犯行日時が予測できる。犯行現場が分かる。犯人の居場所が分かる。犯人の顔が分かる。被害者の傷を治す。誰かが犯人を目撃する。時間を過去に戻す。

藤村は、この中のいくつかを実験することにした。実験するといつても、斉藤からパワーを送ってもらわないことには、何も出来ない。藤村は今日の仕事が終わってから、実験するつもりでいた。次

の犯罪が起きるのは時間の問題なので、ぐずぐずしている時間はない。斉藤は客先へ行っており、帰社予定時間は十六時だ。藤村は受注した分の手配と、明日提出しないといけない見積書の作成があり、一日社内だ。

昼食を知らせるチャイムが鳴った。藤村は、岡本須美子、松下仁美と一緒に雑談しながら、応接室でコンビニ弁当を食べていた。

「仁美ちゃん、何かいい話ない？」

「藤村さんの言ういい話ってどんなことですか？」

「うまい儲け話とか、得することとかだな」

「そんなことばかり言ってるから、お嫁さんの来てがないんですよ」

「そうかもな。アツハツハツハ」

仁美は思ったことをズケズケと言ってきた。不思議と仁美に言われても腹が立たない。辛口のコメンテーターみたいな仁美だが、嫌味が無くさらっとした性格が、相手を不愉快にさせることを防いでいる。

「いい話じゃないですけど、この前起きた通り魔事件、何も中間テストの時期にやらなくてもいいのに。学生があんな事件をみたら気が散りますよね。あっ、違う時期にしたらと言う意味じゃないですよ」

仁美は言ったあと、しまったという表情をしながら弁当を口に運んだ。

「そうか！ 分かったぞ！」

藤村が膝をポンと叩いて叫んだ。

「何が分かったんですか？」

「仁美ちゃんの言ったことで、次に犯行が起きる日が分かったんだ」

仁美と須美子は、キヨトンとした表情をしながら顔を見合わせた。「いいかい。過去の通り魔事件の発生日を見ると、中間テストと期末テストの日に起きてるんだ。今月もそうだろ？　という事は、次の犯行は期末テストの十一月末だ。間違いない」

「なるほど。犯人は何かテストに恨みを持つてるのかしらね」

岡本が疑問を口にした。

「理由は分かりませんが、期末テストの時期に犯行が起きるのは間違いないですよ」

「でも場所が分からないと捕まえられないわ」

「そうなんです。岡本さん、何かいい考えはないですか？」

「あら、何だか藤村さんが刑事さんに見えてきたわ。でもどうしてそこまでやるんですか？　警察に任せておいたらいいんじゃないですか？　向こうは犯人を捕まえるプロですから」

「そうだけど、警察も行き詰ってるんじゃないかと思ってね。何とか協力したいんでいろいろと考えてるんです」

「あつそうだ。もしスーパーマンがいたら、この通り魔をどうやって捕まえると思いますか？」

「そうね。犯人が出てきたところを、どこからともなく現れて捕まえるんじゃないかしら」

「スーパーマンの予知能力か。それしかないかな」

仁美たちと話していて、次の犯行の時期は期末テストの頃だと予測は出来たが、場所までは思いつかない。

十六時半を過ぎた頃、斉藤が帰ってきた。藤村は斉藤を呼ぶと、二人は応接室へと入っていった。藤村は今まで調べたことと、次の犯行予想日のことを斉藤に話した。

「助さん良くやった。言われてみれば確かに中間テストと期末テスト

トの期間に五件の犯行が起きてるよな。これは単なる偶然じゃないな。何か理由があつて、その期間に犯罪を犯してるんだ」

「黄門様、犯人逮捕のためにやってみたい実験があるんですけど、パワーを送ってもらえませんか」

「どんな実験だ？　ここでやっても問題ないのか？」

「次の犯行場所を予測してみたいんです。予知能力の実験です。他にもいろいろあるんですが、先に予知能力の実験をしてみたいんです」

「分かった。パワーを送るぞ」

齊藤が言い終わると同時に、藤村に強力なパワーが送られてきた。藤村は通り魔事件をイメージした。二分ほど経ったが何も予知できなかった。犯行現場も何も浮かんでこない。

「ダメです。僕には予知能力はないみたいです」

「次は、鳥瞰図みたいに上空から街全体を見ることが出来るかどうかの実験です。パワーを送ってください」

再び強力なパワーが送られてきた。藤村は自分の意識が上空にあることをイメージしながら、街全体を鳥のように見ている自分をイメージしていた。

「見える。見えるぞ！」

藤村はそう言いながら、カメラのズームレンズのように、ある場所をズームしてみた。

「見える。はつきりと見える！」

興奮した口調で言いながら、自分に見えている映像を齊藤へ送った。齊藤の頭の中に、街の映像が実に鮮明に映し出された。まるでヘリコプターに乗って、街を眺めているような光景だ。時に望遠に時に広角に、藤村から送られてくる映像は、超高性能のテレビカメラでも成しえないようなものだった。

二分ぐらい経った頃、齊藤はパワーを送るのを止めた。パワーを送る限界は五分だ。二分でもかなり疲れる。瞬間的に送るのはなん

ともないが、送り続けるのは体力を消耗するのだ。

「ふうう、助さん。鳥瞰能力は成功だな。これは犯人を見つけるのに役に立ちそうだな」

「他にやりたいことは？」

「時間を超えられるかどうかをやってみたいんです」

「ひと言で言えば、タイムマシンということか？」

「そうです。過去や未来に行けるかどうかです」

「良く分らんけど、何だか恐ろしい結果になりそうな気がするな」

時間を超えるということは、何かとんでもないことが起きそうな気がしたが、案ずるより生むが易し。斉藤はパワーを送った。藤村は、さつき仁美と岡本と一緒に昼食を食べているところをイメージした。あの時間にタイムスリップしようとしていた。藤村がイメージし始めたのに合わせたかのように、ガタガタと建物が揺れ始めた。

「地震だ！」

誰かが叫んだ。斉藤は嫌な予感がしてパワーを送るのを止めた。パワーが切れたのと同時に、建物の揺れが治まった。

「所長、今の地震は震度三ぐらいはありましたよね。テレビ点けてみましょうか。速報が出ると思いますから」

仁美が佐々木所長に言いながら、応接室に入ってきた。

「課長、テレビ点けてみますね。今の地震速報が出てると思っていますので」

テレビを点けて五分ほど待ったが、どのチャンネルにも地震速報は出ていない。

「変ですね。震度一ぐらいの弱い地震でも速報が出るのに、あの揺れでなぜ出ないのかしら。どのチャンネルにも出てないですね」

仁美は首を傾げながら、テレビのスイッチを切った。仁美が応接室から出るのを確認した斉藤は、藤村に囁いた。

「助さん、タイムスリップの実験はダメだ。何かとんでもないことが起きるような気がする。今の地震は本当の地震じゃなくて、タイムスリップが引きおこした揺れだぞ」

「僕もそう思いました。もう二度としませんよ。取り返しの付かないことになったら大変ですからね。なにせ超能力は、原爆以上のパワーを発揮することがあるかも知れませんが」

ふたりは、今日の実験はこれで終わりにすることにした。

二時間ほど残業をした斉藤が帰宅したのは、夜の九時ごろだった。着替えを済ませると、早速パソコンを立ち上げた。ブログの書き込みで、通り魔事件に役に立ちそうな情報はなかった。パソコンをシャットダウンし夕食にかかる、今日の実験が思い出された。

結局、鳥瞰能力だけは成功だったが、いくら長くても五分しか監視できないのが難点だ。その五分を続けると、体力が回復するまでに最低でも三十分の休憩が必要だ。鳥瞰能力は、通り魔事件にとっても使えそうにない。

定時に仕事を終えた藤村は、近くの行きつけのスーパーで夕食の食材を買っていた。独身の藤村は料理を作るのが好きだ。自分で作った料理は格別の味がする。料理が好きなので、余程のことがない限り外食することはない。今晚も自慢の料理で夕食を済ませたあと、パソコンに向かっていた。斉藤のブログ『くたばればカ上司!』の書き込みを見るのが日課になっている。斉藤と同じだ。ブログには、通り魔事件に役に立ちそうな意見は載ってない。

「警察が考えても思いつかないんだから、素人が考えつくわけがないな」

独り言を呟きながら、参考になるサイトはないかと検索を続けたが、そんなサイトがあるわけはなかった。

翌日、いつものように始業時間三十分前に出社した斉藤と藤村は、いつものように黄門会を開いて作戦を練っていた。

「助さん、あれから何かいいアイデアを思いついたか？」

「黄門様、すみません。いろいろと考えてるんですが、何も思いつきません。完全に行き詰まりです。先日成功した鳥瞰能力も、考えてみたら通り魔事件には何の役にも立たないみたいですし・・・」
「実は俺も同じだよ。いくら考えても、まったく何もアイデアが出てこないんだ。まいった」

齊藤の言葉にホツとする自分がそこにいた。

「なんてことだ。よりによってこんな大事な時に、後ろ向きな言葉にホツとするなんて情けない」

自分に喝を入れるかのように腹の中で呟いた藤村は、ふとあることを思いついた。あまりいいアイデアではないが、被害を最小限に食い止めるには、他に選択肢がない。

すでに今月の事件発生から二週間が経過している。何もアイデアが出ないままに時間は過ぎて行く。藤村には焦りがあった。今の状況から行けば、いいアイデアを思いつく自信はなかった。

そうは言っても、時間だけは情け容赦なく進んでいる。藤村は制限爆弾を持たされているような気分だった。そのタイムアップは、十一月末だ。

「黄門様、今思いついたアイデアがあるんですが、そのために今から実験をやるのでパワーを送ってもらえませんか。実験の準備をしますから、ちよつと待ってください」

藤村は一方的に言うつと、自分の机の引き出しから先端が尖ったドライバーを持ってきた。

「黄門様、パワーを送ってください」

藤村に言われ、齊藤は超能力パワーを送った。パワーが送られて来たのを感じた藤村は、持ってきたドライバーを自分の右の太腿に突き刺した。激痛が藤村を襲った。その光景に驚いた齊藤は、パワーを送るのを止めてしまった。パワーが消えたのを感じた藤村が叫んだ。

「パワーを送ってください。これは大事な実験なんです」

パワーが復活した。藤村は、出血している太腿の傷が治っているところをイメージした。強く強くイメージした。太腿の痛みが消えたのは、三分ぐらい経ったところだ。実験の成功を確信しながら、藤村は太腿の傷を見てみた。結果は藤村の予想どおりだった。先ほどまで激痛を伴っていた深さ五センチほどの傷が、跡形もなく消えている。痛みもまったくなくない。なんとというパワーだ。超能力は何でもできるのか！ 藤村は今更ながら、超能力の圧倒的なパワーに全身が総毛立った。

「助さん、実験は成功だったのか？」

「大成功です。黄門様」

「ところで今の実験は、通り魔事件とどう関係があるんだ？」

齊藤は素朴な疑問を口にした。

「言い方が悪いんですが、これは最後の手段です。最悪のことを考えて実験してみたいんです」

「どづいことか分からんだけど」

藤村は以前、奥村美智子の夫の靖弘の癌を、超能力で治した話を持ち出した。あのおとき、癌が治ったところを美智子と靖弘にイメージさせた。その結果、余命半年と言われていた靖弘の癌が、完全に消滅した。正に奇跡だった。

「癌の消滅と今の実験と、どづい関係があるんだ？」

「今のままでいくと正直なところ、いいアイデアが思いつかないかも知れません。そうなった場合、最悪のことが考えられます。次の被害者が出るということですよ」

「分かった。その被害者を助けるために傷を治す実験をしたんだな？」

「それだけじゃないんです。癌のときは、奥さんとご主人が必死でイメージして治ったんですが、僕も治せるかどうかを試してみたんです。もし被害者が重症で危篤だった場合、被害者にイメージさせるのは不可能ですからね」

「なるほど。それで最悪の場合でも被害者を救うことが出来るわけか！」

「まだあるんです。それで被害者が助かった場合、次の犯行日を被害者に予知してもらおうんです」

藤村は、名古屋であったひったくり事件のことを話し始めた。この犯人も斉藤と藤村の超能力で捕まえたのだが、その前提となったのが、ひったくり被害者の小田香織の予知だ。小田が斉藤の超能力パワーにより、次の犯行日を予知したのだ。

「そうか！ 被害者に次の犯行日を予知させるわけだな？」

「これは最悪の場合のシナリオです。あくまで前提は犯人を捕まえ、事件を未然に防ぐことですから」

「お前の言うとおりだ。しかし、最悪のことも考えておく必要はあるよな。」

そのときになってパニックにならないためにも」

腕時計を見てみると、始業時間の五分前だ。社員は全員出社していた。応接室を出てきた二人が席に着くと、松下仁美が藤村に話しかけてきた。

「いつも課長と応接室にいらっしゃるでしょう。何の話をしているの？ 皆が気にしてるわよ」

「結婚の悩み相談だよ。どうしたら結婚できるか、課長に相談してるの。仁美ちゃん何かアドバイスある？」

「まずそのアホな性格を治すことね」

藤村は適当にお茶を濁すと、今日会う予定の客先へ電話を掛け始めた。

それから一週間が経った。次の通り魔事件が起きるのは時間の問題だ。斉藤と藤村は、次の犯行に向けたタイマーが情け容赦なくカウントダウンしていくのが恐ろしかった。二人は未だに、これといった犯人逮捕のアイデアを思いついていない。気持ちだけは焦るのだが、まったくと言っていいほど、何もアイデアが浮かばない。

「まずい。このままだと藤村が言った最悪のシナリオになってしまふ。もつともつと必死で考えないとダメだ。考える、考える、考える！」

斉藤は自分にプレッシャーをかけた。人間は窮地に追い込まれると何か善後策を思いつくものだ。今までも、そうやってきたという自負があったが、焦ってもプレッシャーをかけても何も閃かない。

定時で帰宅した斉藤は、藤村が言った最悪のシナリオを考え直してみた。アイデアが思いつかない以上は、最悪のシナリオに頼るしかない。そのためにはシナリオは完璧でないといけない。もし何かミスでもあれば、被害者の生命に関わることになる。

「最悪の場合、被害者が刺されることになって、被害者を超能力で助けて、被害者に次の事件を予知してもらい、犯人を捕まえる。んんん、筋書きとしてはいいみたいだけど、何か変だな？」

考えれば考えるほど、単純な何かが抜けているような気がする。斉藤は気分転換のために、今まで藤村と二人で解決してきた出来事を思い出してみた。

ひったくり事件、癌が完治した件、結婚詐欺の件、バカ上司成敗などは、今回の通り魔事件を解決するために起きた出来事のような

気がする。言うなれば、一連の事件で使った超能力の全てを駆使しないと、今回の通り魔事件は解決できないような気がする。今日も何のアイデアも浮かばず、諦めて寝ようとしたときだ。

「肝心なことが抜けてるぞ！」

斉藤は小さく呟くと、頭を抱えながら深く溜息をついた。

「被害者が刺されたとして、誰が俺たちに知らせるんだ？ 被害者の発見されるのが遅かったら？」

全身に鳥肌が立ってきた。最悪のシナリオが成り立たないのだ。

「まずいぞ！ まずいぞ！ まずいぞ！」

斉藤は居ても立ってもいられなくなり、藤村に電話をした。

「助さん、パワーを送るから今すぐ俺の部屋に来てくれ」

電話をしてから五秒と経たないうちに、藤村の姿が斉藤の部屋に現れた。知らない人が見たら幽霊か、高等なイリュージョンと思えるほどの現れかただ。

「助さん、まずいぞ！ お前の考えた最悪の場合のシナリオが成り立たないんだ。もし次に通り魔事件が起きたら、被害者は死ぬ可能性が大きいぞ」

「冗談でしょう！ 画期的なアイデアは浮かんでないですけど、最悪のシナリオは完璧だと思いますよ」

自信たっぷりと言う藤村に、シナリオに抜けていた部分を説明し始めた。

「黄門様、気づきませんでした。まずいですね。早く何らかの策を

考えないと、被害者は確実に殺されますよ。何とかしなくては。」

「とにかくそういう状況だ。犯行まで時間があまりないから、必死で考えよう。今のところそれしかない。今日のところは一旦帰って、明日から考えてくれ。時間が必要なら、会社を休んでもいいぞ」

「分かりました。今から考えてみます」

そう言うと、藤村の姿が一瞬で消えてしまった。斉藤はパワーを送るのを止めた。

斉藤と藤村は、朝からイライラしていた。通り魔事件の犯人を捕まえるためのアイデアが浮かばないのだ。犯行日は十一月下旬の期末テストの日だと推測できていたが、時間と場所が分からない。

「時間と場所さえ分かれば何とかなるのに！」

通勤途中、二人は同じことを何度も呟いていた。会社に着いた二人は、いつものように応接室で話し合ったが、結局、何も実ることなく時間だけが過ぎていった。

昼休みを知らせるチャイムが鳴った。あまり食欲のない斉藤は、コンビニ弁当を買いに行くという藤村に、オニギリを買ってくるよう頼んだ。

「課長、今日は会社で食べるんですか？ だったら私たちと一緒に食べましょうよ」

松下仁美が誘ってきた。藤村は言われる前に応接室へ入っていた。

「課長、この前藤村さんに聞いたんですけど、応接室で藤村さんの結婚相談を聞いているそうですね？」

「おいおい、仁美ちゃん、あれは冗談だよ。真に受けるなよ。ね、斉藤さん」

藤村は弁当が喉に詰まったように咽ながら反論した。

「実は仁美ちゃん、そのとおりなんだ。こいつのお袋さんから電話があつて、何とか嫁さんの面倒を見てやってくれて頼まれてね」

「藤村さん、私が紹介してあげましょうか？ その代わり、真面目にお付き合いしてくださいよ。遊びはダメですから」

「ほらほらほら、斉藤さん。そんなデタラメ言わないでくださいよ。岡本さんにも仁美ちゃんにも冗談は通じないんですから。もう勘弁してくださいよ」

ふてくされた藤村の様子が可笑しくて大笑いしていると、仁美が手提げ袋からおもむろに女性雑誌を取り出した。

「藤村さん、結婚で悩んでいるんだったら、いいものを見せてあげますよ」

仁美は女性雑誌の占いのページを開いて、藤村の前に置いた。

「仁美ちゃん、ありがとう。好意はありがたいけど、俺は別に結婚で悩んでなんかいないの。さっきの話は全部デタラメ。斉藤さんが言ったのもウソ。分かった？」

「照れないでいいですよ。私には分かりますから。え〜っと、藤村さんは何座ですか？」

「ええい、こうなったらやけくそだ。乙女座だよ」

「乙女座の男性ですが・・・」

仁美は、雑誌に書いてある乙女座の運勢を、さも正解のような口調で説明し始めた。

「仁美ちゃん、悪いけど俺は占いなんか全く信じないからね。そんなのが当たるわけないだろう。みんな口から出まかせ言ってるだけだよ。そもそも、金儲けでやってるといのがおかしいだろ？」

「確かにいい加減な占い師もいるかもしれないけど、ここに書いてある占い師の予言は良く当たるんですよ。本当なんだから」

「へええ、じゃあ、俺は何歳で結婚するって？」

「だから、ここに書いてあるのは乙女座の人の一般的なことしか書いてないから、個人的に占って欲しかったら直接会ってみることでよ。場所を教えてあげましょうか？」

「いや、いいよ。適当なことを聞くためにお金は払いたくないから」

二人の会話を聞いていた斉藤の脳裏に、もしかしたら？ という閃きが走った。

「仁美ちゃん、その雑誌ちよつと見てもいいかな？」

「いいですよ。ほら、課長は占いのことを信じてくれるんですよ。藤村さんも上司を見習わなくっちゃ」

仁美の言葉は斉藤の耳には入っていないかった。斉藤は占いのペー
ジを食い入るように見ている。真剣に占いを見ている斉藤に、仁美
が恐る恐る言った。

「課長、もし良かったらその雑誌、持って帰ってもいいですよ。私
はもう全部読みましたから」

「ああ、いいんだよ仁美ちゃん。俺も藤村と一緒に占いは信じない
んだけど、一体どんなことが書いてあるのかなと、ちよつと興味が
湧いただけなんだ。

ありがとう。参考になったよ」

斉藤は雑誌を読んで、通り魔事件の犯人逮捕に確かな手応えを感
じていた。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。席に戻った
斉藤に、藤村が小声で聞いてきた。

「雑誌に何かあったんですか？ いやに真剣でしたけど」

「ちよつとな。気になることが浮かんだんだ。もう少し調べてから
お前にも教えるよ。それはそうと例の件だけど、時間が必要だった
ら昼から休んでもいいぞ。どうする？」

「時間がないので、休んで考えてみます」

「よろしく頼む。次の犯行が起きるのを何とか食い止めないといけ
ないからな。最悪のシナリオでも何でもいいから、とにかく何か策
を考えてくれ。俺も必死で考えるから」

藤村は昼から有給休暇を取った。

アパートに帰った藤村は、斉藤に言われたことをもう一度噛み締めてみた。

「非常識に考えているか？」

言われてみればそのとおりだと思った。そもそも超能力自体が常識では考えられない非常識なものだ。その非常識なものでないと解決できないものが、現実にはたくさん存在する。それは身近なものから、グローバルなまで様々だ。斉藤にかかれれば誰もが超能力者になれる。誰もが超能力を発揮できるのだ。その非常識な力で、常識で考えていては解決できないことを解決してきたのだ。藤村は自分に言い聞かせた。非常識に考える！と。

翌日、いつものように始業時間の三十分前に出社した斉藤と藤村は、応接室で黄門会を開いていた。通り魔事件の解決策を話し合うためだ。

「黄門様すみません。昨日、休みをもらってまで考えたんですが、何も思いつきませんでした。どうしてもアイデアが浮かばないんです」

「謝る必要はないよ。思いつかないのは悪いことじゃないからな。ただ、ひとつ言い忘れてたことがあったよ。超能力というのは、俺たちみたいな能力だけじゃないということだ」

「どういう意味ですか？ 他にも何か違った超能力があるんですか？」

「良く目にしてるじゃないか。俺もお前も一般の人たちも。その超能力者たちは俺たちと違って、それを商売にして生活してるけどな」

「もったいぶらないで教えてくださいよ」

「その超能力者たちとは、占い師だよ」

藤村は昨日、斉藤が雑誌の占いを真剣に見ていたのを思い出した。「黄門様、昨日雑誌の占いを真剣に見ていたのは、そういうことだったんですか？」

「能力を超えた能力を超能力と言うんだから、彼ら占い師も、能力を超えた能力を持つてるだろう？ だから超能力者だよ」

「占い師も超能力者なんですか？」

藤村は斉藤の意外な言葉に、目から鱗が落ちる思いがした。

「非常識に考えるというのはそういうことだったのか！」

心の中で叫んだ藤村だったが、占い師に予言してもらおうということには納得がいかない。

斉藤は、占い師の力を借りるつもりだった。自分たちだけの能力には限界がある。ならば餅は餅屋に任せたほうがいいだろう。占い師は将来を予言する能力を持っているのだから、犯行現場や犯行期日なども分かるはずだ。

「黄門様、占い師に次の犯行を聞くんですよね？」

気乗りのしない表情で藤村は尋ねた。

「そうだ。犯行の日時と場所をな」

「そんなの当てになるわけじゃないですか。占いなんて、いかさまが多いんですから。彼らは適当に言っつて、当たるも八卦、当たらぬも八卦という感じでしょう？ 当たらなくても何の責任もないんですからね」

「確かにそうかも知れんけど、鬼門敦煌や四柱推命、星座占い、人相・手相、タロット占いなどいろいろあるだろう。それらは歴史もあるし、一概にいかさまとは言えないと思うよ。もちろんいかさまの占い師が多いのも事実だけだな」

「それで、占い師に聞いてみるとして、どこの占い師に聞くんです

か？」

「昨日、ネットで調べてみたんだ。口コミでの評判なども。それでこの五人に絞ってみたんだ」

齊藤が差し出した紙には、五人の占い師の名前と住所が書いてある。

「助さん、今日の午前中に、この五人に会ってみよう」

「またまた急ですね」

「当たり前だろう。ぐずぐずしてたら、次の犯行を止められないからな」

「言われるとおりです。早速、占い師に会ってみましょう。でも、彼らの言っていることが本当か、あるいは適当に口から出任せを言っているか分からないですよね？」

「それは大丈夫だ。お前が占い師の心を読めば、すぐに分かるだろう?。」

「なるほど！ さすが黄門様。では早速、行ってみますか！」

「慌てるなよ。今から仕事なんだぞ。仕事の合間を見て行くから、そのつもりでいてくれ」

最初の占い師は、福岡の秋山隆葉という女性占い師だ。斉藤と藤村は、福岡へ瞬間移動した。秋山は五十歳ぐらいに見える。藤村が椅子に座り、質問してみた。

「東京で起きている連続通り魔事件を占って欲しいんですが、これも占えるんですか？」

「大丈夫です。占えますが、その事件の何を占えばいいんでしょうか？」

「次の犯行日時と場所を占って欲しいんです」

そういつと藤村は、秋山の頭の中を読み始めた。見た感じでは、秋山は真剣に占っているように見える。

「そんなことが分かるわけないだろう。適当に答えておくか。確か新聞には、石神井公園の半径十キロメートル以内と書いてあったな。日時は一ヶ月以内として、住所が分からんな・・・」

「すみません。もう結構です。住所が分からないんでしょう？ 日時も適当に一ヶ月以内と答えられても、意味がないですから」

秋山は自分の考えていたことをずばりと言いついてられ、戸惑っている。

「もう少し、占いを勉強したほうがいいんじゃないですか？ 金儲け主義を悪いとは言いませんけど、適当に答えるのは良心が痛むんじゃないですか」

藤村は言い終わると、斉藤と一緒に広島に瞬間移動した。目の前から忽然と消えた斉藤と藤村を見た秋山は、まるで幽霊でも見たかのような血の気の引いた顔で、テーブルと椅子を慌てて片付け始め

た。

広島のおい師は、坂本康雄というおい師らしからぬ平凡な名前だ。福岡のおい師にしたのと同じ質問をした藤村に、坂本は答えた。

「私は、そういった事件性のものを占うことはできません。あくまで、目の前の方に関する占いです。申し訳ありません」

「そうですか。分かりました。では私の結婚運を見てもらえますか？」

この際とばかりに藤村は、気にもしていない結婚運について尋ねてみた。

「三十五歳で結婚します。相手は、今の仕事に関係している人です」「えっ、三十五歳ですか。社内結婚ということですか？」

「違います。仕事の取引先の女性です。相手は二十八歳です」「ありがとうございます」

お礼を言っただけ料金を払った藤村は、人影のいないところまで斉藤と歩いていくと、名古屋へ瞬間移動した。

「藤村良かったじゃないか。三十五歳で結婚できるそうだから。相手は二十八歳。誰か心当たりがあるか？」

「斉藤さん、そんなこと言ったら今度から客先へ行ったときに、変に意識するじゃないですか。僕らの目的は通り魔事件解決ですよ。お忘れなく」

「まあ、お前のほうも解決しそうだから安心したよ。こればかりは超能力でも解決できないからな。アッハッハッハッハ」

「冗談を言いながら着いたところは、女性おい師の店だ。名前は蘇龍昇運と書いてある。見ようによっては五十歳ぐらいに見えるし、六十歳ぐらいにも見える不思議な雰囲気を持ったおい師だ。」

椅子に座った藤村は、通り魔事件の次の犯行場所と日時を占って欲しいと告げた。昇運は精神統一をするような仕草で占い始めた。藤村は彼女の頭の中を読み始めた。その結果を斉藤へ送った。昇運は本物の占い師だ。いかさまではなく真剣に占っている。

斉藤はあることを思いついた。ここで昇運にパワーを送ったら、より正確な占いができるのではないか。そう考えた斉藤は昇運にパワーを送り始めた。昇運の表情が変わった。自信に満ちたような表情になり、無心に占っている。

「分かりました。犯行は十一月二十八日の午前六時です。場所は、石神井公園から南に行った石神井一丁目緑地付近です」

「昇運さん。今言われたことは間違いなく起きますか？」

「今まで何年も占いをやってきましたが、今日ほどははっきりと見えたことはありません。間違いありません。犯行は今言った日時と場所です必ず起きます」

昇運は自信に満ちた声で、きっぱりと言い切った。

「ありがとうございます。これで犯罪が未然に防げると思いますが、立ち入ったことを聞いて申し訳ありませんが、今日はなぜ今まで以上に、はっきりと見えたんですか？」

斉藤の質問に、昇運は穏やかな表情で答えた。

「理由は分かりませんが、何か言葉で言い表せないような力が、身体奥底から突然湧いてきたような感じでした。それと同時に、私の感覚が敏感になったようです」

「ありがとうございます。また何かあったらご相談に来ます」

料金を支払うと、斉藤と藤村は昇運の店を後にした。

「助さん、昇運が言ったことは間違いなさそうだな」

「黄門様、昇運にパワーを送ったんでしょう？ もともと彼女には占いの力があるんですね。それに黄門様の超能力パワーがプラスされて、未来が見えたんでしょうね」

「助さん、そのとおり。もともと特殊な能力を持っている人間に俺のパワーを送ると、その能力が劇的に強くなるんだろ。だから昇運が占ったことは、百パーセント当たると思うよ」

「昇運の予言の期日まで二週間ありますから、取りあえずは大丈夫ですね。」

今度、現場の下調べに行ってみましょう。それと、残り二人の占い師はもういいですよね？」

会社に戻ってきた二人は、光が見えたと確信した。犯行までは約十日だ。

その間に綿密な作戦を立てなければならない。ひつたくり犯を捕らえたときと違って、今回は殺人犯だ。もし失敗したら、被害者が殺されることになる。失敗は絶対に許されない。

「助さん、作戦会議は明日にしよう。今日は疲れたから、早く帰って寝ることにするよ」

「黄門様が倒れたら何も出来ませんからね。ゆっくり休んで体力を回復してください」

斉藤は疲れていた。パワーを送ると、かなりの体力を消耗してしまからだ。

パワーを送り続けるのは五分が限界だ。理由は体力がもたないからだ。瞬間的なパワーにしても、縄跳びを何十回したぐらいの体力を消耗する。

帰宅した斉藤は夕食の前に風呂に入った。十分ほど浸かっただけ

だ。冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、乾いた喉に一気に流し込んだ。冷えたビールが五臓六腑に染み渡る。缶ビール一本だけだが、アルコールが回ったのか、急に強い睡魔に襲われ、そのままベッドに潜り込んだ。五秒と経たないうちに寝息が聞こえ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3271w/>

サラリーマン水戸黄門

2011年11月10日08時02分発行